「図書館って、強い能力だよな」「お前は何を言ってるんだ」

クラウディ

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトルのような会話を友人と話していた時に、唐突に思いついた話です。

失踪しないように頑張りますが、何分他の作品もあるため、投稿は遅れるかもしれません。

そこのところご容赦お願いします。

感想と評価はどしどし送ってきてください。

作者が喜びますし、失踪する可能性が低くなります。

# 目次


真名：『管理人』 1
この世界での原初の思い出 7
朝食 13
第一特異点　邪竜百年戦争　オルレアン
第一特異点へ向けて 18
初陣 26
ジャンヌ・ダルクとの邂逅 35
ジャンヌと管理人 43
オルレアンへ向けて 53
魔女との邂逅 61
魔女の考察 69
一時の休息 79
仲間を加えて 89
凄女（聖女）マルタ 101
図書館女子会 111
竜殺しを求めて…… 124
リヨンにて 131
ジークフリートとの邂逅 138
バーサーク・サーヴァントとの戦闘 147
決戦前夜 155
第一特異点最後の夜 163
決戦の日 173
進軍 178

邪竜失墜 ―― 182
『魔女』の正体 ―― 188
第一特異点　終幕 ―― 196
第一特異点後の幕間
第一特異点からの帰還 ―― 202
運命を捻じ曲げられた者 ―― 209
人理修復Ａチーム ―― 217
番外編
Ｚｅｒｏ編：イレギュラーの介入 ―― 224

# 真名：『管理人』

「魔導図書館？」
「はい。魔術や神秘に関する書物が収められた、魔術的に非常に有名なところです」
ここは、南極に存在する施設――「人理継続保障機関カルデア」。
そこの一室で、２人の少女が話をしていた。
一人は、橙色の髪を持ち、快活とした様子がうかがえる少女。
もう一人は、雪のように白い肌とまるでなすびのような色の髪をした、人形のような美貌を持つ少女だ。
そんな２人がいる部屋には、本棚に収まりきらないほどの本が山積みになっていた。
「先輩が持っていた本は、おそらくその図書館に収められていたのでしょう」
少女の言葉に、橙の少女は首をかしげる。
橙色の彼女の名は、「藤丸立香」。
このカルデアに所属する、元一般人だ。
もう一人の少女の名は、「マシュ・キリエライト」。
カルデアで育った彼女もまた、立香同様、元はただの職員だったのだが、今は立香を守るためにサーヴァントとしての力を覚醒させ、立派に戦っている。
しかし、そんなマシュにもわからないことがあった。
それは……自分が持っている本についてだ。
「目に見えるほどの膨大な魔力が込められていますね……。先輩、本当にどうやって手に入れたのですか？」
「え？　う～んと……なんか――」
そう言って立香は自分の手の中にある本をまじまじと見つめる。
表紙には、見たこともない文字で題名が書かれている。
そして何より特徴的なのはその見た目だろう。
絵本や漫画のような大衆向けではなく、まるで王族達が読むような豪華な外見をしており、それ相応の存在感を放っていた。

こんなものを持っていること自体おかしいのだ。
だが、立香とマシュはそれがなんなのかさっぱりわからなかった。
唯一わかることは、これがとんでもない代物であるということだけ。
だからこそ、マシュは立香に聞いてみた。
それに対し、立香はこう答えたのである。
「――カッコいい男の人に、渡された……かな？」
「カッコいい……ですか？」
「うん。テレビに映るようなモデルさんが霞むぐらいのイケメンだったよ！」
そう言いながら立香は目を輝かせて話す。
どうやら相当にカッコよかったらしい。
しかし、立香が言うには、その男は黒いコートを羽織っており、顔は隠されていなかったのだが、その時の立香は幼かったため、はっきりとは覚えていないとのこと。
ただ、記憶に残っているのは、男が自分に向かってこの本を渡したことだけだった。
それをマシュに伝えようとした時である。
ドォン!!　という轟音と共に、部屋の扉が大きく開かれた。
そこに立っていたのは、1人の女性。
彼女は立香達を見つけるなり、目を輝かせながら近づいてきた。
「あ、ダ・ヴィンチちゃん！　よっす～！」
「ダ・ヴィンチさん。お疲れ様です」
「よっす～立香ちゃんにマシュ。挨拶をするのは良いんだけど、それより先に聞きたいことがあるんだけどいいかな!?」
目を輝かせていた女性――「レオナルド・ダ・ヴィンチ」は、興奮気味に立香達に詰め寄る。
それに対して立香達は、少し引き気味にだが理由を聞く。
「失敬、要件を言ってなかったね。実は監視カメラの点検をしていた時、立香ちゃん達が話しているのが聞こえたんだ。そうしたら、君達が見覚えのある本を手に談笑している！　これは私も参加せねば！

と思い、こうして駆け付けたわけだよ！」
「えーっと……」
あまりの勢いに困惑する立香だったが、「そういえば、この人はこういう人だったな～」と思い、とりあえず落ち着かせることにした。
そして、一通り説明を終えると、今度はダ・ヴィンチの方が質問する。
「それで立香ちゃん。その本はどうやって手に入れたんだい？」
「えぇっとですね……」
立香は手に持った本を見ながら説明する。
最初は普通に答えていたが、次第に熱が入り始め、最終的には自慢げに語り始めた。
「なるほど……まさか、彼自ら本を託すとは……」
「彼って、まさかこの本の持ち主を知ってるんですか？」
「もちろんだとも！　彼とは私が生きていた頃に知り合ってね！　彼が早々死ぬとは思ってなかったけど、まさか、現代まで生きていて、そして立香ちゃんに渡していたなんてね！」
そう言いながら、ダ・ヴィンチは本の表紙を見る。
そこには、今だ凄まじい存在感を放つ宝具があった。
「そうだ！　ねぇ、立香ちゃん。これを使って、『英霊召喚』をしてみない？」
「え？　『英霊召喚』って何？」
「あぁ、そういえば説明してなかったね。『英霊召喚』というものは……」
それから、ダ・ヴィンチの説明が始まった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「召喚陣、展開完了。どうぞ、先輩」
「ありがとね、マシュ」

あれから数日。
立香は、マシュとともに召喚の準備を行っていた。
といっても、カルデアの設備を使い、ただ魔力を流すだけではあるが。
立香が本の説明を受けた日からすでに一週間が経過しており、その間にダ・ヴィンチの話を聞いた立香は、すぐにでもやってみようと思った。
マシュの方も、立香に危険が及ばないようにサポートをすると約束した。
そんなこんなで、立香は召喚サークルの真ん中に本を置き、呪文を唱える。
今まで一度もやったことがない行為。
それでも、驚くほどすらすらと言葉が紡がれていった。
「素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」
立香の言葉に反応して、召喚サークルが光り輝く。
「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。　繰り返すつどに五度。　ただ、満たされる刻を破却する」
サークルがさらに輝きを増していく。
それはまるで、何か強大なものがこの世に呼び出されるが如く、眩いものだった。
「――――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。人理の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
詠唱が進むごとに、光がどんどん強くなっていく。
サークルの回転も速くなり、魔力が召喚ルームに吹き荒れる。
「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」
体を通る魔力の異物感に、頭がくらくらとするも、詠唱はやめない。
ここで止めるわけにはいかないのだ。
自分の夢を叶えるためには。
あの日、図書室で出会った彼のようになりたいのなら。

だから、立香は最後まで唱えきった。
「汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」
そして、ついに召喚が成功した。
光の奔流が収まると同時に、立香達は目を開けていられなくなる。
数秒後、ようやく視界を確保できた立香達の前には、1人の男性がいた。
少しだけ赤みがかった短髪に、貴族服と魔法使いのローブが融合したかのような衣装を着込んでいる。
立香達を見て微笑んでいる彼は、静かに口を開いた。
「君が、強大な力に抗う素晴らしいものかい？」
その声を聞いた瞬間、立香はひどく懐かしい光景を思い出す。
それは、召喚サークルの真ん中に置いている本をもらった日のこと。
その時に言われた台詞と同じだったからだ。
そのことに立香は驚きながらも、ゆっくりと答える。
「うん！　人理修復っていうよくわかんないものに巻き込まれちゃったけど、大切なものを守りたいから、頑張って世界を救おうとしています！」
立香の言葉を聞き、男は満足そうに笑う。
そして、立香達に右手を差し出した。
握手を求めているようだが、まだ信用されていないのか、マシュが警戒しながら近づく。
しかし、男の手に触れた途端、信じられないことが起こった。
なんと、男のもう片方の手に、突然本が現れたのである。
それも、立香達が持っているものと全く同じものだ。
驚いている立香たちに、男は優しく言う。
「なら、その行く末を、僕にも見させてもらえるかな？」
「はい！　仲間が増えるなら、大歓迎です！」
「ふふっ。あの頃から変わらず元気だね。立香君」
「変わらないのはお兄さんもですよ。私のこと、覚えてくれていたん

ですね」
そう言って立香は嬉しそうに笑ったが、すぐに表情を引き締めてマシュと共に男を見る。
すると、男は立香と同じように真剣な顔になり、言った。
「さて、召喚に応じ参上した。サーヴァントクラスはアルターエゴ。真名は特にない。「管理人」とでも呼んでくれ」
「よろしくお願いします！　管理人さん！」
こうして、人理修復の旅は始まったのである。
心強い、新たな仲間とともに。

# この世界での原初の思い出

『ふぅん？　君はこの世界とは別の世界から来て、様々な世界を巡りながら、その本とか言うのを書いてるんだ』
『そうだよギル。いろんな人と出会って、その人たちのことを記すんだ。これからも、素晴らしいものを忘れないようにね！』
夢を見る。
夢を見る。
自身の知らない夢を見る。それは誰かの記憶。
それは誰かの記録。
それは誰かの夢。
『まぁ、いいや。さてと、今日も冒険に行こうか！』
『分かったよギル。これも君の冒険譚の一つとして書けるからね！頑張ろう！』
これは、誰のものなのかわからない記憶。
それは、自分ではない自分が体験したもの。
でも、不思議と嫌じゃない。むしろ、どこか心地よい感じすらする。
だからだろう。
自分はこの夢を見続けたいと思うのだ。
場面が変わった。
『おい『――――』。そこの土塊は何だ？』
『う～んと……エルキドゥ、挨拶できる？』
『心配は無用だよ『――――』』
今度は見たことのない場所にいる。
しかも、どうやら私は何かを喋っているみたいだが、上手く聞き取れない。
ただ、わかることは一つだけある。
（なんか場の空気が最悪なんだけどぉ!?）
今、夢に見ている人物たちの周りだけが、とても険悪な雰囲気になっていたのだ。
『ッチ！　気安く我の友の名を呼ぶな。泥人形風情が』

『……えっと、ごめんね？』
金髪の男が不機嫌そうに吐き捨てると、緑色の髪をした女……女？が困ったように謝る。
それを見た金髪の男が、さらに苛立ちを募らせた様子で怒鳴りつけた。
おそらく、喧嘩になると思ったのであろう。
もう一人の青年――「管理人」さんが、慌てて間に入る。
だけど、それを無視して、金髪の男は問いかけた。
『それで？　貴様はなんの用でここに来た？』
『神の命だ。君の横暴を正せ、とね』
『土塊ごときが、我を正すだと……？　クックック……フッハハハハハハハハハ!!　面白い！　せいぜい壊れるなよ人形！』
『そう簡単に壊されないよ。君と違って僕は頑丈なんだから』
二人の会話を聞いていると、ますます状況がわからなくなってきた。
とりあえず、あの二人には因縁があるらしい。
そして始まった戦い。
私達が立っていた場所（王宮の中みたいだった）を破壊するほどの戦闘は、私が今まで見てきたサーヴァントたちのどれにも当てはまらないほど、凄まじいものだった。
『ん～……戦うのは良いけど、ここじゃなくてあっちでね？』
『なっ!?』
『わっ!?』
それを見ていた、管理人さんは周りが壊されてはたまらないと、２人をこれまたすさまじい勢いで王宮の外にぶん投げる。
しばらくして、２人が飛んでいった先では、爆発音や土煙が舞いだした。
（いや、管理人さんつっよ!?　ってか、あの王様みたいな人相手にあれだけのことができるなんて、どんだけ規格外なのあの人!!??）
『……そこの君』
「ひゃ、ひゃい！」

あまりのことに唖然としていると、管理人さんはこちらに近づいてくる。
そして、話しかけられた。
あれ？
これって夢だったよね？
なんで、管理人さんが話しかけてきてるの？
え？　どういうこと？
『やっぱり、立香君か。なんでこんなところにいるんだい？』
「そ、それはこっちのセリフですよ！　管理人さんこそどうしてここに!?」
まさかの管理人さん登場に驚いていると、彼は少し考える素振りを見せてから答えてくれた。
『ここは僕と君の夢の中。多分、立香君が僕の夢の中……『記録』に入り込んじゃったんだ』
……はい？
夢の中で夢を見ている？
そんな馬鹿なことがあるのか？
いやでも、実際に管理人さんがいるわけだし……。
頭を抱えて悩んでいると、管理人さんは私の肩に手を置いた。
『この後も見ていいけど、流石に起きる時間だ。さぁ、目を覚ましなさい』
「え、ちょ!?　ま――」
その瞬間、意識が遠のく感覚に襲われる。
きっと、もう目が覚めるのだろう。
最後に見えたのは、優しく微笑む管理人の顔だった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「待ってぇ!?」

「わっ！　ど、どうしたんですか先輩？」
目覚めて最初に目にしたのは、心配そうな顔をして覗き込んでいるマシュの顔だった。
……うん、良かった。ちゃんと夢から戻れたみたい。
ホッと胸を撫で下ろしながら体を起こす。
辺りを見回せば、そこはいつもの部屋。
ふかふか……とまではいかないまでも、それなりに良いベットから降り、マシュに先程見た夢を話す。
「金髪の王様に……緑色の髪をした人……そして、その二人と親しそうにしていた管理人さんですか？」
「うん……。それと、すっごい戦いをしてたかなぁ……。こう、ズドーンって感じの攻撃とかシュイーンって感じで移動していて……」
身振り手振りを交えつつ説明すると、マシュは考え込むように顎に手を添える。
すると、何か思いついたようにハッとして、私に声をかけた。
もしかしたら、これがヒントになったかもしれない。
そう思い、彼女の話を聞くことにする。
「すみません先輩……。流石にわかりません……」
「ありゃりゃ……ま、こんなので分かったら、マシュが天才すぎるよね……後輩に追い越される先輩……兄より優れた弟……俺の名を言ってみろぉ……」
「せ、先輩！　変なところにトリップしないでください！」
あははーっと遠い目をしながら呟いていると、慌てて止めてくるマシュ。
ごめんごめ～んと謝ると、彼女は呆れながらも許してくれた。
それにしても……あの二人は一体何者だったんだろう？
そう考えながら部屋を出て、廊下を歩いていると……。
「あれ？　管理人さんがいますね」
「ほんとだ。何してるんだろ……」
そこには、何故か扉の前で本を開いている管理人さんの姿が。
彼は本を読みながら、時折チラリと扉を見て、また読み始めるとい

うのを繰り返していた。
気になるなら入って行けばいいのに……と思いながら、声をかけてみた。
「管理人さん、こんにちは！」
「こんにちは。管理人さん」
「ん？　あぁ、立香君とマシュ君か。どうだい？　いい夢は見れたかな？」
挨拶をしただけなのに、管理人さんは少し驚いたような表情を浮かべた後、笑顔で聞いてきた。
私はう～んと腕を組んで悩み、それから答える。
あの二人のことはよくわからないけど、とても楽しい夢だったことだけは確かだ。
だから、とりあえずそのことは後にするとして、何故扉の前で本を読んでいたのか聞いてみた。
「あの、なんで扉の前で本を読んでいたんですか？」
「ん～……ちょっとした準備中かな？」
「準備中、ですか？」
「そう。僕が保有する図書館をここに『繋げる』ためのね」
「え？」
「え!?」
私は首を傾げ、マシュは驚いたような声を上げる。
そんな私たちの様子を見た管理人さんは苦笑しながら説明を始めた。
そもそも、私達がいるこの世界は、現在、人理焼却という事態にあっていて、カルデア以外の歴史が全部燃えちゃっている状態らしい。
だから、外に出ようとすれば、たちまち燃えて死んでしまう。
それを解決するために、世界が燃えている原因となった七つの『特異点』を修復するために、私達は戦う……らしいのだ。
そう、マシュが分かりやすく教えてくれたので、なんとか理解できた。
でも、それはそれとして、今の話を聞いて、ある疑問が浮かんでく

る。
　それは、管理人さんの図書館はカルデアの外にあるということだ。
「カルデア以外のすべてが燃えている状況で、このカルデアどころか、魔術の総本山――「時計塔」以上に大きいと言われている図書館を持ってくるなんて可能なのでしょうか!?」
　マシュの言葉に、私は確かにそうだと思った。
　仮に、カルデアの外にそういう場所があったとしても、移動するだけで大変だし、そこに行くまでに焼け死ぬ可能性がある。
　だけど、管理人さんは図書館を『繋げる』と言った。
　なら、
「こっちに持ってくるんですか？　図書館自体を？」
「そうだね。正確には、僕が所有している図書館の扉と、このカルデアを繋ぐわけだ。そうすることで、こちら側に持ってくるんだよ」
　なんでもないことのように話す管理人さんだが、とんでもない事を言っている気がする……。
　マシュも目を丸くして驚いているし……。
　なんでこの人だけ、住んでる世界が○リーポッターなの……？
「ま、それもあと十秒ほどで終わるし、しばらくは中の整理をしようと思うよ。人理焼却で消滅していないとはいえ、多少なりとも影響は出ていると思うから、君達は食堂に行ってみると良いかもね」
　そう言うと、管理人さんはパタンと本を閉じ、部屋の扉に手をかける。
　そして、私達に振り向くと、いつも通りの優しい声で言った。
「それじゃ、また後でね？」
「あ、はい……」
　思わず返事をするが、彼はそのまま部屋の中に消えていく。
　残された私たちは、顔を見合わせて、それからゆっくりと歩き出した。

# 朝食

「お腹空いた～！　エミヤ～！　ご飯作って～！」
「はいはい、朝から元気なようで何よりだ、マスター」
厨房に行くと、そこには既に先客がいた。
赤い外套を着た男性で、白い髪と褐色肌が特徴の男性だ。
彼は私が入ってくると、すぐに手を止めて振り返った。
彼はエプロンを身に着けており、なぜか様になっている。
彼のクラスはアーチャーなのに……。
「塩サバ定食一つ！」
「私も同じのを」
「了解した」
注文すると、彼はてきぱきと調理を始める。
慣れた様子なので、きっと普段から料理をしているんだろう。
やっぱあの人アーチャーじゃないよ。
絶対、クラス『オカン』とかだよ。
「む？　何やら変なことを考えなかったかマスター？」
「考えてない！　断じて！」
うわっ、鋭い……。
さすがに心を読むことは出来ないだろうけど、勘が良いのかな？
私の表情の変化を見て取ったエミヤは、ふっと笑って作業に戻る。
うぅ……なんか負けた気分だ。
「もぐもぐ……やはり、シロウのご飯は美味しいですね」
「あ、アルトリアさんもいたんだ」
「おはようございますセイバーさん」
「ええ。おはようございます。マスターにマシュ」
私たちが話していると、いつの間にか後ろに来ていたのか、金髪碧眼の少女が立っていた。
彼女はアルトリア・ペンドラゴンさん。
アーサー王として有名な人で、私達が皆を召喚する前に挑んでいた特異点Ｆでは、強敵として立ちはだかった相手だ。

だけど、その後いろいろあって味方になってくれた人でもある。
ちなみに、このカルデアには彼女の他にもサーヴァントが何人もいる。
みんな協力的だし、とてもいい人たちばかりだ。
特異点で戦った記憶があるだけに最初は少し怖かったけど、人理のために一緒に戦ってくれると言ってくれて嬉しかった。
今では頼れる仲間である。
そんな彼女も、今は朝食を食べに来たらしい。
サーヴァントに食事は必要ないのだが、彼女は食事が好きらしい。
なんでも、故郷の飯が不味くて、現代の進歩した食べ物に感動したという事だった。
うん、それは確かに分かる気がする。
このカルデア……というか、エミヤのごはんはとてもおいしい。
私だって毎日食べても飽きないだろう。
「……そう言えば、アルトリアさんって、エミヤのことをシロウって呼ぶけど、知り合いなの？　やっぱり生前の知り合い？」
ふと気になったので聞いてみる。
アルトリアさんは聖杯戦争という戦いの中で出会った英霊だから、当然、その時の記憶を持っているはずだ。
という事は、エミヤの事も知っているはずなのだが、何故か、顔を赤らめてこう言った。
「シロウは、私の鞘です……」
「はい？」
「え？」
「ブッホォッ!?」
え？
鞘？
ドユコト？
なんか、エミヤが厨房で吹き出してるけど……マジで何があったの？
「ん、んんっ！　その話はまた今度にすればいいんじゃないかね？」

咳払いをした後、エミヤは誤魔化すように話題を変えた。
あからさま過ぎて逆に怪しい気がするんだけど……。
でもまぁ、本人が言うならこれ以上は聞かない方が良いのかもしれない。
私はそう思って引き下がることにした。
「さて、お待たせしたな。塩サバ定食二人前だ」
「おおっ！　おいしそう！　いただきます！」
「いただきます」
運ばれてきた料理を前に、テンションが上がる。
箸を手に取り、早速一口。
はむはむ……
う～まい！
ご飯が進む進む！
焼き加減が絶妙で、身がホロリとほぐれる！
マシュの方も美味しそうに食べており、幸せそうだ。
しかし、アルトリアさんの方は、どこか不満そうな顔で塩サバを見つめている。
どうしたんだろう？
「シロウ……。何故先程の発言を邪魔したのですか？」
「うっ……。ひ、人には聞かれたくないようなことがあるのだよ」
二人は何か話し合っているみたいだが、よく聞こえない。
一体なんの話をしているんだろう？
そんなことを考えていると、食堂に誰かが入ってきた。
「お～お～、お熱いことで」
「ランサー……貴様も朝から騒々しいぞ。静かにできないのか？」
赤い槍を持った青年はクー・フーリン。
アイルランドの英雄であり、私と契約しているサーヴァントの一人だ。
彼は、ケルト神話の英霊で、何故だかエミヤと仲が悪い。
いつも喧嘩ばかりしているが、なんだかんだ言って仲が良いのだろう。

今も軽口を叩いている。
「さてと、俺もマスターたちと同じ、塩サバ定食をもらおうかね」
「了解だ。すぐに用意しよう」
そして、クー・フーリンは注文すると、空いている席に座って、こちらを見た。
じーっと見ている。
なんか、観察されているようだ。
居心地悪いなぁ……何考えてるのかなあの人。
「……どうしたのクーニキ？　こっちをじろじろ見て……」
「いんや？　うまそうに飯を食うな～って思っただけだよ。それと、俺をランサーとして召喚してくれたありがとな嬢ちゃん。これで思う存分戦えるぜ」
にぃ、と笑ってそんなことを言うクー・フーリン。
ああ、そういえばクーニキって、特異点Ｆでは、クラスが槍兵（ランサー）じゃなくて魔術師（キャスター）として現界した人だから、今までは満足に戦えなかったんだっけ？
まぁ、それでも強かったけどね……。
そんな彼が喜んでくれているというなら、私としても嬉しいことだ。
これからもよろしくお願いします。
クー・フーリンが来て少し経った頃だろうか。
今度は紫髪の女性が現れた。
彼女の名前はメディアさん。
どうやら、顔色が悪いようで……。
「どうしたのメディアさん？　顔色が悪いけど……」
「マスター……あまり聞かないで頂戴。強いて言うなら、召喚されたとき、既に先生がいたから驚いただけよ」
あー、なるほど。
そういうことか。
確か、メディアさんの師匠である管理人さんは、メディアさんが子供の頃からの知り合いだったらしい。

だから驚いてしまったということなのか。
……それにしても、メディアさんが驚くなんて珍しいこともあるものだ。
「そんなに驚くの？　管理人さんも同じサーヴァントなのに……」
「……あなたのような普通の人だったら、驚かないんでしょうけど、魔術を学ぶものとしてはあの人ほど規格外な存在はなかなかいないわよ……」
うんざりしたような表情で言うメディアさん。
そこまで言われるとは、いったいどんな人物なんだろう？
ちょっと気になるけど……、今はそれより、ご飯を食べよう！
もぐもぐ……ごっくん。
「ごちそうさま！　大将！　おいしかったよ！」
「誰が大将だ。まるで居酒屋に通う中年ではないかマスター」
「そういうのあんまり気にしないでいいと思うんだけどなぁ……」
エミヤがなんかぶつくさ言ってるが、無視しておこう。
私は食器を片づけると、マシュも同じように食べ終わっていた。
「おいしかったねマシュ！」
「はい！　とても美味でした先輩！」
満面の笑みを浮かべている二人を見て、私はほっこりする。
この笑顔を守るためにも頑張らないと！
その後、私たちはそれぞれの部屋に戻り、準備を整えることにした。

# 第一特異点　邪竜百年戦争　オルレアン

## 第一特異点へ向けて

朝食を食べた後、私達はブリーフィングルームに集まっていた。
そこには、ダヴィンチちゃんを始め、ロマンやカルデアのスタッフ達が揃っている。
「それではこれより、レイシフトの作業を開始する。今回は初の試みとなるので、万全を期すため、彼にも来てもらった！」
「やぁカルデアの諸君。初めましての方は初めまして。そうでなくてもこれからよろしく。私立魔導図書館の管理人だ。『管理人さん』って、気軽に呼んでくれてかまわないよ」
そう言って、朗らかに笑う管理人さんがそこにいた。
相変わらずのイケメンだ。
あの後、皆が集まるまでの間にマシュとかメディアさんから聞かされたんだけど、でるわでるわすっごい偉業……というよりかは異業の数々。
やれ、私でも知ってるヘラクレスっていう大英雄と正面から戦って勝ったことがある。
やれ、とある女の人が海の神『ポセイドン』に襲われそうになってるときは、海を真っ二つにして邪魔した。
やれ、魔術よりも高度な（というかメディアさんでもできない）『魔法』を会得している。
などなど……、とにかくすごい人なのだ。
そんな人と、今からレイシフトをするのか……緊張するなぁ……。
ちなみに、メディアさんは、さっきの食堂での一件以来一言も喋っていない。
やっぱり苦手意識があるみたいだ。
「それでは、立香ちゃん。レイシフトの用意を」
「はい！」
所長代理のロマンに言われ、すでにレイシフト用のスーツに着替え

ている私は、レイシフトをするためのポッド――「コフィン」に入る。
マシュも同じくコフィンに入るが、管理人さんは先程から動かないどころか、部屋を出ていこうとしている。
「ちょちょちょ！　管理人さん!?」
「どこ行こうとしてるんですか!?」
「ん？　いや、図書館を通して君達が向かう先に行こうかな～って考えてるけど？」
図書館にそんな機能が!?
え？　どういうこと？
訳がわからず混乱している私達に、ロマンが説明してくれる。
なんでも、サーヴァントは、私達のような今を生きる人間ではなく、幽霊みたいなものであると。
そのため、私達みたいな手段では移動することができないらしいのだが、管理人さんにはその制限がないらしい。
つまり、管理人さんがいれば、どこでも行けるのだそうだ。
へぇ～便利だなぁ。
そんなことを考えていたら、いつの間にかレイシフトまであと秒読みという状態になっていた。
もう、やるしかない！　私は覚悟を決めると、カウントダウンが始まる。
そして……
5、4、3、2、1、0！
カウントダウンが終わると意識が沈んでいった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「……ふう。無事に転移できましたね、先輩」
「うん。でもここ何処だろう？」
マシュに声をかけられて、足元の感覚がしっかりとしてきて、目が

覚めるとそこは、草原だった。
辺りを見回すが、一面に広がる緑の絨毯。
それ以外何もない。
どうしよう。
本当にここは一体……？
「っと、無事に着いてるみたいだね」
「ひょわっ！……あ、管理人さん」
突然後ろから声をかけられたのでびっくりしてしまった。
振り向くとそこには、いつもの格好をした管理人さんがいた。
よかったぁ～。
２人だけじゃなくて心強いなぁ……。
「それで、マシュは大丈夫かい？」
そう言って、管理人さんはマシュに話しかける。
「はい。体調に身体機能、ともに正常です。問題ありません」
マシュの言葉を聞いて安心したようにうなずくと、今度は虚空に浮かぶ波紋から一冊の本を取り出したかと思うと、パラパラとひとりでにページがめくられていく。
すると、本が光り輝きだし、収まるころには、空中に魔法陣が浮かび上がっていた。
ってか、あの本は何なんだろう？
「ねぇ、管理人さん。その本は何？」
「ん～……カルデアの説明書。昨日のうちに書いておいたよ」
そう言って私に見せてくれたのは、確かに説明書だった。
にしては分厚いんだよねぇ……まるで辞書みたいだなぁ……。
それにしてもカルデアのマニュアルってこんなに分厚くなるのだろうか？
不思議である。
そう思っているうちに、マシュが準備を終えたようで、こちらに来る。
マシュの準備が終わったのを確認すると、管理人さんは魔法陣に手を向ける。

すると、その魔法陣に重なるようにして、空中にカルデアの様子が投影された。
『こちらカルデア管制室。聞こえてるかい？　立香ちゃん、マシュ、それと管理人君』
「聞こえてま～す！」
「はい。感度良好です」
「やっぱり作っておいてよかったね。カルデアのシステムマニュアル」
ロマンの声が聞こえる。
その言葉を聞き届けた管理人さんは、満足そうに微笑むと、状況を報告し始めた。
「ロマン君。こちらは三名……」
「フォーウ！」
「きゃっ！　ふぉ、フォウさん？　何故ここにいるのでしょうか？」
「……それと一匹がいて、それぞれ問題はない」
管理人さんの言葉を遮るようにして現れたのは、マシュに抱き着いてるフォウさんだ。
しかも、管理人さんにはぎ取られて抱っこされてるし……。
何やってんだろこの子？
ロマンも苦笑いしながら、報告を続ける。
曰く、現在、レイシフトは無事完了しており、前回のコフィンなしで行われたレイシフトと比べて非常に安定しているとのこと。
『……という感じだが、本当に異常はないのかい？　何せ人類初の試みだからね。気になるところがあれば、何でも報告してくれ』
「あぁ、報告したいことは他にもあるよ。例えば……」
そう言って、管理人さんは空を見上げる。
それにつられて私達も空を見上げるんだけど、そこには驚愕すべきものが存在していたんだ。
『これは……光の輪……？』
「おそらく、衛星軌道上に展開された大規模な魔術式だろう。まだ完成には至っていないようだが、間違いなく人類の作った代物じゃな

い」
それは、巨大な魔法陣。
私達が今立っている場所の遥か天高く（管理人さんが言うには衛星軌道上）に、そんなものが展開していたのだ。
それを見て私達が驚く中、管理人さんが冷静に解析を行う。
そんなことができるなんてすごいなぁ。
「そうも言ってられなさそうだね。あんな術式、よほどの術者じゃないと展開すらできない。今回の黒幕は相当な相手だろうね」
「……はい。私達の周囲には生命反応が存在しません」
管理人さんの言葉を引き継いで、マシュが周囲の安全を確認。
それを聞いたロマンが声を上げる。
『よし。それじゃあ、今から周辺の地形情報を送るから、そこで情報を集めてきてくれ』
「分かった！」
「了解しました」
「分かったよ」
「フォウ！」
ロマンの指示を受けて、私達は移動を開始する。
とりあえずは、道なりに進んでみようかな。
私の提案に、全員が賛成してくれたので、道なりに進んでいくことにしたのであった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

しばらく進んでいると、マシュと管理人さんが私を守るように前に立つ。
どうしたのだろうか？　と思っていると、少し遠くに見えるのは鎧を纏った騎士達だった。
「先輩、止まって下さい」

「どうやら、この時代……『１４３１年』のフランスの人間だね。どうする？　話を聞きに行くかい？」
管理人さんの言葉に、私は首を横に振る。
正直、怖いというのが本音だ。
いきなり襲われたりしないよね？……でも、このままじゃ何もわからないままだし……。
悩んでいる私の横で、フォウさんが声を上げた。
「フォウ」
「へぷ。どうしたのフォウさん？」
「フォウ、キュウ、フォーウ！」
「前足をあの人たちに向けてどうしたの？　もしかして、話を聞きに行った方がいいの？」
「フォウ！」
「そうだ！」と言いたげに、ふんすっと鼻息を荒くするフォウさん。
その姿に、管理人さんが感心するように言った。
確かに、フォウさんみたいな野生の嗅覚なら何か分かるかもしれないしね。
管理人さんもそれがいいと思ったのか、私に話しかけてきた。
「それじゃ、僕が話を聞いて来よう。安心してくれ。全世界を渡り歩いてきた僕にかかれば、フランス語など、節操のない下半神を叱るより簡単なことさ」
……ん？
なんか、聞き逃せない言葉があったような気がしたけど……気のせいだよね？
管理人さんは自信満々にそう言い切ると、マシュと私を下がらせて前に出ていく。
……うん。
すっごい大人って感じがする。
カルデアにいた大人と言えば、ロマンに、ダ・ヴィンチちゃんに、サーヴァントの皆がいたけど、やっぱり一番年長者って感じがするのは管理人さんだ。

私が頼れるお兄さんって感じなのはドクターだけど……。
――あ、あれ？　なんだか涙が出てきたぞぅ!?
そんな幻聴が聞こえてきたが、それはともかくとして、管理人さんは堂々と近づいていくと、先頭にいる男性に声をかける。
「やぁ、旅の者だが、少し話を聞いてもいいかい？」
「な、なんだお前は……て、敵じゃないのか？」
突然現れた男を警戒している様子の男性。
まぁ、普通は警戒するよね。
すると、管理人さんは懐から取り出した紙を広げ、それを読み上げ始めた。
ちなみにその紙にはフランス語で文章が書かれていたんだけど、どういうわけか私にも読めるようになっている。
マシュに聞いてみると、私が寝ている間に、管理人さんが翻訳魔術を私の体に刻み込んでたらしいのだ。
すごいなぁ。魔術ってそんなこともできるんだ。
そんなことを考えながら、管理人さんの話を聞く。
内容は簡単。
この時代の人達はどうして武装しているのか？　という事についてだ。
当然、男性は管理人さんの質問に対して答えてくれる。
それによると、ここ最近は戦争の休戦中（マシュに聞くと、百年戦争というものらしい）なので武装だけはしていたのだが、最近は未知の襲撃者によって町を攻撃されているため、こうして警戒を強めていたのだという。
なるほど。
「ねぇマシュ。謎の襲撃者ってなんだろうね？」
「情報が少なすぎて分かりません。もしかして、特異点の原因となったものでしょうか？」
マシュと二人で頭を悩ませる。
うーむ。
これは、情報を集める必要があるかも。

とりあえずは、目の前の人達と話をしてみよう。
管理人さんが色々と聞き出しているみたいだし。
そう思って、マシュと一緒に歩き出す。
「すみません。ちょっといいですか？　その謎の襲撃者とは？」
「あ、ああ。実はだな――」
私の言葉に、男性が教えてくれた。
だけど、私にとっては信じがたく、そしてマシュ達のような私より詳しい者達であっても驚愕すべき情報だった。
「――ドラゴンが襲ってきたんだよ」

## 初陣

「ひどい……」
「町がボロボロだね……それに、外壁があまり壊れてない。町の中だけ破壊されてるなんて」
管理人さんの言葉通り、破壊された町並みは外から見た限りではそれほど被害が大きくないように思える。
ただ、それでも町の人の表情は暗く、活気がないように見える。
きっと、この人たちは不安なのだと思う。
「本当に、ドラゴンが襲ってきたんですか？」
「ああ、俺はこの目で見たんだ。トカゲのような体躯に、長い首と鋭い牙。鱗で覆われた翼で空を飛び回り、口から火を吐く化け物――ドラゴンだ」
「……それも、君たちの言う蘇った魔女――『ジャンヌ・ダルク』がけしかけてきたと？」
「……」
管理人さんが男性の肩を掴み、問いただすようにそう言った。
その顔はとても真剣で、まるで怒りに燃えているかのように見える。
対する男性は管理人さんの顔を見つめ、静かに口を開いた。
「……ああ」
「……そうか。すまない、怖がらせるような真似をして」
「いいってことさ。アンタが言うには、聖女様が子供の時に親しく接してたんだろ？　そんな可愛い妹みてぇな存在が、俺らみたいな見知らぬ誰かに『魔女』呼ばわりされてるのは、許せなかったんだろう」
そう言って、男性は笑う。
それを見て、管理人さんは目を伏せる。
その気持ちが私にはよく分かるからこそ、何も言えなかったのだ。
管理人さんは、すっごく長く生きているらしい。
それこそ、神話という時代に生きていたメディアさんやクーニキ、アーサー王として知られているアルトリアさんと既知の仲だという。

そんなに生きているなら、ジャンヌ・ダルクさんとだって知り合ってるはずだ。
親しかった人が見知らぬ誰かに蔑称されているのなら、怒りが湧くのは当たり前。
私だって、大切な仲間や友達が悪く言われてたら、絶対に怒るもん！
……まぁ、私はどちらかと言うと、その人たちに嫌われたりしないかな？　っていう心配の方が大きいんだけど……。
でもまぁそれはともかくとして。
ともあれ、この特異点の原因は分かった。
「ねぇマシュ。そのジャンヌ・ダルクさんが、特異点の原因なのかな？」
「おそらくそうでしょう。この時代に現れた聖女もしくは魔女と呼ばれる人物はジャンヌ・ダルクただ一人ですから」
マシュが確信を持った声で答える。
うん。
私もマシュと同じ意見だ。
問題は、どうやって接触するかということなんだけど……。
管理人さんが聞き込みを再開しようとした、
その時。
何かの咆哮が聞こえた。
「!?　き、来やがった！　奴らが来たぞ！」
「っと、あれがそうだね。……うん、ドラゴンではなくワイバーンのようだ」
『君たちの周囲に、大型の生体反応を感知！　しかも、速い……！』
咆哮が聞こえたと同時に、騎士姿の男性は仲間たちに大声で知らせに向かい、管理人さんは遠くを見据える。
モニターに映るロマンも異常を感知していた。
「目視しました！　あれは、まさか――」
「あれがドラゴン!?」
マシュの言葉にかぶせるようにして私は驚いてしまった。

なぜなら、空に浮かぶその姿があまりにも想像とは違ったからだ。
私の知っているドラゴンというのはもっと大きくて、山のように巨大な姿をしているものだと思っていたのに……。
管理人さんがワイバーンと呼んだ生き物は、どう見ても想像していたドラゴンよりも小さく、弱そうに見える。
「先輩！　あれはドラゴンではなくワイバーンです！　そして、ワイバーンはドラゴンの亜種です！」
「亜種ってどういうことなの!?」
「ワイバーン。大きさは小さいが、ドラゴン――「龍」の幼体とは違い、種族としての源流が「龍」と同じなだけの木っ端だよ」
マシュの指摘に思わず聞き返すと、私達の前に立つ管理人さんがまた違う本を片手に解説してくれた。
ちなみに、管理人さんの持っている本は先ほどまでとは違うものになっていた。
あの短時間で別の本が手元に現れたことに驚きつつも、今はそれよりも気になる単語があったのでそちらを優先することにした。
管理人さん曰く、ワイバーンはドラゴンとは別の生物で、モ〇ハンで例えるなら「ドラゴンが古龍で、ワイバーンはリ〇レウス」というものらしい。
そして、管理人さんはその知識を得るために、ドラゴンと戦ったらしい。
なるほど、だからさっきあんなに詳しく説明できたんだね！
……いや待って、なんで管理人さんそんなにゲーム知ってるの？
というか、モ〇ハンやってたんだ……。
「僕の頭だけでは考えつかないものを作り上げるのが、「他人」という存在だ。どうしても僕一人だと凝り固まった想像しかできなくてね……。ゲームは暇があればいつでもやってるよ。それより立香君、戦闘準備を」
「あ、は、はい！」
管理人さんの声に我に返って、慌てて礼装を装備する。
その間に、管理人さんは手に持っていた本を空中に投げ捨ててい

た。
すると、投げ捨てられた本は光となって消え、代わりにその場所に剣が突き刺さっていた。
それはまるで、本が剣に変わったかのようである。
「さてと……立香君。僕はワイバーンの五割を相手取るよ。残った五割を君達に任せる。マシュ君は立香君の護衛を」
「は、はい！」
「ありがとうございます管理人さん！」
私達が返事をすると同時に、管理人さんは駆け出す。
それと同時に、マシュが盾を構えて私の前に立った。
同時に、私も魔力を流して礼装を起動する。
私が装備している礼装は、メディアさんやダヴィンチちゃんが作った、一級品の魔術礼装らしい。
効果については、単純な身体能力強化に魔力の回転率の向上など、基本的なものばかりだけど、効果はバッチリだ。
特に、防御に関してはカルデアの制服よりも高い性能を誇るとか。
ただし、あくまで補助的なものなので、上手く扱えなければただの宝の持ち腐れになってしまう。
私はまだ、そのあたりは未熟なのだ。
それでも、マシュと一緒に戦えるようにと、頑張ってきたつもりだ。
マシュも、私を守ろうと必死になってくれている。
だからこそ、私はマシュを信じて戦うことができるのだ。
そして、私達には心強い仲間がいる。
「来て！　エミヤ！　クー・フーリン！」
魔力を通して礼装を起動し、サーヴァントである二人の名前を呼ぶ。
すると、次の瞬間、目の前に二人の英霊が現れた。
蒼いタイツを身に纏い、それとは正反対の赤い槍を持つ青年――クー・フーリンは槍を手に、こちらに視線を向ける。
褐色肌の青年――エミヤは、油断なくワイバーンの群れを見据えて、その手に弓と矢を創り出す。

「さてと、初陣か！」
「ワイバーンか……流石に、私の矢で貫けないことはないだろうな……」
「ん？　なんだ、ビビってるのかアーチャー？」
「そんなわけなかろう。貴様こそ、うっかり死ぬなよ。ランサー？」
「はっ！　ったりめぇよ！」
「エミヤは町の方へ行きそうなのを撃ち落としていって！　クーニキはこっちに向かってきたやつを仕留めて！」
私の指示を聞いた二人は静かに武器を構える。
クー・フーリンは槍を、エミヤは弓を構えた。
その表情からは、これからの戦いに対する高揚感が感じられた。
そんな二人を見て、少しだけ安心した。
この二人がいれば大丈夫だと。
そして、
「マシュ！　私の命、あなたに預けるから！」
「了解しました先輩！　必ず守り通します！」
頼れる後輩もいる。
なら、私は怖がらずに進むだけだ。
マシュの言葉を聞いて、私は戦況を見据える。
この特異点に来て、初の戦闘が起ころうとしていた

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

最初に飛び出したのはクー・フーリンだった。
彼はワイバーンに対して、一直線に飛び込んでいく。
「ぜぇあっ!!」
雄叫びと共に放たれた一撃は、ワイバーンの胴体を軽々と貫通して見せた。
それだけでは終わらず、そのまま地面に着地することなく、空中で
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

身体を回転させてもう一匹に蹴りを放つ。
蹴られたワイバーンは、体勢を崩し、地面に落下していく。
それを、
「ハァッ！」
エミヤが的確に打ち抜いていった。
撃ち抜かれたワイバーンはそのまま動かなくなり、絶命する。
その様子を見て、私は思わず見惚れてしまう。
すごい……これが本物の戦い……。
ゲームとは違う、現実で起こる戦闘を目の当たりにし、改めて自分達はとんでもないことをしていることを理解した。
「ッ！　先輩！」
「ほわっ!?」
気が逸れていると、クーニキに蹴り飛ばされ、エミヤに撃ち抜かれてもなお生きていたワイバーンが私に噛みつこうとしていた。
ワイバーンっていう、人間よりも大きい怪物から噛みつかれてしまったら、私の上半身がおさらばしてしまうだろう。
だけど、マシュが間に盾を滑り込ませ、それに気づいたエミヤが空中に剣を創り出して、ワイバーンを串刺しにすることで事なきを得た。
「先輩！　油断は禁物です！」
「ごめんマシュ！　そしてエミヤもありがとう！」
「礼には及ばんさ」
そう言って、エミヤはまた弓を構えて、狙いを定めていく。
その間に、マシュは盾を構え直して、私を守る態勢を整えていた。
そんなマシュの姿を見て、私も自分のやるべきことをやる。
「頑張って！」
「！　っへ、ありがとな嬢ちゃん！　おかげでやりやすくなった！」
礼装に付与された魔術――「強化魔術」により、ステータスを強化されたクーニキがワイバーンをなぎ倒していく。
クー・フーリンという英霊はケルト神話における大英雄であり、その中でも一際有名とされる半神の英雄だ。

なんでも、ケルト神話版ヘラクレスとか呼ばれるほど。
だが、それでもクー・フーリンだけでは手が回らない。
そこで、管理人さんの出番だ。
「『灼火』『流転』『五月雨』『神風』」
剣を構えながらの状態で、次々と紡がれる言葉に呼応するかのように、管理人さんの周りを滞空する本が魔法陣を展開する。
一つ一つに膨大な魔力が込められており、それらが一斉に解き放たれた。
その瞬間。
ワイバーンの群れを様々な現象が一斉に襲った。
まるで小型の太陽とも言うべき火球が一直線に飛び、一瞬にしてワイバーンを丸焼きにしていく。
ある一定の空間がねじ曲がり、その場にいたワイバーンが粘土をひねるかのように変形させられて絶命する。
魔力を含んだ水滴がワイバーンを撃ち落としていった。
突如として吹き荒れる突風にワイバーンたちが体勢を崩した瞬間、全身を切り裂かれて絶命する。
それらが一度に起こったのだ。当然、ワイバーンの群れなんて簡単に一掃されてしまう。
圧倒的なまでの火力を前に、私はただ唖然とすることしかできなかった。
これが……サーヴァントの力……。
その力の一端を見せつけられ、呆気に取られてしまう。
しかし、戦闘はまだ終わっていない。
運良く攻撃を免れたワイバーンたちが町に攻撃をしようと火を吐いた。
「あ――」
このままでは、町に被害が！
クーニキは防御に優れていない。
エミヤは防御できるのか？
マシュは防御できるが、あれだけの広範囲を防げるのか？

管理人さんは、さっきの魔法の反動で動けない。
町が燃えてしまう……!?
そんな絶望的な未来が脳裏を過った。
しかし、
「はぁっ！」
突然現れた人影が、炎と町の間に割り込み、その手に持つ――大きい旗を振るって、炎を吹き散らした。
吹き散らされた炎の黒煙が晴れると、そこには金髪の女性が立っていた。
綺麗な金色の長髪を後ろで編み込むことで、動きの邪魔にならないようにしており、瞳の色は澄んでいる。
そして、何より目を引くのが、その手に持つ大きな旗だった。
彼女はそれを軽々と持ち上げて、構えを取る。
その姿を見ただけでわかる。
彼女もまた――サーヴァントだと。
「兵たちよ、水を被りなさい！　彼らの炎を一瞬ですが防げます！」
「え……!?」
「そこの御方！　どうか、武器を取って戦ってください！　私と共に！　続いて下さい――!!」
そんな彼女は、眼前に迫って脅威によって、腰を抜かしていた兵士たちに発破をかける。
すると、一人、また一人と立ち上がり、それぞれ武器を持ってワイバーンに立ち向かっていった。
「あの人は……」
『サーヴァントだ！　しかし反応が弱いな。彼女は一体……』
「とりあえず、仲間ってことだよね!?　なら、皆で協力してワイバーンを倒そう！」
「なら、私は撃ち落とすことに専念すればよいかね？」
「うん！　落ちたら、騎士の人たちとあの人が倒せるようになるから！お願い！」
私が指示を出すと、マシュは盾を構え、クーニキは槍を構える。

エミヤは空中に剣を創り出し、それを矢に変化させてワイバーンに向かって射る。
管理人さんは、再び本を開きながら魔法陣を展開していき、接近してきたワイバーンを剣で迎撃していた。
そして、先程まで尻餅をついていた兵士も立ち上がっており、それぞれの役割を的確にこなしていく。
ほどなくして、ワイバーンは全滅した。

## ジャンヌ・ダルクとの邂逅

「あの～……大丈夫ですかジャンヌさん？」
「大丈夫ですよ。立香さん。あのようなことは慣れていますから……」
あの後、ワイバーンの脅威を退けた私達は、あの町から離れた森の中にいた。
そこで、ワイバーンとの戦いで協力してくれたジャンヌ・ダルクと名乗った彼女と話をしようとしたのだが……。
『そんな、貴女は――いや、お前は！　逃げろ！　魔女が出たぞ！』
彼女が助けた騎士の男性が、彼女を魔女と呼んで、おびえながら逃げていってしまったのである。
当然、他の人達もそれに釣られて逃げ出してしまい、あの場には私たちだけが取り残されている状態だった。
『本当に君はジャンヌ・ダルクなのかい？』
「ええ、私はジャンヌ・ダルク。聖女などと呼ばれていた、ただの田舎娘です」
ロマンが確認するように問いかけると、彼女は悲しそうな表情を浮かべながらも答えてくれた。
どうにも、彼女の言葉を信じられないようだが、それは仕方ないだろう。
だって、彼女は――
「間違いないよ。彼女こそ救国の聖処女……オルレアンの乙女にしてフランスを救った英雄。そして、僕のことをお兄さんと言いながら追いかけまわしていた元気っ子だよ」
「そうなの!?」
「!?　に、兄さん！　それは言わないお約束ですよ!?」
思わず驚いてしまう。
まさか、管理人さんの妹だったなんて……！
「ち、違いますよ立香さん！　彼は、私が子供の頃、近所のおじさんの家に居候していて、よく遊び相手になってくれてただけです！　別に

兄妹というわけでは……！」
管理人さんの言葉を聞いて、慌てふためく彼女。
……怪しい。管理人さんの言う通りなら、あんな反応はしないはずだ。
つまり、あれだけ仲がいいのに、その仲を隠そうとするのは――
「もしかして……ジャンヌさんは、管理人さんに『ほ』の字ですか？」
「!?　へ、へへへ変なことを言わないでください!!」
図星らしい。
顔を真っ赤にしている。
可愛いなぁ～。
胸もおっきいし、スタイルもいい。
顔もよければ、あざとさも感じる。
私なんか、この歳になっても好きな人もいないっていうのに。
まあ、今はそんな場合じゃないけどね。
とにかく、色々と情報を整理しないといけないだろう。
ジャンヌさんをからかっていた管理人さんが、真剣な表情になって、静かに口を開いた。
「それで、ジャンヌはどうしてここにいるんだい？　僕達の情報が正しければ、君は既に……」
「はい……私は既に生者ではありません。英霊――『ルーラー』クラスのサーヴァントとして、この地に召喚されました」
やっぱり……。
目の前にいる彼女はサーヴァント。
すでに死んでいるんだ。
でも、それならなんでこんなところに現れたのか……それがわからない。
疑問が浮かぶ中、管理人さんが質問を続ける。
「君はなぜ、自分がここに召喚されたのか分かっているかい？」
「……いえ。分かりません。本来、召喚されたならば聖杯戦争の知識が与えられるのに、今の私にはそれらに関する知識が大部分存在していません」

どうやら、彼女自身、状況を理解できていないようだ。
そもそも、サーヴァントとはマスターと契約し、初めて力を発揮することができる存在だ。
それは、エミヤやクーニキなんかもそう。
でも、管理人さんが付け加えた情報によると、『ルーラー』っているサーヴァントクラスはマスターを持たないらしい。
魔力が必要ないってわけじゃなく、聖杯戦争によって周囲に被害が出る場合、被害を出した参加者を罰する立場にあるから、誰かに属することがないように聖杯と魔力のパスが繋がってるらしい。
要は、中立の立場を貫いているサーヴァントのことみたい。
「だが、今回の聖杯戦争――「特異点」を創り出すために聖杯があっても、聖杯戦争という目的では使われてない。それは立香君。特異点Fから持ち帰った聖杯を知っているなら分かるだろう？」
「うん……」
確かにそうだ。
特異点Fの聖杯を回収したとき、聖杯からは、一般人だった私でもすっごい力を感じることができた。
あんなにすごかったら、歴史もおかしくできるだろう、って考えられるほどに。
でも、管理人さんが言うには、特異点Fに召喚されていたサーヴァントたちは、すでに行われていた聖杯戦争に参加していたサーヴァントが特異点の影響を受けておかしくなっちゃったらしい。
だから、特異点を創ってる聖杯は、そもそも聖杯戦争をするためにあるわけじゃない。
「そういうことだ。おそらく、この特異点にジャンヌが召喚されたのは、暴れまわっているジャンヌ――仮称「魔女」としようか？　そんな彼女への『カウンター』だろう。『抑止力』も、こういう時には働くんだね」
管理人さんが言うには、聖杯戦争以外でサーヴァントが召喚されるのは、世界のバランスが崩れてしまったときらしい。
つまり、この場にいるジャンヌさんではない別のジャンヌさん――

「魔女」が暴れまわって、歴史――「世界」がおかしくなったから、こっちのジャンヌさんが召喚されたという。

「……実は私が召喚されたのは今から数時間前のことで、未だ事情が分かっていませんでしたが、そのようなことが起こっていたとは……。それに、私はルーラーのクラスとして定められていますが、何故だか、力のほとんどが使えなくなっています……ルーラーとして必要な「真名看破」も令呪の使用もできません」

「なるほど……。何者かによって、「魔女」が召喚されて歴史がおかしくなり、それを危惧した『抑止力』が、こっちのジャンヌを召喚したんだろう。でも、何故ジャンヌの力が……」

管理人さんの言う通りなら、この場で聖杯戦争が行われているわけじゃない。

なのに、ジャンヌさんはルーラーとして召喚されている。

ジャンヌさんみたいなルーラーは、今を生きる人に憑依してマスターとサーヴァントを兼業するらしいのだが……。

マシュみたいなデミ・サーヴァントなのかな？　って思ったけど、それは違うって言われた。

だけど、今のジャンヌさんは憑依した肉体などなく、管理人さん達みたいな普通のサーヴァントらしい。

だからこそ、自分の力を使えないのかもしれない。

まあ、力のことは置いておいて、まずは情報交換からだ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「なるほど……人理焼却に7つの特異点ですか……。それを解決するために兄さ……管理人さん達は時間をさかのぼって戦っているんですね」

私達が今まで何をしてきたのか、そしてこれから何が起きるのかをジャンヌさんに話した。

ジャンヌさんは驚きつつも、納得している様子。
ジャンヌさんは私よりもずっと大人っぽい。
落ち着いていて、頼りがいがある。
私なんて、目の前で人が死んでいくところを見て、取り乱してしまったっていうのに……。
本当にすごいと思う。
でも、やっぱりその胸はうらやましい。
昔って、現代みたいに栄養とかたくさん摂れるわけじゃないんだよね？
なのにその巨乳はどういうことなのか……？
関係ないことを考えていると、管理人さんがとんでもないことを口にした。
「とりあえず、ジャンヌ。君の出力不足を解消しよう。服を脱いでこっちに背中を向けてくれ」
「ちょ!? 管理人さん!?」
「兄さん!?」
あまりの爆弾発言に、マシュが飛び上がって驚いた。
ジャンヌさんもびっくりしすぎて、管理人さんを兄さんって呼んじゃってるし……。
えっと……つまり、管理人さんはジャンヌさんの裸を見るって言ってるの？
いや、確かにジャンヌさんは美人だし、スタイルもいいよ！ でも、私だって負けてないし!!
「ににに兄さん!? どういうことですか!?」
「どういうこともなにも、魔術的に君の霊基に干渉して、足りない部分を僕が持ってる『本』から引き出して、君の霊基に埋め込むんだ。そうすれば、本来のパフォーマンスを発揮できるだろう？」
「そ、それはそうかもしれませんが……」
「第一、君と僕は、一緒に風呂も入ったことがあるだろう？」
「それは子供の時だけです！」
ジャンヌさんは顔を真っ赤にして抗議するけど、管理人さんはどこ

吹く風。
特に気にしていないようだ。
いやいや……好きな相手から裸を見せてくれとか、普通は勘違いしちゃうよそりゃ……。
だけど、目的がすっごい事務的な物だから、なんか肩透かしを食らった気分になる。
なんかこう、私の知らないところで大人の階段上っちゃってたのかなって思ってたんだけどなぁ～。
管理人さんって、見た目より恋愛に関しては鈍感なタイプなのかも。
それとも、枯れてるのかな？
「……管理人。君がいつか刺されないことを願うよ」
「変わらねぇな管理人……」
あの戦いの後も即座に対応できるようにと呼び出していたサーヴァントの二人が、それぞれ感想を言う。
エミヤは遠い目をしながら、ワイバーンのシチューを作っており、クーニキは面白いものを見たとでもいうかのようにからからと笑っていた。
ジャンヌさんは自分の体を抱きしめながら、管理人さんを睨みつけているが、管理人さんはまったく動じていない。
なんというか、この二人……夫婦漫才みたい。
そんなことを思いつつ、私はジャンヌさんに声をかけることにした。
「あの～……ジャンヌさん？　素直に聞いておいた方がいいですよ？」
「な、何故ですか立香さん！　あなたも兄さんの肩を持つんですか!?」
「いや、そうじゃなくて……。多分、今のうちにしておかないと、寝ている間に勝手にされると思いますよ？　管理人さん、そういうところは抜け目ないですし……」
「!?」
私が耳打ちすると、ジャンヌさんの顔色が一気に変わった。

うん、分かる。
今の管理人さんならやりかねない。
実際、私が翻訳魔術を刻み込まれたときなんかは、夜中にこっそり私の部屋に入って来て、勝手に服をはだけさせて、勝手に刻み込んでたらしい。
召喚による疲労で爆睡していた私を心配して、見に来てくれたマシュが発見した光景らしいのだが、暗い部屋で、本を片手にもう片方の手で私の背中に触れつつ、ぶつぶつ呪文を唱えながら魔術回路を起動している絵面は、完全に不審者だったという。
「そういうわけで、２人で楽しんできてください！」
「立香さん!?」
私はジャンヌさんの背中を押して、管理人さんの下へと背中を押してあげた。
後ろからは、「頑張れよ～」とか、「くわばらくわばら……」という声が聞こえた。
もう、みんなジャンヌさんを労わってあげなよ！
え、私？
恋する乙女の背中を押してあげてるだけだよ？
ジャンヌさんは覚悟を決めたのか、頬を染めながらも堂々と管理人さんの前に立つ。
そして、自分の体を隠すように両腕で胸を隠し、俯いた。
だけど、管理人さんは気にせずにジャンヌさんに近づいていく。
「んじゃ、扉を開くから、図書館の中で作業をすることにしよう」
「は、はいぃ……」
なんでもなさげに言う管理人さんだったが、それに対するジャンヌさんは顔を見なくても、真っ赤だろうことが簡単に想像できた。
虚空に豪華な扉を出現させた管理人さんは、ジャンヌさんを連れ立って入っていく。ジャンヌさんもその後に続いていったのだった。
二人の後ろ姿を見た私は、こう言った。
「さらばジャンヌさん。生まれ変わったら、また会いましょう……」
「先輩……勝手に殺さないで上げてください……」

残された私たちは、敬礼してジャンヌさんを見送った。

# ジャンヌと管理人

「ここが……兄さんの……」
「そうだ。何千年、何万年と昔から続く、僕の図書館だ」
兄さんに案内された場所には、巨大な城のような建物が建っていた。
いや、正確には城ではないのだが、それに近い荘厳さがある建物だということだ。
その建物の中に入ると、まるでおとぎ話に出てくるような世界が広がっていた。
天井まで届くほどの本棚が並び、中には空中に浮いている本棚も存在する。
しかも、ただ浮いてるのではなく、きちんと整理整頓されているのだから驚きだ。
それだけじゃない。
床には不思議な文様が描かれていて、淡く光っているのだ。
明かりなんてどこにもないはずなのに……。
これが兄さんが持ちうる魔術……私とは次元が違う力。
そのすさまじさに圧倒されていると、兄さんはこの広い空間の中央部とでも言うべき場所を進んでいく。
「ここで作業するんだ。こっちへ来てくれ」
言われるがままについて行くと、そこには大きな机があった。
その上には大量の本が積み上げられ、紙やインクが散乱している。
だけど、不思議と汚い感じはしない。
むしろ、兄さんらしいとでも言うべきなのか……そんな感じがする。
兄さんが私達の村にいたときから、この人はいつもこうだった。
朝早くに起きても、私達が呼びに来ない限り食事すらとろうとしない。
その時はたいてい本を書いているのだ。
それが、兄さんの日課。

兄さんの頭の中には、一体どれだけの知識が詰め込まれているのか……。
「さてと、これを動かさないとね」
懐かしい気持ちに浸っていると、兄さんの方でも動きがあった。
大きな机――おそらく作業机に手を触れると、机がひとりでに動き出して、どこかへと飛んでいく。
え？
どういうことですか？
魔術を使った形跡はない。
つまり、あれはそれ以外の力で動かしているということだ。
信じられない光景に驚いていると、今度は兄さんが合図をするように腕を振るう。
すると、どこからともなく本棚が飛んできて、兄さんの目の前で止まる。
「に、兄さん？　今のは一体……」
「図書館の基本機能の一つ。そもそもこの図書館は僕とリンクしているもので、要するに僕の体の一部。腕を動かすのに大して複雑なことを考えないように、僕の図書館内ではこんなこともできるんだ」
そう言って、兄さんは次々と本を移動させていく。
その様子を見ているだけで、私の中にある常識というものが崩れ落ちていった。
だって、おかしいでしょう？
こんなの人間にできることじゃありませんよ!?
「ま、僕人間じゃないからね。気にしたら負けってやつだよ」
「人の思考を読まないでください！　それに、そういうことは思わないようにしてるんです！」
「ごめんごめん」
まったく……兄さんは時々こういう意地悪をしてくるのですよね。
少しむっとしていると、兄さんは苦笑しながら謝ってきた。
その顔は相変わらず優しい笑顔で、あの時と変わらない。
それだけに申し訳ない気持ちが湧いてきた。

「兄さん……ごめんなさい」
「？　何故、謝るんだい？」
突然謝罪の言葉を口にした私に対し、兄さんは首を傾げる。
だけど、私は言わずにはいられなかった。
「兄さんの忠告も聞かず、戦争に参加してしまいました」
「……そのことか」
私の言葉に納得がいったのか、兄さんは小さく息を吐いた。
それから、私はゆっくりと口を開く。
「私がサーヴァントになる前。まだ私がただの人間であった頃、私は神のお告げを聞きました」
それは戦争の開始を告げるもの。
始まりは唐突であり、そして必然だった。
「天使様が私に言ったのです。『人のために戦え』と」
私は田舎に住む人間にしては珍しく、熱心な信者でした。
毎日教会に通い、神様に祈りを捧げる日々。
そんな私の日常を壊したのは、たった一つの予言だった。
その日も私はいつも通り教会で祈っていました。
そこでふと、天啓のように頭に思い浮かぶ言葉。
――汝、戦場に赴きて人のために尽くすべし。
その瞬間、私は自分が選ばれた存在であることを自覚しました。
それと同時に理解する。
この道を歩めばもう元の生活には戻れないと。
「ですが、あの時の私は、それでもいいと思っていました。いえ、むしろ進んで戦いに身を投じたと言ってもいいでしょう。私は誰かの為に戦うことができるのだと、その時確信できたのですから」
でも、結果はどうでしょうか？
私は火あぶりにされ、「魔女」というレッテルを付けられた。
挙句の果てには、私とは別の『私』がこのフランスを傷つけているという。
許せないという気持ちはあります。
でもそれ以上に、心にはあることが燻っていました。

それは、
「兄さん。あなたが私を助けようとしていたのを知っています。神のお告げを聞いたあの日も、天使様を私から遠ざけようとしてくれました。あの火あぶりの場でも、騎士に取り押さえられながら、最後まで私に手を伸ばしていました。こんな私を、見捨てなかった。……どうしてなのですか？　何故、兄さんは私にそこまでしてくれるのですか？」
兄さんの優しさに触れるたびに、ずっと疑問だったこと。
兄さんなら、私みたいな愚か者なんかより、もっと相応しい人がいくらでもいたはずなのに……。
それこそ、シャルルマーニュ十二勇士とか。
兄さんほどのすごい人ならば、私よりも優れた人と出会うことも出来たはずだし。
何より、兄さんは歴史に名を遺したほどの人物だ。
だからこそ分からない。
一体、兄さんはなんで私に優しくしてくれたのか。
その答えを聞くために、私はじっと兄さんを見つめます。
……すると、兄さんは小さくため息をつき、困ったような表情を浮かべました。
やっぱり、迷惑だったんだろうか……。
そう思っていると、兄さんはこう言いました。
「なんか浮かない顔をしているなぁ……とは思っていたけど、そんなことか。別に理由なんてないよ。ただ僕は君が大切な存在だから助けたかっただけさ。……手は届かなかったけどね」
「……え？」
今、なんて？
聞き間違いじゃなければ、確かに聞こえた気がする。
大切だって、言ってくれた？
思わず自分の耳を疑ってしまいました。
ただ、私が呆けている間に、兄さんは次の行動に移っていました。
本棚から様々な本を取り出す作業を再開させながら、話を続けてい

く。
「そもそもの僕の行動原理は、素晴らしい人と出会い、それを忘れないように記録すること。まぁ、簡単に言えば日記をつけていたようなものかな」
そう言うと、今度は別の本を取り出して開き始める。
そこに書かれているのは、見たこともない文字。
フランス語とは全く別の文字で題名を書かれている本を何冊か取り出し、空中に浮かせていく。
「僕がまだこの姿をとる前、いうなれば、まだ僕が図書館である前――生まれたばかりの話になる」
「に、兄さんが生まれたばかりの話ですか？」
「そう。こことは違う世界での出来事だ」
兄さんの言っている意味がよく分かりませんでした。
生まれ変わりとかそういうことなんでしょうか？　兄さんはそんな私の思考を読み取ったのか、苦笑しながら説明を始めました。
「そこでの思い出は、はっきりと覚えているけど、一番最初の記憶は、とある人物が僕を拾ってくれたところから始まるんだ」
それから兄さんは語り始めました。
自分が生まれた世界のことを。
そして、その世界に住う人々との出会いを。
「僕は、そもそも人ではなかった。分かりやすく言うなら、『兵器』というべきものの残骸。誰が何のために作ったのか分からず、そしてなぜ放棄されたのかもわからない。ただ分かったことは、僕は『記録する』ということに長けていたことだけ。そして、それ以外の機能がほとんどない僕は捨てられていた場所――拾ってくれた人曰く、『次元の狭間』で、ただ『何もない』ということを記録するだけだった」
「次元の……狭間……」
そんなところがあるんですね。
ちょっとびっくりです。
でも、それがどうしたというのでしょうか？
私の疑問に答えるように、兄さんは言葉を続ける。

それは、今まで聞いたことのない内容でした。
「その場所は並行世界や別世界を隔てる『無』によって構成された海。並の手段じゃ、渡ることすらできない。そんな場所にいれば、いずれ『無』に飲み込まれて消える」
「消え……!?」
思わず声を上げてしまいました。
でも、それって、つまりどういうことでしょう？
困惑する私を他所に、兄さんは淡々と話を続けて行きます。
まるで、他人事に話すかのように。
だけど、その瞳だけは真剣そのものでした。
「僕としてはなぜそんなところに放棄されたかというより、その後のことの方が気になった」
「な、なんですかそれは……？」
「並の存在じゃ、飲み込まれて消えるという『次元の狭間』を鼻歌交じりに渡っている人間という存在がいたんだ」
「!?」
思わず息を飲み込んでしまいました。
だって、兄さんの話はそれだけ突拍子もないものだったのですから……。
そんな私に、兄さんは笑いかけながらこう言いました。
どこか自慢げに。
誇らしげに。
そして、大切なものを友人に語るように。
「彼が拾ってくれなかったら、僕はただ『無』を記録するだけの哀れな機械だったよ。彼もまた、最初はただの人間だったらしい。でも、彼はある目的の為に自らを鍛え上げ、ついには次元の壁を超えることに成功した」
兄さんの言葉は続いていきます。
私はそれを黙って聞くことしかできません。
それくらい衝撃的な話でした。
「そして、彼と旅を続けていくうちに、彼は僕にこう言ってくれたん

だ」
「『お前は、これからも素晴らしいものを見てこい。それがでっかくても小さくても。そして、記録しろ。忘れないためにな。んで、また会う時には、それを俺に見せてくれ。それを話しているお前の笑顔を絵に描いてやるからさ！』ってね」
……あぁ。
私はこの時、ようやく理解しました。
兄さんが何故、こんなにも優しいのか。
兄さんにとって、私がどんな存在なのか。
私はその人のようには大きくはないけれど、兄さんにとっては、きっと、とても大事な人だったのでしょう。
だからこそ、兄さんはその人のようになりたくて、今もこうして頑張っているのかもしれません。
そう思った時、ふと胸の奥が熱くなるような感覚に襲われました。
この感情が何なのか、よくわかりませんでした。
ただ、一つ言えることがあるとするならば。
私は、やっぱり、兄さんの妹で良かった。
「兄さん……私の霊基の改造をお願いしてもらえますか？」
「ん？　なんで君を助けようとしたのかは聞かなくていいのかい？」
「ええ。また次の機会に聞こうと思います。そのためには一刻も早く問題を解決しなければなりませんからね」
「そっか……それじゃあ始めようか」
兄さんの返事を聞いて、私は服を脱ぎ、兄さんが持ってきたテーブルのようなものの上でうつ伏せになり、目を閉じました。
すると、兄さんは何かの準備を始めたようで、魔力の流れを感じました。
おそらく、私の改造を始めるのでしょう。
兄さんの魔力は膨大で、様々なものが混じった黒のようでありながら、本を書くためのインクのような印象を与える。
やがて、準備が終わったのか、兄さんは口を開きました。
「それじゃ、実際に霊基に手を加えていく。これをやるのは久しぶり

だから、変な感覚があったら遠慮なく教えてくれ」
「お願いします」
そう言うと同時に、私の意識は徐々に遠のいて行ったのでした。
夢見心地のような感覚に包まれる中、誰かの声が聞こえてきました。
――俺のダチを頼むぜ。お嬢ちゃん？
それは、男でもなく、女でもない。
まるで中性的な声でした。
……誰なのでしょう？
でも、不思議と嫌悪感はありませんでした。
むしろ、太陽のように温かい声。
――分かりました！　兄さんは私に任せてください！
そう答えると、次第に体が深く沈んでいく感覚に包まれる。
次の光景は、真っ暗な空間にポツンと一人　眠っている私の姿があります。
そんな私の体は、壊れた人形のように所々壊れていました。
そんな私の側に立ち、体に手を触れて欠落した情報――霊基（魂）を、兄さんが魔力（インク）で修復（書き加えていく）していく。
不思議なことに痛みはなく、ただ情報だけが頭の中を駆け巡っていくのです。
まるで、体の奥底にあるものが表に出てこようとしているかのように。
でも、それは決して嫌なものではありませんでした。
むしろ、暖かく、優しく、懐かしい。
これが兄さんの――。
「書き込み終わり！　もう起きていいよ」
「……んっ」
兄さんに肩を叩かれ、ゆっくりと目を開くと、そこには心配そうな顔をしている兄さんの姿がありました。
どうやら、かなり長い間眠っていたみたいです。
兄さんは私に上着をかけてくれながら、こう言いました。

「一応、この時代以降の英霊の座に登録されている君の情報を複製して書き加えたが、変なところはないかい？」
「はい。大丈夫だと思います」
体の調子を確かめるように動かしてみますが、特に違和感はありません。
それどころか前よりも体が軽く感じられました。
やはり、感じていた空虚感――霊基の欠落がなくなっています。
流石に令呪はないですが、それでも戦う分には問題ありません。
私は兄さんに向き直り、深々と頭を下げました。
「ありがとうございます、兄さん。貴方のおかげで私はまた戦えるようになりました」
「……感謝されるほどでもないよ」
お礼を言うと、兄さんは照れ臭そうに頬をかきました。
本当に謙遜屋さんですね。
「さて、事件は始まったばかりで、相手は君を名乗る誰か。ワイバーンを召喚する術を持ち、敵戦力は計り知れない。それでも行くかい？」
兄さんは真剣な表情で尋ねてきました。
私はその言葉に対して、迷うことなく即答しました。
何故なら……。
「もちろん行きます！　私は私の道を進み続けなければなりませんから！　それが、兄さんと協力して乗り越えられるなら尚更です！　だから、どうか私を連れて行ってください！」
私の返事を聞いた兄さんは笑みを浮かべると、手を差し出しました。
私も同じように笑い返すと、兄さんの手を掴み返しました。
「それじゃ、皆のところに戻ろうか？」
「そうですね。それと、エミヤさん……でしたっけ？　彼の作っていたシチューは非常においしそうでした！　早く食べに行きましょう！」
そう言って、私は兄さんと一緒に歩き始めました。
これからも色んなことが起きるでしょう。

でも、きっと大丈夫。
だって、こんなにも頼れる人が側にいるんですから。

# オルレアンへ向けて

「先輩、朝ですよ。起きてください」
「ふわぁ～……おはよ～マシュ～」
いつも通りの後輩の声で目を覚まし、大きく背伸びをする。
隣を見ると、私を覗き込んでいるマシュの姿があった。
寝ぼけた頭を何とか起こし、ベッドから出て着替え始める。
着替え終わると、扉に手をかけて部屋の外に出た。
部屋の外は、森へと繋がっており、先程の豪華な部屋とのギャップに少し苦笑いしてしまう。
まあ、これも慣れてしまったけど。
扉を出てすぐのところでは、管理人さん達が朝食の準備をしていた。
「おはよう皆！　今日も1日頑張ろう！」
「おはよう立香君。今日も元気だね」
私の声に気づいたのか、こちらに振り向く管理人さん達。
そして、同時に挨拶を返してくれる。
これは毎日のことだけど、この瞬間だけはちょっと幸せだったりする。
それから、簡易の食事場に集まって食事を摂り始めた。
「いや～、まさか特異点に来て、あんなフカフカしたベッドで寝れるなんてね～」
「適当に創ったんだけど、お気に召したようで何よりだよ。結局のところ、図書館に住んでいるのは僕だけだし、かなり部屋が余ってたんだ。まさかこういうことに使えるなんて思ってなかったよ」
そう、先程まで私達がいたのは管理人さんの図書館の中なのだ。
私とマシュが野宿に慣れていないことを知った皆がどうしたものかと考えていた時に、管理人さんが提案してくれたのだ。
なんでも、元々図書館として使っていたのだが、他にも箱舟としても使用しているらしく、部屋はかなり多いらしい。
それで、空き部屋になっていたところを改装して、まるで高級ホテ

ルの一室みたいな部屋にしてしまったのだ。
それを聞いた私達は大喜びした。
確かに、レイシフトしてからずっと歩き続けていたため、かなり疲労がたまっていたのだ。
そんな状態で野宿をするのかぁ……なんて考えてたら、管理人さんの図書館で泊まることになって、疲労もばっちり取れた。
それに、あそこなら周りに気を使う必要もないからぐっすり眠ることが出来る。
本当にありがたいことだ。
そんなことを考えながら、朝食を食べていると、横に座っているマシュが口を開いた。
ちなみに、今日のメニューは昨日のワイバーンシチューだ。
「それにしても、管理人さんは何でもできますよね。何かそういうことを学んだんですか？」
「ん？　僕は知識を収集することが好きなんだ。それは料理に関しても例外ではない。今回のワイバーンシチューだって、僕がエミヤ君に調理方法を教えたんだ。彼はその通りに作っただけさ」
「くっ……！　やはり上には上がいるのか……！」
そう言って笑う管理人さんと、悔し気に拳を握り締めるエミヤ。
そういえば、前に聞いたことがあるような気がする。
確か、管理人さんは、本を知識として修めることができて、それの模倣ができるって。
しかも、新しい本を書けば、アレンジもできるらしい。
そんな管理人さんに対して、エミヤは、『投影魔術』っていう魔術をすっごく上手く使うことができて、武器――特に『剣』の複製とかが得意なんだって。
それで、武器とかの記憶を引き出して、それをマネできるらしいんだけど……結局のところはそれ止まりらしい。
そう考えれば、どんなことでも模倣出来て、さらに発展させられる管理人さんは、エミヤの完全上位互換ってところか……。
まあ、私にはさっぱりわからない領域の話なんだけど。

そうこうしているうちに朝食も終わり、身支度を整えると、すぐに出発となった。
向かう先は……オルレアン。
魔女の根城だ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「もうすぐラ・シャリテです」
先導するジャンヌさんがそう言った。
最終目的地であるオルレアンに、何も情報なしで突っ込むのは無策ということで、まずは情報収集から始まった。
それで、近場にある「ラ・シャリテ」という町に向かっているらしい。
町に着くまでは、まだ結構距離がありそうだ。
そう思っていると、空中に投影されているモニターからロマンの声が聞こえた。
『ん？　みんなちょっといいかい？』
「どうしたのロマン？」
「どうしたんですかドクター？」
ロマンの問いかけに対して、マシュと一緒に返事をする。
『君達の行く先に、サーヴァント反応が探知された』
ロマンの言葉を聞いて、皆が一斉に緊張の色を見せる。私だって同じだ。
ついに来たか……！
オルレアンの魔女……！
聖杯によって蘇ったジャンヌさんの偽物にして、特異点の元凶と思われる存在。
絶対に負けられない戦いが始まる。
私は、そう確信していた。

だけど……

『あ、あれ？　でも遠ざかっていくぞ？　……ああ、駄目だロストした！　速すぎる！』

「……考えたくないことがあるんだけど言ってもいいかな？」

ロマンの報告を聞いた管理人さんが、苦虫を噛み潰したかのような顔をしながら声を上げる。

何だろう、嫌な予感が止まらない。

そして、管理人さんはゆっくりと口を開くと、とんでもない事実を口にした。

「魔女たちが、既にラ・シャリテを襲撃していて、壊滅させたから帰ったんじゃないかな？」

「「「「！」」」」

全員が同時に息を飲む。

管理人さんの予想が正しければ、サーヴァント反応（おそらく魔女かその仲間）が遠ざかるということは、もうラ・シャリテは壊滅済みだということ。

つまり、今から向かっても無駄足に終わるということだった。

……いや、まだそうと決まったわけじゃない！

そう思い、私たちは慌ててラ・シャリテに向かった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「まさか――」

「ドクター、生体反応を――」

「うっ……」

ラ・シャリテに到着したときは、もう酷い有様だった。

町は燃え、所々に黒煙が立っている。

生存者なんて、ほとんどいないんじゃないだろうか。

ジャンヌさんは口元を抑え、マシュはロマンに生存者の確認をして

もらうようにお願いし、私は吐き気を抑えるので精いっぱいだった。
『……駄目だ。その町に命と呼べるものは残っていない』
「そんな――」
その言葉に絶句する。
その時、私の横を誰かが通り過ぎていった。
それは……ジャンヌさんだった。
ジャンヌさんは町の中へ歩いていく。
その姿を見た瞬間、私もマシュ達を置いて走り出していた。
ある場所で止まったジャンヌさんは、跪いて祈りをささげていた。
「ジャンヌさん……」
「主よ。彼らに死後の安寧を」
ジャンヌさんは目を閉じて、静かに祈っていた。
きっと……この町に住んでいた人たちのことを思ってのことなんだろう。
この人は、本当に優しい人だ。
だからこそ――
こんな残酷なことをした連中を許せない。
ギリッと歯ぎしりする。
怒りがあふれてくるが、まだ終わったわけじゃない。
みんなの下へ戻ろうとした時、何かが動く音が聞こえた。
もしかして、生存者……！
しかし、その予想を裏切るようにして、それは姿を見せた。
「!?　なっ!?」
「あぁ……なんてことを……」
確かにそれは人の形をしていた。
でもそれは、生きているとは言えなかった。
全身に焼け焦げた跡があり、体は真っ二つに裂けている。
間違いなく、これは人間ではない。
それに、もう一つ分かったことがあった。
それは、これが一体だけじゃないってことだ。
私たちが見ている前で、次々と同じようなモノが現れていく。

次第に囲まれてしまい、逃げ道がなくなってしまった。
このまま襲われる……そう考えてしまった。
しかし、
「先輩っ！」
「勝手に前を行くなマスター！」
「危なっかしい嬢ちゃんだぜホント！」
「マシュ！　エミヤ！　クーニキ！」
頼もしい後輩にサーヴァントの皆が駆けつけてくれた。
これなら安心して戦える。
そう思ったとき、空に巨大な魔法陣が現れた。
しかも一つではなく、無数に現れており、そこから光の波動のようなものが放出される。
「これは……？」
『大規模な浄化魔術！　教会の総本山だろうとこんなのは早々お目にかかれないぞ!?』
突然のことに疑問符を浮かべていると、ロマンがそう説明してくれた。
町を襲っていたであろうサーヴァントはこの町から離れて行ったから奴らの仕業じゃない。
なら、自然と候補は絞られた。
「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない」
「管理人さん！」
上空を見上げると、そこには管理人さんがいた。
どうやらあの魔方陣を展開しているのは管理人さんのようだ。
でも、その表情はとても苦しそうだ。
まるで……自分を傷つけるような……。
管理人さんは右手を掲げ、魔法陣を展開し続けている。
「打ち砕かれよ。敗れたもの、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。休息を。　唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

それは、優しい声色だった。
管理人さんの体から光が漏れ始め、それが町全体に降り注ぐ。
すると、先ほどまで死んでしまってもなお動いていた人々の動きが鈍り始め、次第に体が崩れていく。
それだけじゃない。
さっきまで燃え盛っていた炎も消え始めている。
町全体がどんどん綺麗になっていく。
「装うことなかれ。許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を」
「休息は私の手に。　貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。永遠の命は、死の中でこそ、与えられる」
「――――許しはここに。図書館の管理人たる私が誓う」
「――――『この魂に憐れみを』」
その言葉を最後に、町にいた死者はすべて浄化されるかのように姿を消した。
残ったのは、ただ静かに佇む管理人さんの姿だけだった。
その姿を呆然と眺める私達をよそに、管理人さんは次の行動に移った。
「皆、今のは死者を浄化する魔術だ。まだ生きているもの――ワイバーンが残っている。それを討伐したら、一旦休息を挟もう」
そう言って、管理人さんは飛んできたワイバーンを倒しに向かった。
……やっぱり様子がおかしい。
なんだか無理をしているように見えて仕方がない。
心配になって追いかけようとしたけど、それよりも先にジャンヌさんが駆け出した。
「皆さん！　兄さんは私が援護します！　皆さんは周囲のワイバーンをお願いします！」
「っ！　わ、分かった！」
「先輩！　ワイバーンと接敵します！」
ジャンヌさんに返事をして、マシュと一緒に戦闘態勢に入る。

まずは目の前にいるワイバーンからだ！

## 魔女との邂逅

「……」

「兄さん！」

淡々とワイバーンを屠っていく兄さんの後ろ姿を見て、思わず叫んでしまった。

普段の兄さんなら、絶対にこんなことはしない。

なのに、どうして？　そんな疑問が頭から離れない。

ただ言えることと言えば、今の兄さんは普通じゃないってことだ。

だから、止めないといけない。

でも――どうやって？

「……大丈夫だよ、ジャンヌ」

「！　兄さん！」

私の問いかけに返事をしてくれたのは、いつの間にか戻ってきたらしい兄さんだった。

どうやら、さっきのワイバーンで最後だったみたい。

こちらに近づいてくる姿に少しだけ安心してしまったが、すぐに気を引き締め直す。

「一体、何があったんですか……!?」

「……君を名乗る誰かが、こうしたのは分かっている。でも、何故君（ジャンヌ）なんだ？　なんで君の名を騙ったんだ？　このフランスを愛していた君の名を騙ってまで何故こんなことをするんだ？　……そう思ってね、少し、気が荒ぶってしまったよ」

あぁ……なんて悲しい目をしているんでしょう……。

いつも笑顔で、私の頭をなでてくれていた兄さんが、こんなにも悲しんでいる……それがとても辛かった。

きっと、これは夢だ。

そう思いたかった。

だけど、これは紛れもない現実なのだ。

聖杯の力によって、生み出されたであろうもう一人の『私』によって起こされた悲劇。

それを止めるために、こうして戦っているのだ。
だから――。
それを遮るように、ロマンさんの声が聞こえた。
『管理人君！　今すぐ戻ってきてくれ！　そこから離れて行ったサーヴァント反応が引き返してきた！』
「!?　兄さん！」
「分かってるよ。皆の下へ今すぐ合流しよう」
そう言って、私達は常人離れした身体能力で立香さんたちの下へ急いだ。
道中、兄さんの表情を見た。
その顔はとても険しく、何かを考えているようだった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「あれが……！」
「魔女……！」
私たちの視線の先には、黒い服を身に纏った女がいた。
おそらく、アレが今回の黒幕――ジャンヌさんを名乗る「魔女」だろう。
しかもそれだけじゃない。
周りには、様々な衣装の男女が４人ほどいて、誰もがエミヤやクーニキなんかと劣らない威圧感を放っている。
間違いない、こいつらがこの町を襲った奴らだ。
怒りのあまり歯を食いしばってしまうが、駆けだすことはできない。
下手に動こうものなら、私みたいな一般人に毛が生えた程度の存在では、「魔女」にたどり着くことすらできず瞬殺されるだろう。
それほどまでに、今の相手は強い。
そんな私とは違い、皆は冷静に相手を見据えている。

エミヤとクーニキはもちろんだが、マシュですらいつでも自分のやるべきことをやれるようにと構えていた。
流石だ。
こんな状況でも、皆は落ち着いてる。
――だからこそ、私は覚悟を決めることができた。
皆に守られるだけの、足手まといにならないための努力をするために。
「皆さん無事ですか!?」
「ほぉ……」
そう考えていると、ジャンヌさんと管理人さんが瓦礫の山を越えて私達の下へ駆け寄って来る。
心配はしてなかったけど、現状の最高戦力である管理人さんと、管理人さんによれば、マシュみたいな防御型の宝具を持つジャンヌさんはこの場には最適だ。
そして何より、これでサーヴァントの数は同数。
数の上では互角になった。
そんなことを私が考えていると、「魔女」がジャンヌさんの方を見て、目を見開いた。
「……っ!」
「――なんて、こと。まさか、まさかこんな事が起こるなんて」
ジャンヌさんが警戒心の混ざった眼差しで「魔女」を見上げるのに対し、「魔女」は信じられないと言わんばかりに呆然としていた。
一体、何を驚いているんだろう?
そんな疑問を抱いている間にも、状況は進んでいく。
管理人さんが、小声で声をかけてきたからだ。
「皆、すぐさま撤退戦ができるように構えてて」
「ど、どうしてですか……?」
「おそらく相手は、『聖杯』を所持しており、それによって、あのサーヴァントたちは『強化されている』。流石の僕でも強化されたサーヴァントを複数相手取るのは難しい。だから、今、この場で奴らを相手取るのは非常に危険だ」

確かに、サーヴァントの実力は見た目で判断できないことが多い。
ましてや、相手は強力な英霊が5人もいるんだ。
いくら管理人さんでも、手古摺りそうなのは明白だ。
だけど――。
そう思っていると、突然笑い声がその場に響いた。
笑い声の大本は……「魔女」からだ。
「ねえ。お願い、誰か私の頭に水をかけてちょうだい。まずいの。やばいの。本気でおかしくなりそうなの」
そう言いながら、彼女は狂ったかのように笑っていた。
その姿は……とても正気とは呼べないモノだった。
……おかしい。
さっきまで、敵だと認識できるほど殺気に満ちていたのに……。
「だってそれぐらいしないと、あんまりにも滑稽で笑い死んでしまいそう！　ほら、見てよジル！　あの哀れな小娘を！　なに、あれ羽虫？　ネズミ？　ミミズ？　どうあれ同じことね！　ちっぽけすぎて同情すら浮かばない！」
そう言って、高々と笑う彼女の姿に、管理人さんを除く全員が唖然として動けず、ただ見つめることしかできなかった。
しかしその中で、ただ一人だけ、彼女の言葉を聞いて顔を青ざめさせた者がいた。
それは――ジャンヌさんだった。ジャンヌさんはまるで恐ろしいものでも見たかのような表情を浮かべていた。
だがその理由までは分からなかった。
それでも、この状況がよろしくないことだけは理解できた。
そんな中、鬱憤を晴らすようにしゃべっていた「魔女」が口を開いた。
「ああ、本当――こんな小娘（わたし）にすがるしかなかった国とか、ネズミの国にも劣っていたのね！」
その瞬間、空気が変わった。
先程までの、張り詰めた緊張感ではない。
もっと深く、暗い憎悪の感情。

それに気づいた時、私は鳥肌が立った。
思わず一歩後ずさってしまうほどの、恐怖を感じた。
――これは、殺意だ。
――国を滅ぼそうとするほどの、強い、強い殺意だ。
「ねえジル、貴方もそう――って、そっか。ジルは連れてきていなかったわ」
「貴女は……貴女は、誰ですか!?」
ようやく絞り出したような声でジャンヌさんが問いかける。
それに対し、「魔女」は何でもなさげにこう言った。
「それはこちらの質問ですが……そうですね、上に立つものとして答えてあげましょう」
「私はジャンヌ・ダルク。蘇った救国の聖女ですよ、もう一人の『私』」
「ッ！」
ジャンヌさんの顔が、今まで以上に強張った。
そして同時に、彼女が何者であるのかを理解した。
ジャンヌさんと同じ姿をしていて、ジャンヌさんと同じサーヴァント。
だけど、中身はジャンヌさんじゃない。
彼女こそが、ジャンヌさんの言っていた、もう一人の自分なのだと。
「……馬鹿げたことを言わないでください！　あなたは聖女などではない！　それはこの私自身が一番知っていることです！」
ジャンヌさんが叫ぶ。
そうだ。
ジャンヌさんは、自分のことを聖女にはふさわしくないって言ってた。
そんなジャンヌさんが、自分のことを聖女だなんて言うはずがない。
そんな疑問を抱いていると、「魔女」は言葉を続ける。
「ええ、ええ。分かっていますとも。私は聖女なんかじゃありません。私は悪魔と契約した、ただの魔女。竜の魔女と呼ばれた怪物です」
彼女は、そう言って笑った。

狂喜に満ちた笑顔で、自分を嘲笑うかのように。
だけど次の瞬間、彼女の顔から狂気は消え失せ、代わりに真剣な表情で言葉を紡いだ。
まるで、これから告げることが本題であると言うように。
「まぁそんなことよりも、フランスを滅ぼすよりも先に、貴女を殺してしまいましょう」
そう言って、ゆっくりと視線を動かして――ジャンヌさんを見た。
まるで獲物を狙う肉食獣のような目で。
それを向けられたジャンヌさんは、蛇に睨まれた蛙のように固まってしまっていた。
そして、再び視線を戻した彼女は、先程の狂った笑みではなく、優しい微笑を浮かべてこう続けた。
「だから、安心してください。皆等しく地獄へと送ってあげましょう。あいつらが私にそうしたように」
そう言われたジャンヌさんは、一瞬呆けたような表情を見せたけど、すぐに怒りの形相に変わった。
しかし、そんなジャンヌさんを管理人さんが制する。
「抑えなさいジャンヌ。今は怒りに任せて行動するべきではない」
「……ありがとうございます兄さん。少し冷静さを欠いていました」
そう言って、ジャンヌさんは深呼吸をして心を落ち着かせる。
それを見て、管理人さんは静かに問いかけた。
「ねぇ、黒いジャンヌ。君は僕のことを知っているかい？」
「ええ、知っていますとも、お兄さま？　あなたはこんな女にも手を差し伸べようとしましたね？　やはり体が目当てだったのかしら？」
管理人さんの言葉に対し、皮肉気に返す『魔女』。
しかし管理人さんは動揺することなく、落ち着いた口調で話を続けた。
「僕のことを知っているなら話が早いよ。僕は君と幼い頃にとある約束をしたんだ。それは憶えているかな？」
「は？」
「!?　にににに兄さん!?」

管理人さんの問いに対して、二人が困惑の声を上げる。
「魔女」はわけがわからないといった表情だが、ジャンヌさんは先程の悲しそうな顔を一変させて、真っ赤になっていた。
それも当然だろう。
いきなり訳の分からない話をされたら誰だって混乱してしまう。
それでも、管理人さんは構わず続ける。
その瞳には確信めいたものが見え隠れしていた。
「ネタ晴らしはしないよ。それで、答えられるかな？」
「兄さん!?　そういう話はこんな場所でしなくてもいいでしょう!?」
「放しなさいジャンヌ。これが一番手っ取り早いからだ」
焦った様子のジャンヌさんを、管理人さんが引き留める。
その様子を見て、なんだか空気が緩くなってしまった。
さっきのシリアス君はどこに……ジャンヌさんが赤い顔のまま、管理人さんの口を抑えようとしている様を見てそう思った私だが、案外効果は劇的だったようだ。
ふと、「魔女」に視線をやると、困惑した表情で頭を抱えている「魔女」の姿がある。
「幼い、頃……？　お兄さまと、約束した……？」
ブツブツと呟いている。
どうやら思い出そうとしているみたいだ。
でも、その姿は忘れ物をしてしまった子供のように儚い感じで、今にも消えてしまいそうだった。
やがて、何かを思い出したのか、ハッとした表情になって管理人さんを見る。
そして、震える声で言った。
それは、ある意味では真実であり、同時に嘘でもある言葉。
だけど、今の彼女にとっては何より残酷な一言。
「私の、幼い頃は……？」
「どうやら思い出せないようだね。こっちのジャンヌはすっごい焦っているのに」
管理人さんはそう言って苦笑する。

対する彼女は俯いて、何も言わなくなってしまった。
だけど、私は気づいていた。
彼女が泣いていることに。
肩が小さく上下していて、嗚咽が漏れていることに。
そして、
「そこの男を殺しなさい！　バーサーク・ランサー！　バーサーク・アサシン！」
「よろしい。では、私は血を戴こう」
「フゥ……男が相手なんて気乗りしないわ……まぁ、その代わりにあの聖女様とお嬢さんたちを食らいましょうか」
突然大声を上げて命令を下す彼女に対して、二人は特に驚くことなく応じた。
そして、戦闘態勢に入る二人。
そんな彼女たちを見て、ジャンヌさんも旗を構える。
管理人さんも本を構え、サーヴァントの皆も戦闘の準備を整えた。
『皆！　この特異点に来て初のサーヴァント戦だ！　油断しないでくれ！』
「分かってる！　皆、負けないで！」
ロマンが警告を飛ばし、私が皆に単純な指示を出す。
下手な指示は皆の邪魔になるからだ。
そうして、この特異点に来て初のサーヴァントとの戦闘が始まった。

## 魔女の考察

「らぁっ！」
「ふんっ！」
まず動いたのは、二人の槍兵。
蒼い猛犬と、死人のように肌が白い男性。
バーサーク・ランサーと呼ばれた男性は、その手に槍を構えて真っ直ぐに突っ込んでくる。
狙いは――管理人さんだった。
それに対して、クーニキは、管理人さんとランサーの直線上に割り込み、朱槍で薙ぎ払う。
ガキィッ!!　鈍い音が響く。
明らかに、力任せに振り回しただけの一撃だったのに、まるで鉄塊を殴ったような音を立てて、バーサク・ランサーは吹き飛ばされていた。
凄まじい威力。
だけど、ランサーはその程度で倒れたりはしなかった。
瓦礫の山から出てくると、その無傷な体をさらす。
「ッチ！　やけにしぶてぇな。今のは結構強めに打ったんだぞ？」
「フッ……あの程度ではこの私を倒すことなどできぬよ」
「言ってろ。その心臓、穿ってやるからよぉ！」
今度はクーニキから仕掛ける。
先程のランサーみたいな正面からの特攻ではなく、低い姿勢で駆けていった。
その速度はかなりのもので、一瞬にして距離が詰まる。
対するランサーは、迎撃するのではなく、その手に持つ血のような槍を投げつけた。
投擲。
物を投げるというシンプルな攻撃方法。
投げられた石が当たって血を流すのは珍しくないことだが、投げているものと投げた人物はその比ではない。

クーニキの胸元に向かって飛んでいく槍。
それは、クーニキの胸に突き刺さるかと思ったが、直前で軌道をわずかに変える。
そのわずかに逸れたことで一刻の猶予ができたクーニキが、槍を弾き飛ばし、更に接近した。
速い。
さっきよりもずっと。
想像できない速さだった。
そのまま肉薄すると、槍を突き出す。
しかし、それでもランサーは慌てる様子を見せなかった。
それどころか、不敵な笑みを浮かべたままだ。
不穏な気配を感じて、咄嗟に強化魔術をクーニキにかけた。
次の瞬間。
ランサーの体から先程弾き飛ばした槍が、体の内側から突き破るようにして現れる。
そして、それは勢いよく飛び出してきた。
その槍がクーニキを貫く――ことはなかった。
「あっぶねぇ……いい援護だマスター！」
「……外れたか」
私が咄嗟に使うことのできた強化魔術が間に合ったクーニキは、ぎりぎりだったが回避に成功する。
クーニキが避けたことで、ランサーが放った技は不発に終わり、飛び出した槍はどろどろと形を失って地面に落ちた。
だけど、これは……　私は思わず息を飲む。
今の攻撃は……まさか!?
「クーニキ！　その槍、血でできてるみたい！」
「分かってるよ、っと」
回避した状態を立て直し、ランサーから距離をとるクーニキ。
そんな彼の腕には、一本の血濡れた槍があった。
あれは間違いなく、先ほどランサーが投げたものだろう。
血で作られた武器。

ただ手に出すだけじゃなく、体から直接突き破るようにして発動することも可能。
しかも、あの威力……ただの人間が受けたら即死間違いなし。
そんなものを、彼は平然と持っている。
改めて対峙してみると分かる。
目の前にいる男は、今まで戦ってきたどのサーヴァントとも違う存在だと。
その力は圧倒的で、人間である私たちでは到底太刀打ちできるものではないと思わされる。
でも……。
私は歯を食いしばって、皆のためにできることをするんだ！
「よそ見は禁物よ？」
意識がクーニキ達に逸れていると、バーサーク・アサシンがこっちに向かって魔力の塊を飛ばしてくる。
当たれば私の体なんて容易く破壊できそうなものを前にして、私は頼れる後輩の名を呼んだ。
「マシュ！」
「はい！」
魔力の塊と私の間に割り込んだマシュが、その手に持つ大盾で防いでくれる。
彼女の持つ盾のおかげで、私は傷一つ負うことなく済んでいた。
ありがとう、と声をかけると、彼女は笑顔で振り返ってくれる。
やっぱり頼りになる子だ。
だけど、アサシンは、それだけで終わらせてくれなかった。
アサシンがその手に持った杖を振ると、生み出された血の波が私達に押し寄せてくる。
流石にマシュでも防ぎきれない量だ。
でも、
「はぁっ！」
ジャンヌさんが旗を大きく振るい、血の波を吹き散らす。
それによって私達は事なきを得た。

だけど、そこで終わりじゃない。
吹き飛ばされた血が、空中で集まり再び大きな塊となって襲い掛かってくる。
それもまた、ジャンヌさんの旗によって対処された。
本当にすごい。
これが、管理人さんが元通りにしたジャンヌさん本来の力……！
「……兄さん、絶対に霊基を修復しただけじゃありませんね。明らかに力が本来のそれ以上に出ています」
「え!?　そうなの!?」
ジャンヌさんが掌を開いたり握ったりしていた時に呟いた言葉が聞こえてびっくりする。
確かに、今の彼女からは以前感じられたサーヴァントとしての力も感じるけど、それ以外にも何か別の力があるように思える。
それが何なのかまでは分からないけれど、彼女が本来以上の力を発揮しているのは確かだった。
それを為したのは……きっと、管理人さんなんだろうなぁ……。
ふと、管理人さんのことが気になって、あたりを見渡した。
一体どこに……？
「あ！　管理人さんはあそこにいます！」
「え!?」
そう言ってマシュが指差したところを見ると、そこには倒れているクーニキがいた。
そして、クーニキの傍らには管理人さんの姿もあった。
二人はどうやら無事なようだが、クーニキは全身の所々に傷があるようで、負傷のせいなのか、息も少し上がっている。
「クー、大丈夫かい？」
「ったりめぇだ。しっかし、厄介すぎるぜあの血の槍」
「そうだね……」
二人の会話から察すると、さっきの一撃はクーニキにとっても想定外だったらしい。
つまり、あの攻撃はランサーの切り札みたいなものということだ。

そんなものが簡単に使えるということは……。
嫌な予感が頭を過った時、足元に魔法陣が現れる。
もしや、相手の攻撃……!?　そう思ったが、その魔法陣から感じる魔力はどこか知っているもので……。
よく見ると、私たちだけじゃなくて、管理人さんたちとアサシンを相手取ってるエミヤの足元にも同じような魔法陣があった。
そして、管理人さんが魔法陣を見ずに、その手に持った本を開いて詠唱しているところから、これは管理人さんの仕業だと把握する。
そのことに安堵していると、管理人さんがこう言った。
「時間は稼げた。皆、空間跳躍をするよ!」
「空間跳躍って何!?」
「ワープです先輩!」
聞き慣れない単語に戸惑っている間に、その魔法陣から発せられる魔力はどんどん強くなっていく。
このままじゃまずいと思ったのか、「魔女」のサーヴァントたちが急いで駆け寄ってきた。
だけどもう遅い。
魔法陣から放たれた光が私達を包み込むと、次の瞬間、私達は見知らぬ場所に転移した。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「あらら?　行ってしまわれたわ?　どうするのアマデウス?　彼が逃げたのなら、そう簡単には捕まえられないわよ?」
「さすがの僕でも彼がここにいるとは思ってなかったよ。さて、また探さなければならないか……」
「もう!　アマデウスったら、もっと笑顔に行きましょう!　こんなつらい時こそ優雅に!」
「マリア、君は相変わらずだね。まぁ、今は君の言う通りだ。とにか

く、カルデアのマスターたちを追おうじゃないか」

～～～

したんだい？　幼い頃とか約束とか……』
「ああ、それに関してはぐえっ」
「兄さん？　それ以上はいけませんよ？」
「痛い痛い。アームロックはやめてくれよジャンヌ」
管理人さんが「魔女」にした質問の意図をロマンが聞いて、それに管理人さんが答えようとするのを遮って、ジャンヌさんが管理人さんにアームロックを仕掛ける。
なんだろう……「それ以上はいけない！」って言葉が浮かんでくるんだけど……。
まぁ、そういうのはさておき、私も気になったので聞いてみた。
「ねぇ、管理人さん。あの質問は何か意味があったの？」
「立香さん!?　あなたもですか!?」
「うん、真面目な話だから、そろそろアームロックを解いてあげてジャンヌさん。管理人さんすっごい余裕そうだけど、話が進まないから……」
私の言葉で、渋々といった様子ではあったが、ジャンヌさんは管理人さんを解放してくれた。
管理人さんが解放されると、ジャンヌさんは彼の腕を掴んで、どこかへと歩き出す。
管理人さんは何事もなかったかのように付いていくので、ちょっと心配になったが、「まぁ、ジャンヌさんだし大丈夫か」と楽観的に考え、見送った。
やがて、私達から２０メートルぐらい離れた二人はこちらに声が聞こえない程度に話をしだす。
大体３分ぐらいしてから二人は戻ってきて、再び会話を始めた。
ちなみに、その間にエミヤとクーニキは周囲を警戒するために離れており、この場に残っているのは私達だけである。
二人が戻ってきたところで、ロマンが管理人に話しかけた。
『それで、もう一度聞くけど、さっきの質問の意味は？』
その問いに、管理人さんはこう答える。
管理人が口を開いた瞬間、その場の温度が急激に下がった気がし

た。
管理人さんはゆっくりと息を吸うと……
「実はジャンヌが幼い頃、とある約束をしたってのは、あの話を聞いたなら分かっているだろう？　その内容は言えないけど、ジャンヌの反応からして、覚えているのは分かっている。そして、「このフランスを憎んでいるから、私は滅ぼす」と「魔女」は言っていた」
「うん……すっごい怖かった」
管理人さんの言葉を肯定するように、私は呟く。
あの時の彼女は、まるで憎悪に飲み込まれたかのような目をしていた。
それは、私達が知っているジャンヌさんではなく、ただひたすらに他者を呪っているような、そんな目をしていたのだ。
もしあの時、彼女が聖杯を使って、私達に襲い掛かってきたらと思うとゾッとする。
そんな事を考えていると、管理人さんが静かに言った。
彼は真剣な表情で……しかし、普段通りの声でロマンに告げる。
「僕はその時考えたんだよ。もしかしたら、「魔女」はジャンヌが心のどこかで思っていた「憎悪」の部分なのかもしれないと。しかし……」
「私は、自分を聖女にふさわしくないと思っていましたが、このフランスにあれほどの恨みを持ったことはありません。それが例え、火炙りにされた時でも変わりません」
「……このように、本人自身が否定している」
『……なるほど』
管理人さんの言葉を引き継いだジャンヌさんの言葉に、ロマンが黙った。
私も何も言わず、二人のやり取りを聞く。
ジャンヌさんはさらに続けた。
「この場で言うのは恥ずかしいんですが……兄さんの言った幼い頃の約束を、私は一度として忘れたことはありません。ですが、それを誰かに言うつもりもありませんでした。だから、このことを知っているのは、私と兄さんだけになります」

ジャンヌさんの話を聞いているうちに、ロマンは納得したように何度か小さく首を振る。
そして、ロマンは管理人さんを見て問いかけた。
彼の目は先程とは違い、鋭いものになっていた。
管理人さんはそれに応えるよう、あることを告げた。
「おそらく、相手は聖杯を使って創り出したんだろう。自分にとって都合のいい――フランスを憎む「ジャンヌ・ダルク」をね」
その言葉を聞いた瞬間、私達は言葉を失った。
何故なら……。
「自分が愛した国を滅ぼす存在なんて、本来ならいるわけないだろう？」管理人さんが言いたいのは、そういうことだ。
もしも、「魔女」がジャンヌさんと同一人物だったならば、火炙りの場で怨嗟の声を上げることもなく、オルレアンで虐殺を行うこともない。
だから、フランスを憎む誰かによって、本来のジャンヌさんとは違うジャンヌさん――「魔女」が創り出されたんだろう。
確かに、そう考えると辻妻が合う。
だけど……それでも分からないことがあった。
だって、それじゃあジャンヌさんはどうなってしまうのか。
仮に、管理人さんたちの考えが正しいとすれば、「魔女」はジャンヌさんの偽物ということになり、ジャンヌさんを利用しようとして、フランスに復讐しようとした人物は、一体どこに行ってしまったのだろうか。
私の疑問に答えるかのように、管理人さんがさらに説明を続ける。
その声音には、若干の怒気が含まれていた。
彼がここまで怒りを見せるのは初めてだ。
それだけ、自分の妹分の偽物とも言うべき存在を作られたのが頭に来てるんだろう。
管理人さんの怒りを感じているのか、ジャンヌさんは顔をしかめさせていた。
……うん、これは後でフォローが必要だよね。

そんな事を考えながら、私は管理人さんの説明に耳を傾けた。
「ということで、僕たちができることは、オルレアンの状況を知りつつ、「魔女」を生み出した「誰か」を探っていこう。そして、カウンターとして召喚されたのはジャンヌだけではないはず。だから、協力してくれるサーヴァントも探しつつ、戦力が集まったらオルレアンで決戦だ。異論はないかな？」
「ありません！　必ず、あの偽物のジャンヌを倒してみせましょう！」
管理人さんの問いに、私は力強く答えた。
こうして、新たな目標を掲げて、私達はこの特異点を進んでいくのであった。

# 一時の休息

目標を新たにした後、ロマンの案内で近くの森にある霊脈（魔力がたくさん集まってるところ）へ向かった私たちは、しばしの休息をとることにした。

理由は単純明快。

ロマンが言うには、このままオルレアンに向かうのは危険だということらしい。

まぁ、それは仕方がないと思う。

何しろ、管理人さんはほとんど戦っていなかったが、こちら側のサーヴァントで、戦闘に特化しているエミヤとクーニキが、バーサーク・サーヴァントに押されていたことから、今の戦力では心もとないらしい。

そのため、2人までなら私を経由して即座に召喚できるのだが、それ以上となると難しい追加召喚を魔力のたまり場である霊脈で行うとのことだ。

今回呼んだサーヴァントは二人。

「ようやく私を呼んでくれましたねマスター。それではシロウ。ワイバーンシチューを私に」

「君は変わらないなセイバー……」

一人目は、召喚されてすぐ料理当番のエミヤにご飯を貰いに行ったアルトリアさん。

サーヴァントの中でも『三騎士』と呼ばれるクラス。

その中でも一際優秀な『セイバー』というだけあって、ステータスも宝具も高水準の強さを誇っている人だ。

その代わりすっごく燃費が悪いらしい。

確かに、それは特異点Ｆで身をもって知っている。

あんなに宝具を連発してきたことで、改めて聖杯ってやばいものだと分かった出来事でもあった。

正直言って相手にしたくないけど、味方となれば心強いことこの上ない存在でもある。

ただ、一つだけ欠点があるとしたら……。
彼女が食いしん坊だというところだろう。
今も、さっきの昼食時に食べたばかりなのに、もう夕食のリクエストをしている。
まぁ、別にいいんだけどね。
「私のような者でも、貴女の力になれますかマスター？」
「うん！　今は猫の手も借りたい状況だからね！　……ライダーさんは弱くないからね⁉　あくまで例えて言っただけだからね⁉」
「ふふっ……大丈夫ですよマスター。分かっています」
そして二人目は、召喚されてすぐに私の元に駆け寄ってきたライダー――メドゥーサさん。
彼女もまた、強力な英霊の一人であり、特にスキルにより強力になったパワーは強力無比なものだ。
それに、彼女は私達の中で唯一のライダーなので、数人ぐらいだったら宝具の一つであるペガサスに乗せて逃げられるらしい。
メドゥーサさんには、クーニキと一緒に斥候を担当してもらおうかと思ってる。
素で機動力の高いクーニキと、万が一相手に気づかれたとしても相手の追跡を振り切れるだろう速度を出せる宝具を使えるメドゥーサさんなら、きっといい働きをしてくれるはずだ。
ちなみに、私の礼装を作ってくれたメディアさんと、もう一人サーヴァントがいるのだが、今回はお休みだ。
今の私じゃ四人が限界というのもあるけど、一番は下手に人数を増やして混戦が起きるのを防ぐためだという。
他にも、管理人さんが言うには、メディアさんの魔術は確かに強力だが、昼間に遭遇した「魔女」たちのサーヴァントは、おそらく近接戦に特化しているらしい。
アサシンはそうでもないけど、ランサーは接近してくる相手を拒絶する血の槍で、私たちの仲間の中でも特に接近戦に秀でている（あと燃費がいい）クーニキを押していた。
それだけでも結構苦しい戦いを強いられているのに、管理人さんが

ある情報をもたらしたことでメディアさんを呼び出そうとしたのをやめる決意をしたほどだ。
なんでも、アサシンは知らないらしいけど、ランサーは管理人さんの顔見知りらしい。
それに関しては満場一致で納得できた。
だって、ジャンヌさんが知り合いだというし、あのカルデアで見た『夢』でも、昔っぽい服装の王様と親しくしていた。
なら、あそこにいたサーヴァントの誰かと知り合いかもしれないというのも納得できるもの。
そんなわけで、戦力としては申し分ない2人を召喚することができたのであった。
しかし、私達が休んでいる間にも、事態は着々と進行しているようで……。
「皆聞いてくれ。情報をいったん整理しよう」
食事をとっている私達に聞こえるような声で、管理人さんが声を上げる。
その表情は、いつになく真剣なもので、私は思わず姿勢を正してしまった。
それは、隣にいるマシュとジャンヌさんも同じで、二人は同時に彼の言葉を待つ。
すると、管理人さんは静かに語り始めた。
「まず、今回の特異点の元凶であろう「魔女」は、フランスに恨みを持つであろう「誰か」が聖杯を使って創り出した存在だということはみんな分かっているよね？」
それは、ロマンが教えてくれたことだ。
特異点Ｆでのアルトリアさんと同じように、今回も黒幕であるサーヴァントがいるはずなのだ。
しかも、今度はオルレアンという大都市を破壊し、さらにはサーヴァントを複数操るほどの力を持っているときた。
そんなことができるのは、聖杯ぐらい。
そして、聖杯自体が勝手にサーヴァントを召喚するのは、それこそ、

聖杯戦争のために作られた聖杯ぐらいだということも知っている。
だけど、今回の目標である特異点を創り出した聖杯は似ているようで違うらしい。
それは、私も感じていたことだ。
確かに、魔術師じゃない私でも、聖杯を掴んだときはすっごい力を感じることができた。
でも、どこか違うかもしれないとも思っていた。
それは多分、聖杯が持っていたはずの、「ナニカ」を感じなかったからだろう。
聖杯に宿っていたのは、ただの膨大な魔力だけだったのだ。
だから、特異点を創り出した聖杯そのものがサーヴァントを召喚することはないだろう。
ということは、管理人さんが言った通り、このフランスを憎む「誰か」によってあの黒いジャンヌさん――「魔女」は創り出されたんだ。
「「魔女」が特異点を創り出してしまうほど暴れたのは分かっている。
でも、彼女を創り出したのは、まだ誰か分かっていないから一先ずこの話を置いておこう。次は現地に召喚されたであろうサーヴァント――「カウンター」の存在だ」
管理人さんの言葉に、私たちは一斉にジャンヌさんを見る。
視線を集められたジャンヌさんは顔を真っ赤にしていたが、それをごまかすかのように咳ばらいをすると、管理人さんに話を進めるよう催促した。
「皆が分かっている通り、ジャンヌは今回の異常事態に『抑止力』によって召喚されたサーヴァント――「カウンターサーヴァント」とも言うべき存在だ」
「ええ。兄さんの言う通り、私は何らかの意思を持って召喚されたのは分かっています。でも、それが何なのかまでは……」
申し訳なさそうにするジャンヌさん。
そんな彼女をフォローするように、管理人さんは再び口を開いた。
どうやら、今の話だけで何か分かったみたいだ。
……相変わらず凄いなぁ。

こんな短時間で分かるなんて……相当な信頼関係がないとできないものなんだろう……。
少し、「うらやましい」と考えてしまった。
でも、今は関係ないと頭を振ってその考えを頭の中からなくし、管理人さんに続きを促す。
「そんなカウンターサーヴァントだが、果たしてジャンヌだけだろうか？」
「確かに……ジャンヌさんがいかに優れていたとしても、たった一人では問題を解決できるとは思っていません」
「そうだマシュ君。それに、ジャンヌは召喚された当初、並のサーヴァントより弱体化していた。今は、僕が欠落していた霊基を修復したことで、ほぼ元通りになっている」
管理人さんの言うことは最もだった。
確かに、ジャンヌさんはサーヴァントの中でもトップクラスの強さを誇る英霊だ。
しかし、それでも一人では解決できないことだってある。
例えば、ワイバーンの大群に襲われたときとか、最近起こったことで例えれば、バーサーク・サーヴァントを複数相手取るとか。
でも、私の主観的な意見では、ジャンヌさんだけじゃ絶対に問題を解決できないと思う。
しかも、ジャンヌさんが召喚されて、管理人さんがジャンヌさんを元通りにしてなかったら、ジャンヌさんはバーサーク・サーヴァントと戦った時、一人も倒せず負けてただろう。
他にも、私たちが一緒にいたとして、管理人さんがワープを使ってくれなかったら、私達は奇跡が起こらない限りあそこで負けていたはずだ。
そう考えると、管理人さんは改めてよく見えているんだということが分かる。
本当にありがとうございます管理人さん。
心の中で管理人さんに感謝を告げて、管理人さんの話を聞く。
「召喚された当初のジャンヌでは、確実に奴らに負けていただろう。

それは、僕が霊基を修復したとしても変わらない。そんなことも分からないほど『抑止力』は馬鹿なのか？　そんなことはないだろう。人を殺すことでしか世界を守れない「ポンコツ」だが、そこら辺の分別は分かっているはずだ。だから、現地で協力してくれそうなサーヴァントはジャンヌ以外にもいるはずだろう」

「確かにな。管理人の言う通り、『抑止力』は馬鹿じゃない。むしろ、この手に関しては優秀すぎるほどに優秀なのは知っている。だからこそ、私も貴女には期待しているよ。ミスジャンヌ」

管理人さんの言葉に同意するエミヤ。

そんな二人に、ジャンヌさんも嬉しそうに微笑んでいる。

私も、二人の言葉を聞いて、思わず笑みを浮かべてしまう。

ただ、管理人さんの言いたいことがまだ終わっていないことを察したので、すぐに表情を引き締める。

そして、管理人さんは話を再開した。

「だから、明日からの目的は、カウンターサーヴァントの勧誘なのだが……」

「？　どうしたんですか管理人？」

話をいったん区切った管理人さんに、シチューをほおばっているアルトリアさんが問いかける。

ほんとにどうしたんだろう……？

そう思っていると、管理人さんは先程の静かな声ではなく、少し遠くに聞こえるような声量で誰かに話しかけた。

「で、そこにいるのは誰だい？　見知らぬサーヴァントさん？」

「!?」

「わ！　見つかってしまったわ！」

サーヴァント!?

まさか……敵襲!?

いつの間にか接近されていたことに驚く間もなく、管理人さん以外が戦闘態勢を整える。

だけど、管理人さんは相変わらずのんびりとした態度のまま、先程の声の主を招き入れた。

「それで？　何の用だい？　マリー？」
「気づいていたのね！　流石は、管理人さんだわ！」
管理人さんの呼びかけに答えながら現れたのは、とても美しい女性だった。
赤を基調とした服装に、まるでキノコのような帽子……帽子？　を被っている。
そう思った瞬間、ジャンヌさんが彼女の名を呼んだ。
「マリー・アントワネット……？」
「ええ、そうよ。初めましてと言うべきかしら？　麗しの聖女様？」
そう言って、彼女はジャンヌさんに笑顔を向ける。
どうやら、彼女がフランスの王妃――マリー・アントワネットらしい。
え？　マジ？
この人があの悲劇の王妃様？
肖像画と全然違うんですけど!?
そんな彼女に、ジャンヌさんは戸惑った様子で口を開く。
多分、何でここにいるのか聞きたかったんだと思う。
でも、その前に管理人が口を開いたため、マリーさんは管理人さんと話し始めた。
「君はこの時代には、まだ生まれていないはずだから……」
「ええそうよ、管理人さん！　私はサーヴァントとして召喚されたの！　私の愛する、このフランスにね！」
「相変わらず明るいねマリー」
「優雅と言って下さる？　管理人さん？」
「おっと、これは失礼。優雅だねマリー」
「うふふ、ありがとう」
そう言って笑い合う二人。
なんか、マリーさんが一方的に管理人さんのことを好いているように見えるんだけど……。
というか、管理人さんってこんなにフランクな人だったっけ？
少なくとも、私たちと一緒にいた時はもっとこう、私たちの後ろで

見守ってくれる保護者みたいな感じがしてたんだけど……。
「それはだね立香君。彼女にはこのようにしてくれと頼まれているからね」
「だから、思考を読まないでください！」
なんだろう。
私、管理人さんに心読まれすぎじゃないかな？
いやまぁ、いいんだけども。
それより、なんでここにマリーさんがいるんだろう？
「それはね立香さん。あなた達がここに来る前にとある街で見かけたのよ。管理人さんが子供の頃に語ってくれたおとぎ話の様な大立ち回りを見せるあなた達をね！」
「マリーさんにも思考を読まれた!?」
あれ？
もしかして、私だけじゃなくて皆の考えも読んでいるのかな管理人さん。
まぁ、別に困ることではないしいいか。
そんなことを考えている私に、マリーさんが近づいてくる。
そして、私の手を握りながら、すっごいキラキラとした眼差しで見つめてきた。
「え、なな何ですか？」
「立香さん！　今、私のことをなんて呼んでくださったの？」
「え、マリーさんですけど……？」
「……」
あ、なんかプルプル震え出したんだけど……。
もしかして、癇に障ったのかな……。
そうだったら申し訳な――
「素晴らしいわ！」
「わひゃっ!?」
いきなり抱きつかれた!?
ちょ、ちょっと待って!?　この状況は一体!?
突然のことに混乱していると、今度は管理人さんまでこちらにやっ

てきた。
「管理人さん！　助けてください！　なんかすっごく柔らかいマシュマロみたいなものが押し付けられてるんですが!?」
「よかったじゃないか立香君。マリーに気に入られるなんて」
そう言って、楽し気に笑う管理人さん。
いや、笑ってないで何とかしてほしいんですけど!?
そう思っていると、マリーさんが少し拗ねたように管理人さんに言った。
というか、顔が近い……！　いい匂いもする……！
「もう！　管理人さんたら、私のことを子犬か何かだとお思いで？」
「実際、マリーは子犬みたいだったじゃないか。本を書きたい僕をいろんなところに連れまわしては、高い木に登りたいと言って僕を足蹴にしたり、一日中連れまわしたじゃないか。楽しかったけど、君のお父さんや家政婦さんに怒られてしまったからね」
「懐かしいわ！　そういえばそんなこともあったわね！」
そんなことあったんだ……。
ということは、この二人は結構前から知り合いだったということなのかな？
そんなことを思って聞いてみると、管理人さんは苦笑しながら答えてくれた。
なんでも、暇すぎて川沿いで不貞寝をしていたら、川が増水するレベルの大雨が降ってきて、そのまま流されたらしい。
そのまま下流まで流された管理人さんを見つけた幼少期のマリーさんが、興味をもって管理人さんを拾ったらしいのだ。
いやいや……なにやってんの管理人さん？
しかもそれが原因で、マリーさんのお父さんとお母さんに怒られたとか、ホント何してるの？
でも、そんな出会いがあったからこそ、こうして二人が仲良くなったんだと思うと、なんだか微笑ましい気がしてくる。
「……僕のこと、完全に忘れてるよね。マリア」
完全にみんなの興味がマリーさんに逸れているうちに、横たわった

男性サーヴァントがそんなことを漏らしていた。
なんか……ご愁傷さまです。

## 仲間を加えて

あの後、マリーさんと一緒にいた男性――「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト」さんも交えて話をした。

なんでも、彼は音楽家で、マリーさんとは生前からの友達なのだという。

流石にモーツァルトの名前を知っていた私とマシュは、非常に驚いた。

ちなみに、管理人さんもモーツァルトさんと知り合いらしいのだが、どちらかというとマリーさんの方へ着いて行ったらしいので、あまり親しくはないそうな。

「まぁ、マリーも若くして逝ってしまったから、僕はその後も放浪を続けてたんだよ」

「ごめんなさい管理人さん。私も、もう少し貴方とお話がしたかったわ」

「僕もだよ、マリー。ほんとに惜しかったよ。君が亡くなってしまったのは……」

「……もう！　暗くなってはダメよ管理人さん！　こういう時こそ優雅にいかなくちゃ！」

そう言って、明るい笑顔を浮かべるマリーさん。

……本当に明るくて、前向きで、それでいて優しい人だ。

こんな人が、どうしてあんな結末を迎えて死んでしまわないといけなかったのか……。

そんなことを考えていると、食事をとり終えた管理人さんが話の続きを口にする。

「さて、これでこちらのサーヴァントの数は9人。相手である「魔女」が召喚したのが、イレギュラークラスを含まないとすると、その数は「魔女」を含めて8人。数の上では勝ったが、相手は聖杯と直結している。戦闘力という意味では相手が完全に上だ」

確かにそうだ。

先ほどの戦いでも、ジャンヌさん達はかなり苦戦していた。

その上、マリーさんたちが仲間になったとはいえ、まだ戦闘に参加していなかったサーヴァントも参加するとなると、勝ち目は薄くなるだろう。
それでも、私たちは立ち向かわないといけない。
そうじゃないと、私達に未来はないからだ。
そう考えていると、管理人さんが続けた。
「そして、あの場にいたサーヴァントだが、真名と戦力に関しては大体把握できた」
「!? ほ、ホントですか！」
マシュが驚いたように声を上げる。
すると、管理人さんはうむと重々しく肯定してくれた。
いや、さっきの戦いだけで、よくそこまで分析できましたね管理人さん!?
そう思ったが、口には出さないことにした。
だって、管理人さんだし。
「まず一人目は、バーサーク・ランサーと呼ばれていた男性。僕の記録が正しければ、彼は「ヴラド三世」。僕はヴラドと呼んでいたね」
『ヴラド三世……ルーマニアの王様だね。確か、串刺し公の異名を持っているはずだ』
ロマンの言葉に、思わず身震いする。
串刺し公って、それもう吸血鬼じゃん！
そんな人が敵側にいるとか、マジ勘弁なんですけど!?
そう思っていると、管理人さんが続ける。
「彼は自身が吸血鬼であることを嫌っていたのだが……あの様子と「バーサーク」というところから、バーサーカーのスキル「狂化」をかけられているようだね。じゃなかったら、彼があんな発言するわけないし」
……え、なに？
今の発言で、ちょっと引っかかるところがあったんだけど？
私がそう思っていると、管理人さんがまた言った。
「もう一人は分からないけど、僕以外によって書かれたお話とかに

載ってた情報とか、戦闘中に解析した情報なんかをすり合わせると、バーサーク・アサシンは「カーミラ」という名だ。「エリザベート・バートリー」ともいうらしいね？」

え？　解析した？

あの状態で？

なんでそんなことができるの、この人？

そう思って管理人さんを見つめると、管理人さんはフフンと自慢げに胸を張っていた。

どうやら、自分がやったことに対して、自覚はあるらしい。

……まぁ、いいか。

そんなことを思っていると、今度はマリーさんが元気よく手を挙げて喋り出した。

「はいはいはい！　もう一人、騎士のような姿をした子がいたと思うんだけど、あの子は「シュヴァリエ・デオン」！　私のお付きの騎士だったわ！」

と、そう言ったのである。

……シュヴァリエ・デオンって誰？

「女であり男、男であり女、として語られる十八、九世紀フランスの伝説的人物で、マリーさんが言った通り、フランス王家に仕えていた騎士ですよ先輩」

「へ～！　そんな人いたんだ！」

マシュの説明に驚く。

まさかマリーさんのお付きの人だったなんて！

しかも、フランス史でめちゃくちゃ有名な人らしい。

すごいなぁ……。

そう感心していると、管理人さんがさらに説明を続ける。

その表情は真剣そのもの。

なにか、重要なことを告げるかのように、重々しく口を開いた。

「さて、最後の一人になるが、彼女はねぇ……」

「どうしたんですか兄さん？　すごい言いにくそうにしてますが……」

「いや、大丈夫だ。僕が彼女のことを言いにくいのは、この後、彼女にぶん殴られないかについてなんだ」
「ぶん殴、えっ？」
確か……私が覚えている限りでは、最後の一人は女性だったはず……。
それも修道女というか、なんて言うか……そう、ジャンヌさんみたいな感じがしたんだ。
でも、その人の情報が出てこないということは、ジャンヌさんみたいではないということだろうか？
いや、待てよ？
そもそも、私はその人をちゃんと見ていないんじゃないのか？
だとしたら、印象が違うから分からなくてもおかしくはないかもしれない。
……うん、管理人さんがぶん殴られるってことは空耳だとしよう。
「現実逃避をしないでくれ立香君。彼女が殴るのは、あくまでありうるかもしれない話だ。……あれでも聖女って言われているからなぁ……」
「せい、じょ……？」
せいじょ……？
聖女ぉ!?
嘘!?
あの女の人が!?
あの人が!?
思わず、管理人さんの肩をガシッと掴んで叫ぶ。
それはもう、鬼気迫る勢いで叫んだ。
だって、信じられなかったのだ。
あの女の人が、管理人さんにぶん殴られるかもしれないと恐れられる女性が、私たちと敵対していて、しかも敵側にいるという事実に！
そんなの、信じたくないに決まってるじゃない！
だから、私は必死になって管理人さんに訴えた。
すると、そんな私にドン引きしながらも、管理人さんが答えてくれ

た。
「彼女の名前は「マルタ」。竜を祈りで鎮めたという話が後世に伝えられているが、真実は、竜を「拳」で沈めたという、聖女ならぬ「凄女」だよ」
「聖女マルタ……!?」
管理人さんが告げた名前に、ジャンヌさんが目を見開いた。
やっぱり、そういう界隈ではビッグネームじゃん！
ヤバいって！
だって、管理人さんに喧嘩売ったんだよ、その人！
管理人さん、死んじゃうってば！
あ、違った。
管理人さんなら、たとえどんなに不利になったとしても、勝ってくる未来しか見えない。
でも、そんな管理人さんが恐れるということは、単純に殴られるのが嫌なんだろう。
それでも、「凄女」はいくらなんでもひどいんじゃないかなぁ……？
「っ!?」
そんなことを思っていると、不意に背中が寒くなる。
この感覚には覚えがあった。
つい最近も、味わったことがある。
そう、あの時だ。
あの、ワイバーンに襲われた時や――サーヴァントと戦っていた時のことだ！
皆も、戦闘態勢を整えて、周囲に警戒心を飛ばしていた。
バッと振り返ると、そこにはいつの間にか一人の女性が立っていた。
それは、先程話題に出ていた女性――「マルタ」であり……。
何故だか、額に青筋を浮かべていた。
あ、おこですか？
もしかして、聞かれてた？
凄女とか言っちゃってたの聞こえてました？

「ええ、思いっきり聞こえていましたよ、アンタ達？　誰が凄女ですって？」
ニッコリと微笑む彼女の背後には、まるで般若が見えるようだった。
私たちは慌ててその場から離れようとするが、逃げ道は……というか、絶対に逃げられそうにない気配を漂わせていた。
うわぁ……ガチギレだよ、あの人。
管理人さんを生贄にすれば見逃してくれるかな……？
なんて考えが浮かんできたけど、すぐに打ち消した。
管理人さんを犠牲にして助かるくらいなら、死んだ方がマシである。
というか、死ぬ。
確実に殺される。
あの人は、間違いなく怒らせたらダメなタイプの人間だ。
ワイバーンよりも強いだろう竜を、絡んできたヤンキーをぶちのめす主人公みたいに地に沈めた女性……というか女傑。
……うん、やっぱ怖ぇよあの人!?
どうしよう、今すぐ逃げた方がいいよね？
でもどこに逃げる？
いや、そもそも逃げ切れるのか……？
そんなことを考えている間に、彼女は一歩踏み出していた。
そして、管理人さんの顔面に向かって、拳を振りかぶっていた。
昼間に見たサーヴァントの誰よりも速い攻撃を前にして、管理人さんはすぐさま移動させた掌で受け止める。
続けざまに繰り出されたもう一方の拳も、手首をつかむことで阻止した。
そして、両腕が受け止められたことを認識する前に、管理人さんを踏み台に大きく飛び退いた。
それでも、管理人さんは少しだけたたらを踏むと、何でもないかのようにいつもの構えをとる。
さすが管理人さん！

これなら、あの人が本気で殴ってきても大丈夫だね!!
……うん、冗談抜きでやばいかもしれない。
だって、管理人さんの足下が陥没しているんだもの。
あれはもう、人間凶器だよ……。
「久しぶりの挨拶にしては、ずいぶんと荒っぽいねマルタ?」
「誰のせいだと思ってんだよ!? 本人がその場にいないことをいいことに、さんざん人を凄女だなんだと言いやがって!」
ええ……?
何この人、すっごい口が悪いんですけど……。
これが本当に聖女なのかと疑ってしまう。
ただ、確かに彼女の言う通り、管理人さんは人のことを凄女と呼んでいたから、殴られるのは間違ってはいないと思う。
むしろ、管理人さんの方が悪いかもしれない。
だけど、それだって言い訳にしかならないわけで……。
とりあえず私は、頭を下げておくことにした。
土下座である。
「アンタ……なにをしてるのよ?」
「この度は! 私たちのところの管理人さんがあなたのことを凄女と呼んでしまい、誠に申し訳ありませんでしたぁ!」
深々と地面に額を押し付けて謝る私の姿に、マルタと呼ばれた女性は呆れたような声を出した。
まあ、そうなりますよねー……と思いながら、謝罪の言葉を続ける。
そんな私の頭を、管理人さんはポンッと叩いた。
「大丈夫だよ立香君。彼女が凄女なのは変わりないし、僕が失言したのも変わらない」
「おいコラ。また凄女って言ってんじゃないわよ」
あ、やっぱり凄女って呼んでたんだ。
そのことに気づいていなかったらしいマルタは、こめかみをピクつかせていた。
だが、すぐにため息をつくと、気を取り直したように管理人さんの方へと視線を向けた。

そして、真剣な表情（もう凄女の印象が強すぎて意味がない）をして、私たちにこう告げる。
「こんばんは、皆様。寂しい夜ね」
……うん。
「すみません。ギャップがすごすぎるので、もうちょっと楽にしてくれてもいいですよ？」
「……あぁっ！　もう！　少しは黙って人の話を聞きなさい！」
「すみません……」
どうにも真面目な雰囲気に慣れない……。
そう思って声をかければ怒られてしまった。
仕方なく、私たちは口を閉ざして、マルタさんの話を聞くことにする。
すると、彼女は少し落ち着いたのか、改めて自己紹介を始めた。
やはりと言うべきか、彼女こそが先程話題に出ていた聖女だったのだ。
そして、私たちにこう告げる。
「貴方達では、「竜の魔女」が騎乗する『究極の竜種』には勝てない。……そこの本狂いなら勝てるだろうけど、それでは意味がない」
「本狂いって、ひどいこと言うなぁ……」
「うっさい！　少しは真面目に聞け！」
どうやら、本気で怒らせてしまったようだ。
これはまずいと理解したので、大人しく彼女の言葉を聞いておくことにしよう。
マルタさんは、壊れた聖女――「魔女」のサーヴァントとして召喚されたが、そもそも虐殺は絶対にしたくなかったとのことだ。
それなのに、「魔女」が持つ聖杯で無理矢理いうことを聞かされて、逆らわないように「狂化」もかけられたとのことだ。
それによって暴れている本能を理性（管理人さんが言うには気合）で無理矢理静めているらしい。
でも、これ以上は持たないから、完全に狂ってしまう前に、私たちが「魔女」に勝てるような存在か試すとのことだ。

「いいですか？　私には時間がありません。ですので、手短に済ませてもらいますよ！」
「先輩！　来ます！」
マシュの警告と同時に、彼女は地を蹴った。
一瞬で距離を詰めると、管理人さんの顔面目掛けて、もう一度拳を振り抜く。
それを片手で受け止めようとした管理人さんだったが、その手が弾かれた。
そのまま、マルタさんの蹴りが管理人さんを襲う。
あまりの勢いに、森の中の木を何本かへし折りながら吹き飛ばされていく。
管理人さん……!!　と、心配した次の瞬間、目の前に現れた彼女の姿に、私は絶句してしまった。
それは、私だけではないらしく、他の皆も同じ反応をしている。
「この程度では、あの魔女に勝とうなど、夢のまた夢です」
「あ――」
そのまま振り下ろされる拳に、私は人理修復が始まって以来、何度目かの走馬灯を見る。
あぁ、こんなところで終わるなんて……。
だけど、まだ死にたくないなぁ……。
そんなことを考えながら、私は目を閉じた。
しかし、いつまで経ってもその痛みが訪れないので、ゆっくりと瞼を開く。
そこには、管理人さんの姿があった。
ただし、片腕があらぬ方向に曲がっており、ぶらぶらと腕が揺れているところから、ただ繋がっているだけのようだ。
「結構強めに打ったはずなんだけどなぁ！」
「痛みは感じないし、体はまだ動く。なら、行動に移すのは当たり前だ」
「普通はできないんだけど、ねっ！」
そう言って、もう一度管理人さんの体を踏み台に飛び退くマルタさ

ん。
そこに、クーニキが槍を突き出す。
それを、真剣白刃取りの要領で受け止めたマルタさんは、力任せに引き寄せて、クーニキをぶっ飛ばした。
クーニキに意識が逸れている間を縫って、エミヤが矢を連射する。
だけど、それを視認した瞬間、エミヤの方へと突っ込んできた。
「なっ!?」
「甘いっ！」
流石に矢群に突っ込んでくるとは思いもしなかったのか、エミヤが驚愕の声を上げる。
なんせ、矢一本一本の面積は狭いのだが、それでも音速レベルで飛んでくる矢をかいくぐってきたからだ。
そのままエミヤにも拳をめり込ませる――前に、
「はあっ！」
「！　ッチ！」
追いついたジャンヌさんが旗を振るって弾き飛ばした。
だが、それで止まるような相手ではなく、即座に態勢を整えてこちらに向かってきた。
それにいち早く気づいたマシュが、盾を構えてマルタさんを迎え撃つ。
ガキンッ！　という金属音（!?）と共に拮抗する両者。
そこから、激しい攻防が始まった。
「うらぁっ!!」
「せいっ！」
ぶっ飛ばされたクーニキも戻ってきて、マシュの盾を殴り続けていたマルタさんを槍で突き飛ばすと、そのまま二人の攻撃の応酬が巻き起こる。
クーニキは、ただ突き出すような使い方じゃなくて、まるで新体操選手のバトンのように槍を縦横無尽に振り回し、マルタさんを攻め立てる。
対するマルタさんも負けていない。

両手両足を使って捌き、受け流し、反撃している。
その姿はまさに歴戦の戦士そのもので、思わず見惚れてしまうほどだ。
そんな風に戦い続ける二人だったが、ここにいるのはその二人だけではない。
「I(我)am(が) the(骨) bone(子) of(は) my(涙) sword(狂)……伏せろランサー！」
エミヤがまるで大きなネジのような剣を投影し、それを矢のように変形させてから、撃ちだす。
進行方向にあった木を薙ぎ倒し、抉り取りながらその矢は一直線にマルタさんたちの下へ向かった。
それを尻目に確認したクーニキは、槍を地面に打ち込むことで跳躍する。
矢野進行方向には、マルタさんしかいない。
当たる……！　そう思ったが、
「愛知(タ)らぬ哀(ラ)しき竜(ス)よ！」
彼女の声が響くと同時に、何かが矢を受け止めた。
ネジのような構造ともあって、その矢は受け止めた対象を抉ろうとするも、火花を散らすばかりだ。
「ッチ！　壊れた幻想(ブロークン・ファンタズム)！」
舌打ちしたエミヤがそう呟くと、回転を続けていた矢が爆発する。
それと同時に、マルタさんは上空へと回避していた。
それを追って上を見上げると、私なんか余裕でつぶせそうなほど大きい巨大な岩を両手で抱えている姿が見えた。
まさか……。
嫌な予感が脳裏に浮かんだ瞬間、その岩は放たれていた。
「やっぱあの人凄女だよ!?」
「凄女言うな！」
私の叫びに、マルタさんからのツッコミが入るが気にしない。
だって、あんなのまともに食らったら死ぬもん！
そんな岩を軽々と持ち上げている人がいるんだもん！

だけど、そんな心配は無用だったらしい。
なぜなら、それは私たちの前に落下してきたからだ。
ズゥンッ!!　と、重々しい音を立てて地面にめり込んだそれは、よく見ると岩ではなかった。
まるで亀のような甲羅を持ち、しかし、顔に当たる部分は亀なんて生易しいものじゃなかった。
「竜」だ。
ワイバーンなんかとは比べ物にならないほど強力な存在。
それが今、目の前にいる。
あまりの存在感に息をのむ私。
そんな中、マルタさんはゆっくりと歩いて近寄ってくる。
その手には、先ほどは持っていなかった十字架が握られていた。
「さて、始めましょうか？」
そうして、本格的なサーヴァント戦が始まったのである。

# 凄女（聖女）マルタ

「魔女」が召喚したサーヴァント――バーサーク・ライダーこと「マルタ」さんと戦い始めてから数分経過した。
そしてその間、攻撃をされ続けたことで分かったことがある。
それは……
「凄女すぎぃ!?」
「だから、凄女言うな！」
怒られたけど、でも仕方ないと思う。
何せこのマルタさん……めちゃくちゃ強いのだ。
いやまあ、クーニキが本気出してないし、ジャンヌさんもまだ全力じゃないっぽいから、まだまだ余力を残しているだろう。
それに、この大所帯かつ、仲間を巻き込みかねない宝具を持っているとはいえ、素のステータスが高いアルトリアさんも攻撃に参加していて、ライダーさんも怪物メドゥーサとしての力を惜しみなく使っているんだけど……。
「くっ！　重いッ！」
「これが聖女の姿ですか!?」
「ごちゃごちゃうるさいわよ！　もうちょっと根性見せなさい！」
アルトリアさんたちは何とか善戦はしているものの、決定打を与えることができずにいた。
理由は単純明快。
マルタさんの防御力が高すぎるためだ。
一応、こちらの攻撃も通ってはいるのだが、上手いこと受け流されていて、ダメージが通っているようには見えない。
それに、エミヤの狙撃と投影した宝具を爆発させる技――「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」も、仲間を巻き込みかねないので、さっきから私の護衛についてもらってるのだが……。
はっきり言って、分が悪いとしか言えない。
このままじゃ、ジリ貧だ。
そう思い始めた時だった。

「タラスク！」
「グォオオオオオオオオオオ!!」
マルタさんがその名を呼ぶと、管理人さんが相手取っていた亀のような甲羅を持つ竜――「タラスク」が、アルトリアさんたち目掛けて突っ込んでくる。
その勢いは、まるで砲弾のようであった。
しかも、その巨体にも関わらず、動きは速い。
その大きさからは想像できないスピードで、その口を大きく開けながら迫ってきた。
慌ててその場から離れるアルトリアさんたちだったが、その時には既にタラスクは彼女たちの下へ到達しており、直撃しそうになったところで、クーニキが二人を抱えてタラスクの進路から逃げることができた。
だが、まるで爆発したかのような音が響き渡る。
どうやらタラスクは方向を変えずに、そのまま木に衝突したらしい。
その結果……大きな音を立て、木の幹が折れた。
それだけではなく、地面には深くめり込んでおり、クーニキが二人を助けていなかったら、きっと即死していたであろう威力があったことが分かる。
「私と同じライダーとは思えませんね……」
「同感ですライダー。流石に、竜種とサーヴァントを同時に相手取るのは私でも厳しいです」
「でしょう？　タラスクはリヴァイアサンの子。格としては一級の竜種よ」
土煙が舞う中、そう語るマルタさんの言葉を聞き、私は納得する。
つまり、あのタラスクは某最後の物語で出てくる海神の子供というわけか。
……うん！　意味分からん！
だけどまあ……とにかくヤバい存在だという事は分かった。
だって、あの亀みたいな竜、エミヤの投影した宝具（エミヤが言う

には、並の英霊なら一撃で倒せている威力を持つ）を尽く弾いてるんだもん。
「暴れているのを見かけて、殴って鎮めたら懐かれる……。……実質、舎弟と言う訳か」
「はっ倒すわよ管理人！」
管理人さんとマルタさんがそんなやり取りをしている間にも、マルタさんは再びタラスクの名を呼び、突進してくる。
今度は私たちの方へ向かってきており、その速度は先ほどよりも速かった。
このままではぶつかると思った私たちは、すぐさま回避行動を取る。
だけど、間に合いそうにない……！
なら、受け止めるしかない！
「マシュ！」
「はい！　宝具を起動します！」
私たちのサーヴァントの中で、「シールダー」というクラスを持つマシュは、その名の通り盾を使う「盾兵」だ。
もちろん、クラスの通り防御に特化しており、特異点Ｆでは、反転したアルトリアさんの約束された勝利の剣だって防いだほどである。
しかし、今の彼女は純正のサーヴァントではなく、デミ・サーヴァントだ。
そのため、今の状態だと、宝具を使っても数分しか戦えない。
だから、彼女の宝具が使えるうちに決着をつけないといけないのだ。
「グォオオオオオオ!!」
「仮想宝具（ロード）　擬似展開（カルデ）／人理の礎（アス）!!」
咆哮を上げ突撃してきたタラスクが、マシュの展開した障壁にぶつかる。
そして、そのまま押しつぶそうとしていたが、マシュはそれを必死に耐えていた。
「くぅうっ!!」

その光景を見て、思わず冷や汗が流れる。
何しろ、さっきまでとは比べ物にならないくらいの衝撃なのだから……。
マシュは苦悶の声を上げながらも、なんとか持ちこたえている。
それでも、あまりの威力に押されつつあった。
このままでは、障壁もろとも圧しつぶされてしまうだろう。
だけど、私の狙いはこの拮抗状態にあった。
「アルトリアさん！」
「了解しましたマスター！」
私が指示を出す前に、アルトリアさんは既に動いてくれていた。
彼女に指示を出したのは、この場（管理人さんを除く）で一番強力な宝具を使える存在であるためだ。
アルトリアさんは手に持っていた聖剣を構え、魔力を集めていく。
すると、その手に持つ聖剣から眩しい光が放たれた。
それは、アルトリアさんの持つ宝具の一つ。
遠い日本の地にも知られている光の刃――――約束された勝利の剣（エクスカリバー）である。
「約束された（エクス）……勝利の剣（カリバー）！！」
その光はタラスクの甲羅を貫き、空に向かって光の柱とも言うべき輝きの奔流を伸ばしていく。
タラスクは悲鳴のような声を上げるが、アルトリアさんは気にせず魔力を放出して約束された勝利の剣（エクスカリバー）を発動し続ける。
やがて、タラスクの巨体は動かなくなり、光の粒子となって消えていった。
それを確認してから、私はホッと息をつく。
良かった。
これで、残るはマルタさんだけ。
そう思っていると、管理人さんが拍手をしていた。
それにびっくりしていると、マルタさんが大きく息を吐いて、こう言った。
「まさか、ほとんど管理人の手を借りないでタラスクを倒しきるとは

ねえ……」
「それで、立香君たちを認めてくれるのかい？」
「ま、ぎりぎり及第点ってところだけど、認めてあげるわ」
マルタさんはそう言って笑みを浮かべる。
それを聞いて私も嬉しく思い、マシュと一緒にハイタッチした。
それからマルタさんは私たちの方へ歩み寄り、右手を差し出す。
握手を求められているのだと気付き、私たちは慌てて手を握り返した。
「ナイスファイト。いいガッツだったわよ」
「ありがとうございます！」
「こ、光栄です！」
マルタさんに褒められて、思わず顔が緩んでしまう。
すると、マルタさんは私たちから視線を切って、管理人さんの方へ声をかけた。
「管理人。私、そろそろ限界なんだけど……」
「分かってる。君が仲間となると心強いからね。それに、立香君達もさしておびえていないようだし」
「なら早くして。アンタならできるでしょ？　私の契約と狂化を解除すること」
その言葉に、私たちは少し驚いたような表情をする。
だって、「契約と狂化を解除できる」って言ったのだ。
それと会話の内容からして、マルタさんが仲間になってくれるということも察せられた。
「そんなことできるの管理人さん!?」
「できるとも。サーヴァントの仕組みは今から数千年前に『記録』しているからね」
さらりととんでもないことを言う管理人さん。
しかし、事実だから仕方がない。
管理人さんは何でも知っているし、何でもできそうだから。
……本当に、凄い人である。
「それじゃ、僕の図書館へ」

「……まだあったのね……あのトンデモ図書館」
「トンデモとは微妙に否定できないことを言うね……。ま、いいけどさ。それじゃ、立香君。僕とマルタは少し作業をするよ」
「あ、ど、どうぞごゆっくり……」
そうして、管理人さんとマルタさんは、虚空に出現した扉へと入っていった。
残ったのは、私とマシュとサーヴァントの皆。
とりあえず、アルトリアさんたちにお礼を言うことにした。
まず最初に口を開いたのはマシュだ。
彼女は申し訳なさそうな顔をしていた。
「すみません先輩……私がもう少し活躍出来ていたら……」
確かにタラスク戦はかなりギリギリの勝利であった。
しかし、それは彼女だけのせいではない。
私だって、もう少し魔術回路とかがあればみんなが思うように戦えていたかもしれないのだ。
決して私たちだけでは勝てず、アルトリアさんやエミヤの援護があったからこそ、勝利できたのであった。
だから、私は彼女の肩に手を置いて首を横に振る。
そして、笑顔でこう言った。
「そんなにネガティブにならないの！　私だって、マスターやるには魔術回路とか少ないポンコツだし、戦ってるときには完全にお荷物なんだよ？　そんな私とくらべて、マシュはすっごく頑張ってるよ！」
「そ、そうですか……？」
「うん。でも、これからはもっと自信を持っていいと思う。それだけは覚えておいてね？」
私がそういうと、マシュは小さく微笑んだ。
その表情を見て安心したのか、アルトリアさんたちも口を開く。
「マスター。自信を他者より劣っていると蔑まないでください。貴女は素晴らしい人です。他の誰がなんと言おうと、私たちはそう思っています」
アルトリアさんの励ましの言葉に、私は嬉しく思うと同時に恥ずか

しくもなった。
私は自分が凡人であることを自覚している。
それでも、この人類最後のマスターとして頑張っていこうと思っているのだ。
だけど、こうして自分を励ますだけでなく、他人からも言われると嬉しいものである。
私は照れ笑いをしながら、彼女たちにこう返したのだった。
「皆、ホントにありがとう！」
こうして、マルタさんによる試練を乗り越えたのであった。

～～～

だが、その『本を書く』という解釈を広げることで、非常に凶悪な能力へと変化させている。
例え、あの魔女が騎乗する最強の竜種であっても、こいつには手も足も出ないだろう。
だけどそれじゃダメなのだ。
カルデアはこれからも様々な特異点を巡る。
その時に、いつまでもこいつに頼ってばっかじゃ、いずれ負けるのだ。
だから、そうならないようにと試してみたけど……。
（案外、骨がある女の子だったじゃない。それも魔術師みたいな凝り固まった思考をしているわけでもなかった。おそらく一般人だったんでしょう。それなのに、世界の命運すら背負わされるなんてね……）
同情を禁じ得ない。
普通の人間である彼女が、こんな重荷を背負う必要などないはず。
だけど、彼女はそれを受け入れたのだろう。
自分の運命に抗いもせず、ただ受け入れるのではなく、全力で打ち破ろうとしている。
だから、手を貸そうと思った。
そのためには……。
「アンタの力を借りないとね」
「任せたまえ。完璧に熟して見せよう」
自信満々に胸を張る管理人。
その姿は頼れる存在ではあるのだが、どこか不安になるのは何でかしら？
『あの人』が生きていた時もそうだったけど、こいつが「私に良い考えがある！」という時はたいてい何かが起きるのだ。
そんなことを思いながら歩いていると、ふと、とある扉の前に着いていた。
「ここは……？」
「僕の作業部屋。『書斎』だね」

そう言って、管理人がドアを開けると……そこはまさに本の海であった。
天井まで届くほどの巨大な本棚にぎっしりと本が詰まっている。
中には辞書のような分厚いものもあれば、こいつが子供たちに読み聞かせていた絵本のようなものまであった。
ここがこいつの作業部屋――「書斎」か。
「私が生きていた頃は最後まで見ることができなかったけど、こんな感じになっていたのね……」
「ま、邪魔はされたくなかったからね。ちなみに、ここは今から三百年前に作った……え～っと、何個目の書斎だったかな？」
「私に聞かれても知らないわよ」
こいつは本当にどこまでも物好きな男だ。
そんなことを考えていると、管理人は一冊の本を取り出してこちらに差し出してきた。
題名は、『聖女マルタ』という本だ。
「私の本……？」
「『あの人』のだけじゃなくて、君のも書いておいたよ。君の物語をね」
私は本を受け取り、パラパラとページを開く。
そこには私がこの世界で生きてきた記録があった。
あの時の思い出や、旅路のこと、そして戦いのことが書かれていた。
どのページにも精巧な挿絵があり、その時の思い出が浮かぶようである。
「で、これを渡してどうしたいのよ？」
「それを持っていてくれ。僕は……」
私に本を持たせたまま、管理人は虚空に手を伸ばす。
なにやってるんだろうと思いきや、突如として本棚の一部がスライドし始めた。
何事!?　そう思っていると、その本棚の奥の壁に、あるものが掛けてあるのを見つける。
それは剣だった。
子供の身長よりも大きいその剣は、この図書館と似たような装飾の

鞘に納められており、一種の芸術品のような印象を受ける。
しかし、これは武器だと一目でわかった。
その証拠に、柄の部分から鍔、刀身に至るまで、全てが神秘を纏ったものでできているようだ。
恐らく、こいつが所持している宝具の一つだろう。
それを何故、ここに隠すように置いているのかしら？
「この図書館は作業場が多すぎてね。いちいち決まった書斎から取り出していると時間がかかるから、書斎や寝室などすべての部屋に備えてるんだ」
「さらっと思考を読むな。それで、あれは何なの？」
そう聞くと、管理人はその剣を指さした。
やはり、あの剣が宝具なのか。
だが、あの程度の大きさなら、そこまでの脅威ではないと思うんだけど……。
「ってか、魔女との契約と付与された狂化を、剣なんか使ってどうするのよ？」
「それはもちろん――」
そう言いかけた瞬間、急に風が巻き起こった。
突風に思わず腕で顔を覆う。
数秒後、ゆっくりと目を開けると……そこには――
――先程壁に掛けられていた剣を手に取った管理人がいた。
「――契約と狂化を塗りつぶすんだよ。このペンを使ってね」
「……は？」
唖然としていると、管理人は手に持った剣で私を切りつけた。
そこで意識は闇に沈んでしまったのである。

# 図書館女子会

管理人さんとマルタさんが図書館へと入ってから、しばらくして私とマシュも図書館で休息をとることにした。
サーヴァントの皆は休息の必要がなく、図書館と繋がっている扉の周りを警戒してくれている。
そんなわけで、私たちは二人きりで休むことになったのだが……。
私はベッドの上で寝転がっていた。
理由は単純。
とあるサーヴァントと話をしていたからだ。
「ねぇ立香！　あなたは、管理人さんのことをどうお思いで？」
「う～ん……なんていうか、このカルデアに来てからはあんまり見ていない保護者枠……って感じかな？」
「まぁ！　あの方ほど頼りになる方はいませんわよね！」
そのサーヴァント――マリーさんが妙に興奮していた。
普段も元気溌剌といった感じの彼女だけど、こういう話題になるとさらにテンションが上がるらしい。
ちなみに、彼女はずっと管理人さんの傍にいたのだが、特に何もなかったそうだ。
彼女自身、王族であり既婚者でもあったし、管理人さんにそういう気持ちを持ってはいけなかったそうな。
「でも、あの人のことは男性としても好きでしたわ！　子供の時の私にとっては、貴族以上に紳士的で、騎士のように凛々しくて……」
当時のことを思い出しながら語る彼女の目は、恋する乙女のものであった。
やっぱり、マリー・アントワネットという人物はこうでなくちゃいけない。
そんなことを思っていると、ふと、扉の方から足音が聞こえた。
そして、勢いよく扉が開かれる。
扉を開けたのは、頼れる後輩――マシュだった。
「先輩！　私も参加してよろしいでしょうか!?」

「うわっと！　びっくりしたよマシュ。それで参加するってどういうこと？」
「昨日と同じように私個人で寝ようと思っていたのですが、先程から聞こえる楽し気な会話につい耳を傾けてしまいまして……」
あー、うん。
確かに、私たちが話し始めてから数分くらいしか経っていないけど、結構声大きかったもんね。
管理人さんたちには聞かれてないみたいだし、大丈夫だと思うけど。
というか、マシュってこんな性格の子だっけ？
「実は、部屋の本棚にあった本を読んでいた時、気になる項目を見つけまして……それを実践してみようと思いました！」
管理人さんの仕業かい！
っていうか、マシュも何気に影響を受けやすいなぁ……。
まぁ、マシュは元々好奇心旺盛だから、仕方がないといえば仕方がないことかもしれないけど。
とりあえず、マシュの参加を認めることにしよう。
だって、今更一人増えたところで変わらないだろうし、女子会ってのはこうじゃないとね！
「ありがとうございます！　では早速ですが始めましょう！」
こうして、私たち三人による、ガールズトークが始まったのだ。
題は勿論、管理人さんについてである。
最初に口を開いたのはマリーさんだった。
その顔はどこか嬉々としており、宝物を誰かに見せるようにキラキラとしていた。
「私とあの人の出会いはもう話しましたわよね？」
「そうですね。確か、川沿いに寝ていた管理人さんが、川の増水に気づかず、そのまま流された先を偶然通りかかったマリーさんが、管理人さんを拾ったと記憶しています」
「そうよマシュ！　あの人は出会った時から想像の斜め上を行っていました！　まさか、川の増水に気づかず、そのまま流されるなんて人

はいるのでしょうか!?」
マリーさんが興奮気味に話す。
私もその光景を見ていたわけではないので分からないが、確かに驚きだろう。
そんなことをしている人が、今までカルデアに居ただろうか。
いや、いない（反語）。
それはともかくとして、川の増水に気づかないのは、どういうことなのか？
「管理人さんを拾った時に、彼は言ってくれましたわ！『素晴らしい出会いをするなら、他の誰も考えないような移動方法をすればいいんじゃないか？　そう考えて実行に移したんだよ』と！　あれは衝撃でしたわ！　そんな方法で移動する方がいるのかと！」
……。
なんか、管理人さんの行動が段々読めなくなってきたぞう!?
どうして川の流れに乗る必要があるんですか……？（電話猫）
それに、そんな方法を思いつくって、管理人さんって、やっぱり変人なのかな？
「アマデウスみたいな音楽にしか欲情できない変態に比べれば千倍マシですわ！　ええ、比べることすら烏滸がましいというのに、なんということでしょう！」
マリーさんが興奮しながら言う。
いや、比較対象がおかしいと思うのは私だけですか？
あと、モーツァルトさんがさりげなくディスられてるのは無視しよう。
「あの人はいつも私と遊んでくれましたわ。木に登りたいと言えば肩を貸してくれて、有名な偉人の本を読んでほしいと言えば、彼らと友人だったということを生かして、本には書かれていない話も聞かせてくれたものですわ。あの時は本当に楽しかった……」
マリーさんの目が遠くを見るようなものになった。
多分、その時のことを思い出してるんだろうなぁ……。
でも、そんな思い出に浸っているところ悪いんだけど、そろそろ私

の番かな？
「私が管理人さんと出会ったのは、私が子供の頃、おばあちゃんの住んでいる田舎に遊びに行っていた時でした」
「あら、立香もなの？」
マリーさんが意外そうな顔をする。
マシュも同じ反応だ。
まぁ、この話はマシュも初めて聞くから、そういう表情にもなるよね。
私はマシュにも説明するように続ける。
ちなみに、管理人さんとの出会いに関しては、マリーさんほど奇抜ではないと言っておく。
「その時の私って、すっごいやんちゃだったんですよ。だから、親が話している隙を突いて森の中に入った私は、迷子になってしまって途方に暮れていました。そこへ現れたのが、管理人さんなんです」
今でも鮮明に覚えている。
暗い森の中で、不安に押しつぶされそうになっていた時に現れた光。
それが、管理人さんだった。
あの日は夏だったというのに、暑そうなローブを纏いながらランタン片手に私に話しかけてくれるその姿は、まるでお伽噺の魔法使いのようであった。
そして、その手に持っていたお菓子を食べさせてもらった時の味も、忘れることは無いだろう。
だって、あんな美味しいもの食べたことがなかったから。
それからは管理人さんに連れられて無事におばあちゃんの家に帰ることができたんだ。
「お母さんたちが管理人さんにお礼を言った後の別れ際、管理人さんが踵を返して、小さかった私にあるものを渡してくれたんです」
「それがあの本なんですか、先輩？」
マシュが私に尋ねる。
その目は好奇心に満ちており、早く続きを話してほしいと訴えてい

た。
そんな目で見つめられると照れるじゃないか。
私はコホンと咳払いを一つすると、話を続けた。
「そうだよマシュ。その時貰った本が、管理人さんを召喚するときに使った本なんだ」
「すごい……。もしかして、管理人さんはこうなることを見越してたんじゃないんでしょうか？」
「多分ね……」
私はマシュの言葉に苦笑した。
実際、あの人は未来視とか予知夢が出来るんじゃないかと思うときがある。
いや、実際に出来るかどうかは知らないけどさ。
それでも、あの人がただの変人でないということは分かるのだ。
なんたって――――。
「管理人さんは、私のあこがれになった人だからね！　マシュ！」
私は胸を張って自慢するように言った。
そう、私にとって、管理人さんはあこがれなのだ。
こんな風に誰かを好きになったことなんて無かったし、恋をしたこともない。
恋というにはまだだけど、いつかは経験したいと思っている。
そういえば、管理人さんってどんな人なのだろうか？
今まであまり深く考えたことは無かったけれど、マシュは知っているのかな？
そう思って聞いてみると、マシュが少し困ったような顔になる。
あれ？　何かあったの？
「知っていると言いますか……、なんといいましょうか……。確かに、私にとってもあこがれる人物ではあるのですが、ちょっと変わった方という印象が強くて……。でも、とても優しい人で、いつも私たちのことを気にかけてくれるいい人ですよ！」
うん？　どうしたんだろう？
なんか言いにくそうにしてる感じが……。

「ねぇマシュ。管理人さんって、魔術師とかには有名だったんだよね。なんでなの？」
「えっと……実はですね……」
その話を聞いた私は今日一番の大声を出すことになる。
マシュの口から出てきた言葉が吃驚仰天するような話だったからだ。
「先輩もマリーさんも、魔術と魔法の違いは知っていますよね？」
「うん。確か、魔術が科学で再現できることで、魔法がそれ以外……だったよねマシュ？」
「はい、正解です」
この特異点に来る前、進〇ゼミ（メディアさんとダ・ヴィンチちゃんが開いた塾）で習ったことだ。
それぐらいは覚えてるぞぅ！　と、どや顔をしてみるものの、隣にいるマリーさんにはスルーされてしまった。
ぐすん……。
それはともかくとして、魔術と魔法は私が言ったような違いがある。
そもそも魔術と魔法は、神秘を扱うことで、奇跡を起こすことを可能とする技術。
まぁ、簡単に言えば、前者が物理法則で説明できるのに対し、後者は完全に超常の力を扱っているといったところだ。
そして、魔術師たちは魔法を手にするため、すべてが生まれた場所である『根源』に至ろうとしている。
全てが生まれたというそこに行ければ、実質すべてがあるということで魔法も手に入る……かもしれないらしい。
らしいなのは、私もそこまで詳しいわけじゃないから。
一応、カルデアでの授業でさらりと触れただけだし。
話を戻そう。
つまり、何が言いたいのかと言うと、管理人さんは魔法を使えるということ。
それも、世界トップクラスの魔術師だ、ってメディアさんとダ・ヴィ

ンチちゃんが言っていた。
「そんな魔法を会得している管理人さんですが、彼が大勢の魔術師から注目を向けられるのはそれだけではないんです」
「他にもあるの？」
思わず聞き返してしまった。
それほどまでに、マシュの話は衝撃的であった。
なんせ、マシュが言うには、管理人さんが使っている魔術は、現代の魔術とは根本的に違うもの。
もっと古い……神代のものなのだから。
一応、神代出身のメディアさんも強力な魔術を使えるのだが、管理人さんのはそれの比ではない。
それは、ワイバーンの群れとの戦いで見たからこそわかる。
あの時使っていたのは、ワイバーンを一瞬で焼き殺す魔術、空間を捻じ曲げる魔術、肉を貫く雨を降らせる魔術に、風で切り裂く魔術。
どれも、強力で、それでいて使いどころが難しいものばかりだ。
それを、管理人さんは息をするように使って見せたのだ。
正直言って、あの人は化け物だと思う。
魔術師たちからすれば、喉から手が出るほど欲しい人材だろう。
そんな人が、図書館をやっているのだ。
それも、図書館に納められている本の中で歴史に関するものは、管理人さんの主観が入っているとはいえ、本当に起こっていた真実を書いている。
だから、あの人の知識は、下手をしたら聖書に書かれている以上の価値がある。
それがもし、魔術協会に知れ渡ったら……。
……考えるだけで恐ろしい。
私はゴクリと唾を飲み込んだ。
その時、ふとあることに気が付く。
「ねぇマシュ。魔術的に有名なら、その本を持ちだそうとした人もいるはずだよね？　でも、今まで誰も持ち出せていないってことは、「時計塔」が保管してるんじゃないの？」

そう。
時計塔は魔術を研究する機関。
そして、魔術に関することを秘匿することを義務付けている場所でもある。
あんまりにも異端（魔法を手に入れた人とか）だったり、魔術を一般人に知られるようなことがあれば、即座にその人を処分するようなところだってのをロマンやダ・ヴィンチちゃんに教えられていたから結構覚えていた。
だからこそ、疑問が残る。
なぜ、今まで誰にも見つからずにいたのだろうか？
そうマシュに聞くと、マシュは目を伏せて答えてくれた。
「実は私は本が好きで、ドクターに魔導図書館のことを教えてもらったことがあります。そして、その本をいつかは読んでみたいとも思っていました。だから、カルデアに魔導図書館の本はないのかと聞いてみたことがあるんです。ですが……」
「ですが……？」
マシュが少し言いづらそうな表情になる。
なにか、悪いことでもあったのかな……？
マシュがゆっくりと口を開く。
「魔導図書館の本は、基本的に持ち出し厳禁となっており、本を持ち出そうとした者は注意を受けるんですよ」
「ん～……それぐらいだったら、ちょっと厳しい図書館ですわよね？
あ、でも、私たちは普通に入室できてるってことは、何か特別な理由があるのかしら？」
マリーさんが首を傾げる。
確かにそうだ。
いくら何でも、入館禁止とか、入室不可とか、そういう措置ぐらいは取ると思うんだけど……。
マシュもそれに同意するようにうなずく。
でも、なぜかマリーさんの言葉を聞いてハッとしたような顔になった。

どうしたんだろう？
と思っていると、マシュが手をこまねいて、近づいてくるように合図する。
頭に疑問符を浮かべながらも、マシュに近づいていく。
すると、マシュは私の耳元まで顔を近づけると、小さな声で囁いた。
「先輩、ここだけの話ですが、今からちょっと過激な話をします。もしかしたら、管理人さんの逆鱗に触れるかもしれない話です」
「えっ!? それ、大丈夫なの？」
思わず声を上げてしまった。
周りを見渡すが、幸いなことに管理人さんの気配はなかった。
ほっと胸を撫で下ろす。
だが、そんな私を尻目に、マシュは言葉を続ける。
「魔術的に有名な魔導図書館。そこに保管されている蔵書はすべて歴史的に価値のある物ばかりです。ですが、それが世に出回らないのにはとある『噂』があるからです。
「噂……？」
「……無断で侵入した魔術師が本を盗もうとした事件が過去にありました」
マシュは一度言葉を区切ると、もう一度小声で続けた。
まるで、管理人さんの耳に届かないように配慮しながら話すかのように。
……まさか、ね。
そんなことを考えてしまうほどに、その話は衝撃的であった。
「その魔術師が何を思って本を盗もうとしたのかは分かっていません。ですがその魔術師の末路については、ほぼすべての魔術師が知っています。それは……殺されたからです。発見された遺体は傷のない状態で息絶えていて、その体には黒いインクでこう書かれていました。『違反者罰則執行済み』と……」
私は、その話を最後まで聞いた後、ゾッとするのを感じた。
もし、私が本を持ち出そうなんて考えたら、殺される？
しかも、痕跡すら残さず？

「ですが、ドクターが言うには普通に本を見る分には問題ありません。私はカルデアでしか過ごしていないため、図書館に行くことはできませんでしたが……」
「まぁ、管理人さんったら、ずいぶんと乱暴なことをしているのね！これは後でお説教しなきゃ！」
マリーさんが頬に手を当てながら言った。……うん、さすがは王妃様と言うべきかなんというか……。
でも、確かにその通りだと思う。
いくらなんでも、魔術的に貴重な本だからって、勝手に持ち出すのは良くないよ！
そして、盗もうとした人とはいえ殺すのはもっと良くない。
これは後で管理人さんに聞かないと……！
「その魔術師は僕の本を使って悪事を働こうとしてたみたいだからね。少し、荒っぽくいかせてもらったよ」
「ひょわっ!?」
「管理人さん!?」
「まぁ、管理人さん！　いつの間にいたのかしら！　乙女の園にノックもなしに入るのは不作法ではなくて？」
いきなり背後から聞こえてきた声にびっくりして変な声が出てしまった。
振り返ってみると、そこには先程マルタさんの契約解除と狂化の解除をしに行ったはずの管理人さんの姿があった。
相変わらず、その表情からは感情を読み取ることはできない。
でも、いつもよりかは「バレちゃったか～……」って感じの気配を漂わせている。
「か、かかか管理人さん!?　いつの間に!?」
驚きすぎて、またもや大声を出してしまう。
でも、本当に驚いたんだもん!!
そんな私を他所に、管理人さんは手に持っていた本をパラリと開く。
そして、とあるページを開いて見せた。

その本のタイトルは、とある記録のようだった。
「これはその魔術師が犯してきた罪の数。1ページにつき、およそ十個の罪がある。それが五ページだ。魔術師云々を除いても、完全に有罪(ギルティ)判定だったよ。そんな奴が僕の大切な『記録(思い出)』を盗もうとしたんだ。あれぐらいは当然かな？」
「……えっと、管理人さん？　それってつまり、この図書館にある本のほとんどすべてに何かしらの記録が記されているということなの？」
私の問いかけに、管理人さんはコクリッとうなずく。
その動作を見て、私は思わず頭を抱えそうになった。
物語とかだけじゃなくて、個人情報とかも入ってるの!?　この図書館!?
「実際、ジャンヌの霊基を修復するときは、『英霊の座』に登録されていたジャンヌの情報を書いていた本の情報を複製(コピー)して、書き込(ペースト)みをしたんだ。だから、ここにあるほとんどの書物には僕が集めた情報が書き込まれていることになる」
……それって、とんでもない情報量になるんじゃないの？
そんなことできるものなのだろうか。
だが、現に目の前の管理人はそれをやってのけているということだ。
「……ちなみに、どのぐらいの数があるのかしら？」
「ざっと数えて億を超すね」
「億……!?」
思わず声を上げてしまった。
まさか、そこまでとは思わなかった。
……よく今まで盗まれずに済んでたものだよ……。
すると、管理人さんはその本をパタンと閉じると、別の本をその手に出現させる。
すると、そのままマシュへと差し出した。
その行動に、私は首を傾げる。
「えっと、これは……？」

「あげるよ。今のマシュ君にはぴったりの本だからね？」
「タイトルが分からないんですが……」
「今の君にはまだ資格がないってことだよ。これからも精進を続けなさい」
「はいぃ……」
そう言って、マシュは管理人から受け取った本を抱きかかえるようにして持つ。
なんだか、その様子はとても嬉しそうであった。
うーん、あの本は一体何なのかなぁ……？
……まぁ、いっか！
それよりも……。
「大事な物なのに、あげてもいいの？」
「それはすでに複製しているから大丈夫だ。そもそも、僕が気に入った相手であり、許可を取れば複製した本を貸し出すこともやぶさかではないんだけど……流石に、気に入ってもいない相手に勝手に取られてしまうと、罰則を下さなければならないことになるからね？」
管理人は肩をすくめながら言った。
あぁ、そういう事かぁ。
確かに、勝手に持っていかれるのは嫌だよね。
でも、私達はいいのかなぁ？
なんて考えていると、マリーさんが一歩前に出て管理人に尋ねる。
「あら、そうなの？　では、わたし達も借りていいかしら？」
「え、えぇ!?　マ、マリーさん!?　さすがにダメじゃないの!?　いくらなんでも、勝手に持って行っちゃ！」
私が慌てて止めようとすると、管理人さんが私を制した。
「大丈夫だよ立香君。別に、君達に貸し出すのは可能だから」
その言葉を聞いて、私はホッとする。
よかったぁ。
なら、何も問題はない……のかな？
でも、どうして管理人さんはこんなことをするのだろう？
やっぱり、本の管理人だからなんだろうか？

そんな疑問を持ちつつも、その夜は更けていったのであった。

# 竜殺しを求めて……

図書館での女子会から約半日。
「昨日は迷惑をかけたわね！　聖女マルタ、ここに参戦よ！　これからよろしくね？」
「はい！　よろしくお願いしますマルタさん！」
朝食を食べ終わった後に野営場所へ来ると、そこには元気いっぱいのマルタさんがいた。
どうやら、狂化の影響は完全に抜けたみたいだね。
そのことにほっとしていると、管理人さんがまたいつものように会議の始まりを知らせる。
「それじゃ、新しくマルタが仲間に加わってくれたことを喜びたいところだが、次の目標が定まった」
「それに関しては私から話すよ」
管理人さんの言葉を引き継いで、マルタさんが説明を始めた。
「まず、私たちが戦おうとしている黒いジャンヌ――「魔女」は、とある「竜」を従えているわ」
「そのとある竜とは……？」
シチューを食べていたアルトリアさんが口元を拭きつつ質問をする。
すると、マルタさんは真剣な表情で答えた。
「あなたたちは、『ファヴニール』という竜を知っているかしら？」
『!?　ファヴニールだって!?』
「知ってるのロマン？」
聞き覚えのない名前だったので、私は思わず空中に投影されていたモニターに映るロマンに尋ねた。
その反応を見る限り、有名な名前のようだ。
すると、ロマンが説明を始める。
『ああ。『ニーベルンゲンの歌』に出てくるドラゴンの名前だ。ジークフリートと呼ばれる竜殺し（ドラゴンスレイヤー）の伝説に敵として登場する存在で、魔術的な存在で言えば、確かに『究極の竜種』と称するにふさわしい存在

だよ』
「う～ん……いまいちピンとこないかな……」
「まぁ、立香君みたいな日本人なら知らなくても無理はないさ。ちなみに、僕はそいつの遺物なども保管しているよ」
「ほえ～……」
管理人さんが付け加えた情報に、思わず変な声を出してしまった……。
まさか、そんなすごいものがこの世界にあるなんて思いもしなかったよ……！
そんなのんきに考えていると、皆が顔をしかめているのが目に入る。
「え、皆どうしたの？」
「先輩……ファヴニールという存在は、そんな軽い感じで理解しちゃいけない存在だと思うんですが……」
「竜種というのはですねマスター。常識の埒外にいる存在なのです。ファヴニールとは、この身に流れている竜の血と同格とも言われている存在なんですよ」
「アルトリアさんって、ドラゴンの血が流れてたの!?」
「驚くところはそこですか先輩!?」
なぜかマシュがつっこんできたけど気にしない！
それより、今聞いた話の方が重要ですからね！
まぁ、それは後でも聞けるから置いておくとして、そのファブ……ファヴ……ファ○リーズ？　なんとかは、かなりヤバイ奴っぽいね……。
そして、そんな危険な奴を召喚して使役しているのが「魔女」。
それはつまり、「魔女」を倒すにはそのファヴ何とかを倒さなきゃいけないのか……。
そう考えていると、ふと管理人さんに尋ねてみた。
「ねぇ管理人さん。そのファヴなんとかは管理人さんだったら倒せる？」
「当たり前だろう？　いくらカルデアに召喚されるために『格』を落と

したとはいえ、空飛ぶトカゲ如きに僕が負けるはずはないだろう？
第一、奴には「竜」という「情報」がある。それなら、竜殺しの属性を持たせた魔法を乱れ撃ちにするだけで、よっぽどのことがない限り一歩も動かさずに倒せるはずさ」
「だよね？　でもなぁ……いつまでも管理人さんに頼りっぱなしっていうのもなぁ……」
「なら、いい考えがあるんだ」
私が悩んでいると、管理人さんが私に提案してきた。
それは、とても魅力的な案だった。
管理人さん曰く、カウンターとして召喚されるのは、それを解決できそうな力を持った英霊たちだという。
その他に召喚されるのは、その地においてすごい知名度を誇っていた英霊とからしい。
「そうなると、ジャンヌさんは今この時代がそうだし、マリーさんたちはフランス由来の英霊だもんね。でも、それがどうかしたの？」
「それはだね立香君。ジャンヌやマリーはフランス由来として召喚されたのは事実だ。だが、彼女達だけではそのトカゲを倒しきれるのか？　僕はそう思わない。僕レベルの規格外でもなければ、竜種を殺すことなんてできないさ」
その言葉を聞いて、私は納得する。
確かに、マリーさんたちの宝具は対人用であって、対竜用にはできていない。
それに、サーヴァントが竜種に対してどれだけ有効なのかわからない以上、戦力はできるだけ多い方がいいはずだ。
そして、流石にここまでお膳立てされれば管理人さんが何を言いたいのか分かる。
「いるんだね。そのファヴ何とかを倒せるサーヴァントが」
「ああ。おそらくだが、そいつは今回の特異点で一二を争うほど強力なサーヴァントだ。マルタの情報が正しければ、間違いなくジャンヌたちよりも強い。だから、そのサーヴァントを、こちら側に引き入れてくれないか？」

「まっかせて！　これでもリアル友達百人出来るぐらいにコミュ力はあるから！」
私は自信満々で答えた。
正直、どんなサーヴァントなのか気になるし、何より管理人さんの言った通りなら、その人は私の味方になってくれるかもしれない。
私の返事を聞いた管理人さんは、満足そうに頷くと話を続けた。
「現状の立香君では、サーヴァント（僕たち）を維持するのは５人が限界だ」
「……そういえば、私、ダ・ヴィンチちゃんとかロマンに言われてたんだけど、４人が限界じゃなかったっけ？」
マシュの話によると、本来サーヴァントは一人一体が原則らしい。
しかし、この人理焼却という異常事態で、そんなことも言ってられないと、多少無理矢理だが、サーヴァントと複数契約しているのである。
けれど、今の私は、マシュ、管理人さん、エミヤ、クーニキ、アルトリアさん、ライダーさん、ジャンヌさん、マリーさん、モーツァルトさん、マルタさんと、総勢十名のサーヴァントと共にいるのだ。
さらに言えば、マシュを維持するだけでも難しいのに、超ド級のサーヴァント――管理人さんを維持どころか戦闘もさせているのである。
並の魔術師なら、一瞬で木乃伊（ミイラ）になるはずなのに、私はいまだになっていない。
それどころか、皆も結構な戦闘をしているのに、私は魔力の枯渇どころか不調すら感じたことはない。
なんでなのか？
それは管理人さんが答えてくれた。
「実は、僕が召喚された方法は他の皆と違っていてね。僕がまだ生きているのは知っているだろう？」
「うん知ってる。それがどうしたの？」
サーヴァントとはもともと死んでる（もしくはその時代にはいない）ことが前提条件となってる。
だからこそ、管理人さんがこうして召喚されているのはおかしいの

だ。
改めて考えてみれば、「またすごいことをしているなぁ……」と感じるが、「まぁ、管理人さんだし」と納得もしていた。
そう思って聞いてみると、管理人さんはこう続けた。
「僕は、サーヴァントという枠組みに無理矢理収まった「分体」。そんな分体である僕なんだけど、魔力パスに関しては「本体」と繋がっている」
「……えっと……つまり？」
「魔力などに関しては、僕は立香君に依存していない。ちなみに、消費魔力の割合は立香君が『1』で、僕の「本体」が『99』だ」
「めっちゃ偏ってる!?」
よく分からないけど、私からの魔力供給は必要ないということらしい。
だが、そうなると一つの疑問が浮かぶ。
それは、何故、皆を維持できるのか？　ということだ。
「皆の維持に関しても、僕が立香君の魔力消費を肩代わりしているんだよ」
「ちょっと待った！　私、今声に出さなかったよね!?」
「これもいろんなことを知っているからこそ成せる芸当だよ」
私が考えていたことに、まるで答えるかのように管理人さんは答えた。
驚きながら尋ねると、彼は当たり前のように言う。
いや、確かに管理人さんは何でもアリの存在だけどさ……。
「本来の立香君なら、カルデアの魔導炉心から魔力を送られてサーヴァントを維持するのだが、それでは、立香君の魔術回路を通してしか送れないため、どうしても許容量という壁が立ちふさがる。だから、外部――僕からサーヴァントに魔力を送ることで、その問題を解決してるんだ」
そう言いながら、管理人さんは自分の胸に手を当てる。
その仕草だけで、彼の言わんとしていることが分かった。
要するに、彼を経由してサーヴァントたちに魔力を送っているの

だ。
その証拠に、私から魔力が抜けている感じはしない。
むしろ、少しだけいつもより調子が良いぐらいだ。
これが、彼が言っていることの証明だった。
とはいえ、今まで知らなかった事実に驚いたことは否めない。
だってそうだろ？
自分が何もしなくても、サーヴァントたちが戦ってくれるなんて、自分がお荷物になっていると認識させられてしまう。
だけど、私の代わりはいないのだ。
なら最後までやらなくちゃ！
そう意気込んでいると、マルタさんが口を開いた。
「意気込んでるところ悪いけど話を戻すわよ。ファヴニールを倒せるサーヴァントは「リヨン」という町……もう、私たちが壊しちゃったけどね。でも、そこにいたサーヴァントはまだ生きているはずよ」
「ほんと!?」
「ええ。「魔女」が呪いをかけたとはいえ、彼女が「真名看破」で見たサーヴァント――「ジークフリート」の能力は本物。あの程度で殺されているとは思えないわ」
「よっしゃー！」
マルタさんの言葉に思わずガッツポーズをする私だったが、すぐにハッとする。
見ると、皆が私を微笑ましいものでも見るかのような目で見ていたからだ。
私は慌てて、恥ずかしさを紛らわすように咳払いをして誤魔化した。
そんな私を見てか、マルタさんは苦笑しながら話を続けた。
「ジークフリートはファヴニールを殺した張本人。なら、史実を再現するが如く、ファヴニールには致命傷を与えられるでしょう」
「だからこそ、ジークと合流するのは、「魔女」と戦うことにおいて必須条件だ」
管理人さんのその言葉に私は力強くうなずき、マシュを見る。

彼女も覚悟を決めたような表情で私を見つめ返してくれた。
これで、方針は決まった。
後は行動するだけだ！

## リヨンにて

「ここがリヨンです」
先導するジャンヌさんから告げられたその街――「リヨン」の光景は凄惨たるものだった。
建物は崩壊しており、あちこちに血痕が見られる。
街の中央にある城も半壊している。
そんな様子に眉をひそめるが、今はそれどころじゃないと思い直し、気持ちを切り替える。
「ねぇロマン。町の中に生きてる人は？」
『……駄目だ。サーヴァント反応が二つあるがそれ以外は……』
空中に投影されたカルデアの映像からロマンの声を聞きつつ、辺りの様子をうかがっていると、ジャンヌさんがこちらを振り返る。
彼女の顔はどこか強ばっていた。
「大丈夫ですかジャンヌさん？」
「……ええ、大丈夫です立香さん。それより、ジークフリートを探しましょう。ルーラーとしての力で場所は分かっています」
そう言って、彼女は歩き出す。
私たちはその後に続きながら、破壊された町並みを進む。
瓦礫を飛び越え、崩れた建物を迂回しつつ、奥へ進んでいく。
そして、しばらく歩くと開けた場所に出た。
そこには――。
「っ！　生ける屍（リビング・デッド）！」
「管理人さん！」
「任せたまえ。『詠唱破棄――この魂（キリエ・エレイソン）に憐れみを』」
目の前に現れたゾンビのような姿になった人間たちを前に、管理人さんは一瞬にして魔法陣のようなものを空に浮かべる。
すると、ゾンビたちは突然苦しみだし、そのまま塵となって消えていった。
それを見届けた後、管理人さんは私に振り返る。
「さぁ、向かおうか……と言いたいところだが……無粋な輩の登場だ

ね」
「やはり、気づかれてしまうか……」
管理人さんの言葉にそちらを見ると、そこには明らかに先程のゾンビとは違う雰囲気を纏った人物がいた。
黒い貴族服に身を包み、顔のほとんどを覆う仮面の隙間からわずかに覗かせるその顔は青白く、死人を思わせる風貌だった。
その手は明らかに人のそれではなく、禍々しい気配を放っている。
ただならぬ相手であることは明らかだった。
「オペラ座の怪人（ファントム・オブ・ジ・オペラ）……？」
管理人さんの手によって、ルーラーとしての力――「真名看破」を発揮したジャンヌさんが、相手の真名を暴いた。
どうやら、それが彼の正体らしい。
しかし、その名を聞いた瞬間、隣にいたマシュが驚きに目を見開く。
その様子を見かねて、管理人さんが声をかける。
彼もまた、知っているようだ。
『十九世紀を舞台とした小説『オペラ座の怪人』に登場した幽霊怪人（ファントム）の、恐らくはそのモデルとなった人物だろうね』
そう説明したロマンの言葉に納得する。
確かに、今の彼はまさにそういう風体だったからだ。
……ん？　待って……。
という事はつまり……。
私は改めて、目の前にいる男――ファントムを見る。
ファントムは、すでに塵となったゾンビたちの姿を見て、心底残念そうにため息を吐いた。
「ふぅ……彼らも私の地獄で歌ってくれればよかったのだが……」
「っ！」
その発言に、私は歯を食いしばり、拳を握り締めた。
ただ殺すだけでは飽き足らず、死者を冒涜するなんて……！
怒りで体が震えるのを感じていると、管理人さんが一歩前に出る。
右手召喚した本に魔力を集め、いつでも放てる態勢に入った。
それに気づいたのか、ファントムは口元を歪め、両手を広げる。

まるで、歓迎でもするように。
「さぁ、惨劇を始めようではないか……！」
「来ます先輩！」
「そんなことさせない！　絶対にぶっ飛ばしてやる！」
マシュの声に我に返り、盾を構えるマシュの隣に立つ。
そして、こちらに向かってくるファントムを迎え撃つべく、戦闘態勢を取る。
こうして、私たちとファントムの戦いが始まった。

～～～

る前に、ジャンヌさんが宝具を発動する。
「主の御業をここに。我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！
我が神はここにありて（リュミノジテ・エテルネッル）！」
それは、かつて聖女ジャンヌ・ダルクが常に先陣を切って走りながら掲げ、付き従う兵士達を鼓舞した旗を用いた宝具。
天使の祝福によって味方を守護する結界宝具。
管理人さんも保有するＥＸランクという規格外の対魔力を物理的霊的問わず、宝具を含むあらゆる種別の攻撃に対する守りに変換するというもの。
そのランクは驚異のＡランク。
生前は聖女と呼ばれたジャンヌさんの宝具は、まさに防壁と呼ぶに相応しい効果を発揮し、辺り一帯を不可視の壁で覆う。
だが、ファントムは止まらない。
「くぅっ！」
「宝具を連続で使用するとは……！　先輩に管理人さん！　このままではジリ貧です！」
マシュの悲鳴にも似た警告を聞きつつ、私自身も必死に考える。
今ここで一番効果的な攻撃方法は何か。
それを考えるが、有効な手段は何も思いつかない。
ジャンヌさんの宝具による防御もいつまで保つかわからない。
どうすればいい？
ファントムまでは距離がある。
遠距離攻撃手段を持つエミヤなら攻撃が届くかもしれないけど、そうなったら旗を解除しなきゃいけない。
それに、アレだけの魔力が吹き荒れる中、矢が破壊されないとも限らない。
どうしたら……！
「そうだ……！　管理人さん！　空間跳躍って私たち以外にもできる!?」
私は咄嗟に思いついたことを口に出す。
すると、すぐに管理人さんからの返答が来た。

「……できるよ」
少し間があったのが気になるけど、今はそれを気にしている場合じゃない。
とにかく、その返事を聞いた私は、続いて指示を出す。
「ジャンヌさんはそのまま宝具を維持してて！　エミヤ！　あのネジみたいな矢を構えてて！」
「ネジ……偽・螺旋剣（カラドボルグ）のことか!?」
「そうそれ！　それを構えてて！　発射した瞬間、管理人さんに矢だけ飛ばしてもらうから！」
「！　なるほど……了解した！」
「立香！　私たちは!?」
「マリーさんたちは戦闘に向いてないから今はお休みで！」
そう言って、マリーさんの言葉を聞きながらも、エミヤは投影した剣――矢をつがえる。
そして、その瞬間を待つ。
ファントムは未だ宝具を歌い続けている。
けれど、ジャンヌさんの旗は、徐々に損傷が出始めていた。
私はそれを見つめながら、合図を送る。
そして、その時は来た。
ファントムが最後のフレーズを歌うと同時に、一拍の隙ができる。
「今！」
「偽・螺旋剣（カラドボルグ）!!」
私の合図とともに、エミヤが射った矢が弓から飛び出し、そのまま空を進んでジャンヌさんの展開した障壁にぶつかる前に、
「――『空間跳躍』」
「!?　かはっ!?」
管理人さんが矢だけを的確にファントムの側に飛ばす。
矢はファントムに突き刺さり、当たった部分とその周辺を抉り飛ばした。
けれど、まだ終わらない。
矢が突き刺さった後も、エミヤが投影した宝具にはあることができ

るのだ。
「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）！」
壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）。
サーヴァントが持っている宝具に込められた神秘を爆発させる技だって管理人さんが言っていた。
そんなことをすれば、サーヴァントは強力な武器を失うのと同じことらしいのだが、エミヤは一度見たものを魔力がある限り複製できるからこそ、あんな戦い方ができるのだ。
エミヤの一撃を受けたファントムは爆発の中で完全に消滅する。
その瞬間、先程まで響いていた怪音波も消失した。
「……倒せたんですか？」
「ファントムの気配は消失した。しかし……」
「しかし……？」
ジャンヌさんが恐る恐るという風に管理人さんに聞いてくるので、私が聞き返すと、管理人さんはこう答えた。
だけどその前に、カルデアと通信が繋がる。
『皆！　今すぐその場から逃げてくれ！　サーヴァントを上回る――超極大の生命反応だ!!』
「『蜥蜴』が来るようだね……」
ドクターの切羽詰まった声と共に、管理人さんがとある名前を呟く。
『蜥蜴』。
それは、竜の比喩にも使われている。
つまり、それは――
――オオオォ……!!
突然、遠方から轟音が響き渡る。
何事かと思っていると、マシュを含めたサーヴァント全員が警戒心を露わにしていた。
私自身、背中に氷柱を突き刺されたような悪寒を感じて、その場にへたり込んでしまう。
すると、管理人さんがこんな言葉をかけてきた。

いや、かけてくれた。
まるで、恐怖を和らげようとするかのように……。
「大丈夫だよ……僕達（サーヴァント）がいるんだし、立香ちゃんがいれば……どんな相手でも、負けるわけがない」
「そうですよ先輩……！　私たちは、ここで足を止めるわけにはいきません……！」
そう言って、マシュも自身を奮い立たせるように私に声をかけてくれた。
そうだ。
私たちはまだ、止まれない。
だって、私たちの後ろにはたくさんの人たちがいて、そのために今も必死になって戦っているのだから。
私は改めて決意を固めると、管理人さんの方を見る。
「立香君たちは先にジークの下へ急いでいてくれ。ジャンヌとマルタ、皆の先導を頼む」
「！　兄さんは!?」
「安心してくれ。流石に消滅することはないだろう。それこそヘラクレスレベルが来ないとね」
管理人さんの言葉に、私は思わず息を飲む。
あのヘラクレス？
それって、ギリシャ神話で語られる、最強の英雄の一人じゃない!?
でも、そんなことも言ってられない。
「行こう皆！」
「っ！　分かりました先輩！」
マシュの返事を聞いて、管理人さんを除いた全員が建物の中に入っていく。
後ろから響く轟音を振り払うようにして……。

## ジークフリートとの邂逅

「……いました！」
「酷い負傷……！」
「……くっ！」
ジャンヌさんの先導でたどり着いた先には、長身の男性が壁に背を預けるようにして座り込んでいた。
男性の方は、全身が傷だらけだったけど、体が欠損しているようなことは起きていない。
でも、私たちに警戒心を飛ばしていた。
私はすぐさま駆け寄ると、彼に話しかける。
「あの！　私、藤丸立香って言います！　ジークフリートさんですよね!?」
「！　何故、俺の名を……」
「管理人さんから聞きました！」
「管理人!?」
ジークフリートと名乗った男性は、驚いたように目を見開く。
しかしすぐに冷静になると、私たちに向けてこう言った。
「お前たちは……管理人の仲間なのか……？」
「そうです！　現在、外で管理人さんがファヴニールと戦っています！」
「……なるほど……道理で外から強大な魔力を感じるはずだ……」
彼は納得したような声を出すと立ち上がろうとする。
どうやら、まだ戦う気みたいだ。
だが、彼の体は限界に近いのか、ふらついてしまう。
このままじゃ……！
「待ちなさい！　アンタは今呪いの影響を受けているわよね！　そんな状態で戦うつもり!?」
「ああ。ファヴニールは俺が倒さなければならない……」
マルタさんが待ったをかけるが、それでもなお戦おうとする彼を見て、ジャンヌさんは悔しそうな顔をする。

すると、ジャンヌさんは何かを決意した表情を浮かべたあと、こう言った。
まるで、自分に言い聞かせるように……。
「まずは貴方の傷を治し、呪いを解きましょう。マルタさん、私と協力して彼の呪いを解くことはできますか？」
「……ええ。この場に私を含めて聖人が二人もいるから解呪ぐらいは可能だわ」
「できるのか……？　すまない、恩に着る……」
ジャンヌさんの提案を聞いた彼が頭を下げると、マルタさんは「遠慮しなくていい」と首を横に振る。
そして、２人は祈りをささげた。
すると、彼らの体から淡い光が放たれて、その光は彼の体を包み込む。
これが、聖女の力か……。
２人が治療をしている間、私は何もできずにただ見ていることしかできなかった。
ただ、隣にいるマシュの手を握っていることだけしか……。
「すまない。君たちのおかげで俺はまた戦える。行かなくては……」
「ちょ!?　待ちなさい！　今のは呪いを解いただけよ！　怪我まで治したわけじゃない！」
そう言って、再び戦いに向かおうとした彼を、今度はマルタさんが止めた。
だけど、彼はそれを振り払って、戦場へ向かおうとしている。
その時だった。
「きゃっ!?」
「くっ！　この魔力は!?」
建物全体が振動するような衝撃が走った。
何事かと思っていると、マルタさんが険しい顔をしながら外を睨む。
そして、濃密になったからこそ、私にもわかった。
「これは、管理人さんの魔力だ」と。

～～～

それを見て、管理人さんはジークフリートさんに出番を譲るように退いた。
「久しぶりだな。邪悪なる竜（ファヴニール）。二度（にたび）蘇ったなら、二度（にたび）食らわせるまでだ……！」
「……ファヴニールが怯えて……あのサーヴァント、まさか――!?」
魔力を迸らせるジークフリートさんに、明らかに怯えたような反応を見せるファブニール。
その様子に、ファヴニールの上に乗っていた「魔女」は驚きの声を上げる。
私も同じだ。
だって、今の反応は、普通の人間やサーヴァントにできるようなことではない。
つまり……！　彼は、本物の「竜殺し」！
「蒼天の空に聞け！　我が真名はジークフリート！　汝をかつて打ち倒した者なり！」
そう名乗った直後、彼の全身から膨大な魔力が噴き出す。
そして、一気にファヴニールへと駆け出した。
対するファブニールは、本能的に危険を感じたのか、口から炎のブレスを吐き出すが、
「ジーク行け！」
「すまない！」
管理人さんが援護して、炎をかき消した。
その間に、彼はファヴニールに接近し、剣を振り下ろす。
だが、ファブニールは咄嗟に身を捻らせて回避すると、大きく後ろに下がった。
しかし、
「宝具開放……！　『幻想大剣（バル）――天魔失墜（ムンク）!!』」
迸る魔力が、そのまま蒼い光の剣となり、ファヴニールの体を直撃する。
あまりの威力に、ファブニールは悲鳴を上げながら吹き飛んだ。
私たちも、吹き荒れる暴風に腕で顔を守ってしまう。

「がふっ……！　すまない……今の俺では、これが限界だ……今のうちに逃げてくれ……」
そう言って、地面に倒れ伏したジークフリートさん。
彼の体は、すでにボロボロだった。
おそらく、もう戦える力はないんだろう……。
それでも、彼は最後まで戦い抜くために立ち上がった。
その覚悟を無駄にしてはいけない。
そう思った時だった。
「ありがとうジーク。でも君にも来てもらわないといけないんだ」
「管理人さんの魔法陣！」
管理人さんが私たちの足元に複雑な魔法陣を展開する。
そして、こういう時に管理人さんが使う魔術は決まっていた。
「『空間跳躍』するよ！」
「待ってました！」
次の瞬間、私たちを眩い光が覆い、私たちはその場から離脱したのであった。

〜〜〜

「この間よりも急造で魔方陣をこしらえたから、十キロもないだろう！」
つまり、そこまでしか飛べてないってことか。
それじゃあ、ファブニールが来たら終わりかもしれないってこと!?
さっきの戦いで、ファヴニールがあれだけ弱っていたのは、多分ジークフリートさんがいたからで、本調子じゃないだろうし。
とにかく、今は逃げるしかない！　私たちは一目散に走り出し、ワイバーンの群とサーヴァントたちから逃れる。
だけど、
「あれは……フランス軍!?　ワイバーンに襲われています！」
「ッチ！　次から次へと忙しねぇな！」
マシュが人影――「フランス軍」を見つけた報告をすると、クーニキが舌打ち交じりに悪態をつく。
確かに、こっちは逃げてる最中なのに、向こうは戦闘中だなんて、邪魔にしかならない。
どうしよう……助ける？
だけど、あのフランス兵たちが持っている武器は槍とか弓だし、ワイバーン相手だとキツイんじゃないの!?
「前門のワイバーン、後門のサーヴァント、か……」
「くっ！　すまない、俺が足手まといなせいで……」
ジークフリートさんは悔しそうに唇を噛む。
だけど、ここで立ち止まっても仕方がない。
どうにかして突破口を開かないと……！
『皆聞こえる!?　そっちにサーヴァントが――！』
「知ってますドクター！」
通信機越しに聞こえてきたロマンの声に返事をしながら、振り返り、追ってきたサーヴァントたちに目を向ける。
そこには、貴族服のようなものを身に纏った男性と、全身甲冑に身を包んだ騎士が一騎。
「Ａ――――ｕｒｒｒｒ!!」
「……」

サーヴァントは、こちらを見るや否や、猛烈な殺気を飛ばしてくる。
そのことに、またしてもへたり込んでしまいそうだったけど、何とか気合を入れて立て直した。
「……野郎……！」
「――まあ、何て奇遇なんでしょう。貴方の顔は忘れたことがないわ、気怠い職人さん？」
モーツァルトさんが、怒りを表情に出し、貴族服のサーヴァントを睨みつけた。
もしかして因縁があるのだろうか？　そう思っていると、マリーさんが、ドレスを翻しながら前に歩み出る。
まるで、自分が戦うかのように。
そんな彼女は、挨拶をするかのように貴族服のサーヴァントに声をかけた。
「それは嬉しいな。僕も忘れた事などなかったからね。懐かしき御方。白雪の如き白いうなじの君」
しかし、返ってきたのは、ひどく芝居がかった口調での返答だった。
その様子に、マリーさんは少しばかり眉をひそめる。
だけど、その顔はすぐに微笑みに戻った。
彼女の真意を悟れない以上、この場は彼女に任せるしかない。
「そして同時に、またこうなった事に運命を感じている。やはり僕と貴女は、特別な縁で結ばれている」
「？　どういうこと？」
彼の言葉に首を傾げるマリーさん。
そんな彼女に、彼は恭しく礼をして見せる。
だけど、次の瞬間には、口元を大きく歪めて見せた。
その笑みを見て、私は思わずゾッとする。
あれは、殺すことを楽しんでる顔だ。
「そうだろう？　処刑人として一人の人間を二回も殺す運命なんて、この星では僕たちだけだと思うんだ」
「……生前のみならず、今回もマリアを『処刑』するつもり満々ときたか。シャルル＝アンリ・サンソン。どうやら本気でいかれてたってワ

ケかい？」
モーツァルトさんの言葉で理解した。
こいつが、あのマリーさんを処刑したっていう男なのか！
私はジャンヌさんたちから聞いていた情報を思い出しながら、彼を見据える。
確か、フランス王家の死刑執行人を務めてたって言う……。
そんなことを考えている間にも、モーツァルトさんの言葉を聞いたサンソンは不快そうに顔を歪める。
「……人間として最低品位の男に、僕と彼女の関係を語られるのは不愉快だな」
言ってることは間違ってないけど、あんまりな言い草に、流石の私でもカチンときてしまう。
確かに、モーツァルトさんは変な曲を作ったことで有名だけど、それだけじゃない。
音楽に情熱を傾け続けたからこそ、あんなに素晴らしい曲の数々が生まれたんだ。
それを、こんな風に言われる筋合いはない！
そう考えていると、モーツァルトさんが鼻で笑う。
それを見たサンソンの顔が、更に不機嫌になった。
「アマデウス。君は生き物、人間を汚物だと断言した。僕は違う。人間は聖なるものだ。尊いものだ。だからこそ、処刑人はその命に敬意を払う。お前と僕は相容れない。人間を愛せない人間のクズめ。彼女の尊さを理解しない貴様に、彼女に付き従う資格はない」
そう吐き捨てると、サンソンは剣を抜く。
対するモーツァルトさんは、小さくため息をつくと、肩をすくめた。
まるで、挑発するように。
そんな二人のやり取りが行われている傍ら、もう一騎の全身甲冑を着込んだサーヴァントも動き出す。
こっちは、明らかにやる気だ。
マシュが盾を構え直すと、全身甲冑サーヴァントが、兜の奥で目を光らせる。

だけど、次の瞬間――
「歯を食いしばりなさいランスロット！」
「Ａｒｒｒｒｒｔｈｒｒｒｒｒ!?」
横合いからアルトリアさんが甲冑を着込んだサーヴァントを殴りつけた。
その一撃は、サーヴァントの鎧を砕くどころか、吹き飛ばすほどの威力があったようで、サーヴァントは地面に叩きつけられる。
突然の出来事に、その場にいた全員が唖然としていた。
そんな中、いち早く我を取り戻したのは管理人さんだった。
「アルトリア……ランスロットは君に任せてもいいかい？」
「ええ。彼にはきつめのお仕置きが必要ですから」
言って、彼女は倒れ伏すサーヴァントの胸倉を掴むと、そのまま持ち上げる。
まるでゴミのように、軽々と。
その様子を見た私は、改めて彼女がどれだけの力を持っているのかを実感してしまった。
だけど、今は感心してる場合じゃない。
「アルトリアさん！　そっちは任せた！」
「任されましたよマスター！　それではランスロット。エクスカリバー百本ノックを食らわせてあげますからね！」
「Ａｒｒｒｒｒｔｈｒｒｒｒｒ――！」
こうして、サーヴァント二体との戦闘が始まった。

## バーサーク・サーヴァントとの戦闘

サンソンとモーツァルトの戦いは熾烈を極めていた。
サンソンは、手にした剣を縦横無尽に振るう。
対して、モーツァルトは、自身の武器である音楽を巧みに操り、その斬撃をいなしていく。
しかしそれでも、
「くっ！　やはり戦闘向きじゃないときついねぇ！」
「口だけかアマデウス！」
彼の服は所々切り裂かれており、そこから血が流れている。
一方、サンソンも無傷というわけではない。
彼の持つ処刑人の得物である刃は、その刀身がボロボロになっていた。
お互い、かなり消耗しているようだ。
だけど、こちらはアマデウス一人ではない。
「エミヤ！　クーニキ！」
「了解した！」
「おらよっと！」
二人の援護射撃が、サンソンを襲う。
サンソンはそれを、大きく飛び退いて回避した。
これで、サンソンはモーツァルトから離れざるを得ない。
だけど、サンソンはそれで構わないみたいだ。
彼はすぐにアマデウスへと狙いを定める。
一方のアマデウスも、彼に向かって駆け出していた。
そして、二人は同時に互いの間合いに飛び込む。
サンソンの剣と、アマデウスの曲が激しくぶつかり合った。
何度も、何度でも、両者は互いに斬り合う。
そんな時だった。
「Ａｒｒｒｒ!?」
「っ!?」
「バーサーカー!?」

彼らの間を通過するように、ランスロットと呼ばれたサーヴァントが吹き飛ばされていく。
どうやら、アルトリアさんの一撃を受けて、ぶっ飛ばされたらしい。
あれだけのダメージだ。
しばらくは動けないだろう。
その間に、サンソンの相手はどうにかできた。
私はそう判断すると、クーニキに指示を出す。
「クーニキ！　宝具を使って！」
「へっ！　了解！」
クーニキは、槍を両手で持ち直すようにすると、魔力を高めていく。
私はそれを確認してから、マシュとジャンヌさんに目配せをした。
二人とも、私の意図を理解してくれたようで、すぐに行動に移す。
「皆さん！　敵サーヴァントとワイバーンから離れてください！」
ジャンヌさんが味方全員に届くようにと声を張り上げ、私達はその場から離れる。
クーニキの宝具は強力だけど、巻き込まれたら洒落にならないからね。
私達が離れると同時に、クーニキは大きく息を吸い込み、
「この一撃、手向けとして受け取れ！」
一気に駆けだした。そのスピードは今までにないくらい速い。
一瞬でトップギアに入る。
そんな彼が狙っているのは、もちろん、サンソンたちだけだ。
対するサンソンたちは、
「チィッ！」
「Ａｒｒｒｒｒ!!」
舌打ち交じりに回避しようとするが間に合いそうにない。
そして、クーニキがサンソンたちから十メートル離れた地点で飛び上がる。
そのまま、全身の筋肉を隆起させるほど力を込めて、槍を投擲した。
「突き穿つ（ゲイ）――死翔の槍（ボルク）!!」
放たれた朱槍は音速の壁を容易く突破し、大気との摩擦によって炎

を上げる。
その一撃は、サンソンたちに向かっている途中で分裂し、狙い違わずサンソンたちを捉えて、そのまま彼らを貫いた。
クーニキの宝具は、確かにサンソンたちに直撃した。
だけど……
「ぐっ……！　危なかった……！」
「A……r……！」
サンソンは右腕が抉り飛ばされた以外はほとんど傷がなく、代わりにランスロットと呼ばれたサーヴァントの体の大部分が抉り取られている。
他にも、フランス軍を襲っていたワイバーンを、分裂した穂先が貫き、消滅させていた。
……さすがはケルトの大英雄。威力も半端じゃないなぁ。
クー・フーリンの持つ魔槍――ゲイボルクは彼が扱うことで、凄まじい兵器となる。
もっと言えば、先程の技は槍に備わっている呪いの力を魔力によって発動させてるだけで、ただの「投擲」なのだ。
故に、魔力消費がほとんどないため、すごく燃費がいい。
しかし、それでも全滅させることはできず、ワイバーンは大量に残っている。
例え、サンソンを倒すことができても、ワイバーンの群れが残っているためジリ貧だ。
どうしたら……どうすればいい……！
そう思っていた時であった。
「砲兵隊、撃（て）ええええっ！」
どこからか、号令の合図が聞こえる。
それと同時に、大量の大砲が火を噴いた。
その攻撃は、サーヴァントであるクーニキやサンソンたちには効かないけど、ワイバーンたちの体に大きな穴を空け、次々と落としていった。
一体誰が？　と思ったら、それはフランス軍からの援護だった。

「え……？　ジル……！」
「周囲の竜を優先しろ！　ありったけの砲を撃て！」
いつの間にか、戦場から離れていたはずのフランス兵が戻って来ていたのだ。
彼らは手にした武器で、ワイバーンたちを殲滅していく。
彼らを指揮しているのは、ジャンヌさんがふとこぼした言葉から、ジルと呼ばれる知り合いだろう。
「っ！　立香さん！　今なら！」
「うん！　ライダーさん！」
「承知しました！」
ジャンヌさんが私に合図をしたので、私はライダーさんに追撃の合図を出す。
同じライダーでも、マリーさんを行かせていないのは、もしかしたら史実的な関係で特攻が入ってしまうかもしれないと思ったからだ。
ライダーさんは、クーニキみたいな速度でサンソンに接近していく。
それに対して、サンソンは剣を構え直して迎え撃つ姿勢を取った。
だけど、クーニキの攻撃を受けて無傷というわけではないようだ。
彼の剣は一部が砕けてなくなっている。
ただ、ライダーさんはそんなこと関係ないと言わんばかりに、速度を落とすことなく突っ込んでいく。
そして、渾身のドロップキックを食らわせた。
「吹き飛びなさい！」
「がはぁっ!?」
サンソンはその一撃で大きく吹き飛ぶ。
だが、彼は空中で体勢を立て直すと、すぐに地面に着地した。
対するライダーさんの方は、勢いを殺しきれずに地面を削るようにしながら滑っていく。
すぐに彼女は立ち上がって、再びサンソンに向かっていった。
「っ！　宝具！　死は明日への希望なり（ラモール・エスポワール）！」
だけど、サンソンは宝具を発動して、巨大なギロチンを出現させる。

そのまま、ギロチンの刃が落ちていき、ライダーさんを真っ二つにする――というところで、先程から沈黙を保っていた管理人さんが動いた。
『詠唱破棄――脱出王（フーディーニ）の奇跡（魔術）！』
「なに!?」
突然、ライダーさんの前に転移してきた管理人さんは、右手で握っていた本を、まるで手品のように素早く動かした。
すると、次の瞬間には、サンソンの宝具の効果が打ち消されていた。
その現象に目を見開くサンソン。
一方で、私は内心で驚いていた。
（宝具の効果すら打ち消せるの!?）
宝具とは、英霊――サーヴァントを象徴する必殺技だ。
それが、目の前にいる管理人さんにとっては、児戯に等しいらしい。
だけど、その事実は同時に、管理人さんがどれほど規格外なのかを物語っている。
だけど、今はそれよりも、あそこまで無防備になったサンソンの方が重要だ。
ライダーさんは、さらに加速の付いたドロップキックを食らわせて、遥か彼方に吹っ飛ばした。
それでも、まだ息があるらしく、ランスロットみたいに消滅はしていないのが遠目だが分かる。
「これで、一先ずは安心かな？」
「うん。でも、追手が来ないとも限らない。だから早く離れよう」
私がそう言うと、ライダーさんはこくりと首肯し、私たちと共にその場を離れた。
そして、フランス軍の方を見ると、ジャンヌさんを信じられない者でも見るかのように凝視していた。
こうして、新たにサーヴァントを迎え入れつつも、激しい戦闘を乗り越えた私たちは次へと向かう。

～～～

「すまない管理人。一度ならず二度までも……」
「相変わらず謙虚だねジーク。あんまりそうだと、損をするって言ったのを覚えていないのかい？」
「……すまない」
謝るジークフリートさんに対して、管理人さんは苦笑しながら彼を諌めていた。
まあ、確かに有名な竜殺し（私は知らなかったけど……）にここまで言われると、自信をなくしてしまいそうになるよね。
とはいえ、当の本人はそのことを気にしている様子はない。
その辺り、私の知らない信頼関係があるんだろう。
「とりあえず、これでサーヴァントの数は11人。そのうち二人は、相手の切り札であるファヴニールを倒せる可能性があるサーヴァントだ。でも、これだけでは足りない。どうせやるなら万全を期してから挑もう。それでいいかい立香君？」
「はい。もちろん！」
と、そこで話を振られたので、私は元気よく返事をした。
戦力は多い方がいい。
正直、今の私たちだけでは厳しいかもしれない。
だけど、だからこそ、できる限りのことはしたいと思う。
それに、第一特異点で終わりじゃないんだ。
今のうちに、様々なことを知っておかないと。
そう思った時、ふと疑問が浮かぶ。
聖杯戦争とは、7人のマスターと7騎のサーヴァントによる争奪戦だという。
だけど、ここにいるのはカルデアから召喚したサーヴァントと「魔女」に召喚されたマルタさんを除いて、4人。
あと3人、誰かいないのだろうか？
「ねぇジャンヌさん。残りのサーヴァントの場所は分かる？」
「……ええ。分かりますが、今は少し休むことにしましょう。兄さんもそれでいいですか？」
「いいとも。ジークの呪いは解けた。追手もまいた。しかし連戦続き

だ。休むこともいいだろう。立香君も無理をしているようだし……」
「……へ？」
突然、管理人さんにそんなことを言われて驚いた。
だけど、すぐに彼が何を言っているのか分かった。
だって、私の足は震えていたんだから。
「ファヴニールという、現代の魔術師からしてみれば特級の幻想種の魔力を受けたんだ。それに、狂化したサーヴァントの宝具の余波も。並の人間なら気を失っててもおかしくなかったんだよ」
「そ、そうなんだ……あ、あはは……情けないよね……」
「情けなくはないさ。君は頑張っている。大丈夫だ立香君。少し休んでいなさい」
「あ――」
そう優しく告げた管理人さんは、私の額を指で押す。
すると、意識が闇に飲まれていった。

# 決戦前夜

「う、うん……」
ゆっくりと目を開けると、そこには見慣れた天井が広がっていた。
ここは、図書館の一角にある私の部屋だ。
ベッドの上で横になっていた私は、起き上がって部屋に取り付けられた窓の外を見る。
外はまだ明るいが、すでに夕方に差し掛かっているのだと分かる。
私は、どうやら気絶してしまったらしい。
管理人さんに額を押された後、そのまま眠ってしまったのだろう。
そういえば、他のみんなはどうしてるんだろうか？
「先輩、起きてますか？」
「あ、マシュ」
扉の向こう側から声が聞こえたので、私は扉を開いてマシュを招き入れる。
彼女は、私が寝間着姿であることを確認すると、安堵の息を吐いた。
どうやら心配をかけてしまったらしい。
そう思うと申し訳なくなる。
とはいえ、まだ人理修復は始まったばかり。
この調子じゃ先が思いやられる……。
「ねぇマシュ。私って、どのぐらい寝てた？」
「そうですね……およそ半日です」
「半日……」
それは結構な時間を睡眠に費やしていたことになる。
それだけ疲労が溜まっていたということなんだろう。
これでは、あまり戦いについていくことはできないかも……。
だけど、それでもやるしかない。
少しでもみんなの力になるために、私も頑張らないと……。
頬を叩いて気合を入れた私は、マシュに聞いてみる。
「皆は何してるの？」
「えっとですねぇ……実は……」

なんだか言いにくそうにしているマシュに首を傾げていると、彼女が意を決したように口を開こうとした。
その時だった。
バァン！　と大きな音を立てて、私の部屋の扉が思いっきり開けられた。
何事!?　そう思っている間もなく、扉を開けたであろう影は、私目掛けて突っ込んでくる。
そして、その勢いのまま抱きついてきたのだ。
当然、受け止めきれるはずもなく、一緒に床へと倒れてしまう。
いったい誰がこんなことを……と思って顔を上げると、そこにいたのは……。
「安珍様ぁ！」
「ほわっ!?」
誰かの名前を呼びながら私に抱き着いている少女だった。
……誰？
いや、ホント誰？
私の知り合いにはこんな子はいないはずだけど……。
というより、そもそも私に向かって名前を呼んでいるような気がするんだけど……。
そう思って、とりあえず彼女の頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細めていた。
うん、可愛い。
でも誰？
「先輩。そちらの方は、先輩が気絶した後に向かった町で出会ったサーヴァントの一人です。真名を……」
「清姫です！　安珍様！」
「……清姫さんです。クラスはバーサーカーだそうですよ」
「えぇ……」
サーヴァントで、しかもバーサーカーということは狂化のスキル持ちとかいう問題児ジャマイカ。
なんでそんな子がここにいるんだろう？

というか、本当に誰？
混乱していると、今度は別の人物が部屋に入ってきた。
現れたのは、管理人さんだった。
「やぁ。すっかり仲良くなってるね立香君」
「管理人さん！　ちょっと説明してもらえますか！」
私は思わず管理人さんに詰め寄ってしまう。（もちろん清姫という子も一緒だ）
だけど、彼はいつものように微笑むだけだった。
あ、なんかムカつく。
そんな私の心中など知らず、マシュは管理人さんの代わりに事情を説明してくれた。
なんでも、私が気絶した後、マリーさんの提案で二手に分かれることとなった。
Ａグループにはマスターである私に、サーヴァント組のマシュ、管理人さん、エミヤ、アルトリアさん、モーツァルトさん、ジークフリートさんの七名がいて、Ｂグループにはマリーさん、ジャンヌさん、クーニキ、ライダーさん、マルタさんの五名がいる。
それで、Ａグループが向かった先――「ティエール」では、２人のサーヴァントが争っていたそうだ。
その一人が……。
「清姫ちゃんなんだね」
「清姫と呼んでください！　もしくは、気安く「きよひー」とでも！」
「うん……分かったよ……きよひー」
「はい！」
う～ん……この子に関してはよく分からないなぁ……。
私は苦笑しつつ、もう一人のサーヴァントのことを聞いてみた。
すると、マシュが答えてくれる。
「もう一人の方は、私たちが戦ったバーサーク・アサシン――「カーミラ」の少女時代として召喚された「エリザベート・バートリー」さんです」
「エリザベート……エリ……エリちゃん……」

マシュの説明によると、もう一人のサーヴァント――「エリザベート・バートリー」は、清姫と争っていたのだが、話が進みそうにないとのことで、管理人さんが拳骨を落としたそうな。
それで、管理人さんが怖くなってしまったエリちゃんはここにはいないらしい。
なにやってんのその子……。
まぁ、それはいいとして、もう一つのグループ――Bグループはどうなったのか聞いてみると、そっちの方がびっくりするような内容だった。
「……竜の魔女の襲撃にあいました」
「!?」
マシュの言葉を聞いた瞬間、私はベッドから飛び降りる。
Bグループの方にも敵がいたってこと？
すぐに確認しないと……！
慌てて部屋を出ていこうとする私だったが、それを止めたのは管理人だった。
「どこへ行くんだい？」
「放して！　マリーさんたちが！」
私は止めようとする管理人さんの手を必死に振りほどこうとするが、彼の力は強く、振り切ることはできなかった。
それでも諦めずに暴れていると、管理人さんが落ち着かせるような声で私に告げる。
「大丈夫だよ立香君。何故なら――」
「立香！」
「え……？」
「――全員無事だからね」
私を呼ぶ声が聞こえたほうを向くと、死んだと思っていたマリーさんが、腕を振ってこちらに近づいてくるのが見えた。
その姿を見た私は、力が抜けて床に座り込んでしまう。
そんな私を見てか、彼女は安心させるように笑いかけてきた。
「立香が起きたって管理人さんが言ってたの！　でも、管理人さんっ

たら、私を置いて先に立香のところに行っちゃうんだもの。寂しかったわ！」
拗ねるように頬を膨らませながら言う彼女に、私は思わず零れ落ちそうな涙を引っ込めて苦笑してしまう。
良かった……。
本当に良かった……。
みんな生きてる……！
その事実を再確認すると、引っ込んでいた涙があふれ出てきてしまった。
思わずマリーさんに抱き着いてしまう。
「うわぁあああああああん!!　死んだのかと思ったよマリーさぁあああああああん!!」
「あらあら。よしよし」
泣きじゃくりながらも感謝を伝えると、マリーさんは優しく私の頭を撫でてくれた。
そんな私たちのやり取りを見ていた管理人が、小さく息をつく。
そして、真剣な表情で口を開いた。
「さて、これで『抑止力』に召喚されたであろうサーヴァントはすべてそろった。Ｂグループの方でも一人、サーヴァントを勧誘できたからね。だから――」
管理人さんはそこでいったん区切り、それから力強く言った。
「決戦の準備を始めようか」

～～～

る。
管理人さんは、私が起きるまでの間にこのカルデアにいるサーヴァントたちに召集をかけたらしい。
ちなみに、清姫も既に来ていて、いつも私の側にいるマシュ以上にべっとりとくっついてきている。
なぜか私のことを「安珍様」って呼んでくるんだけど……ま、いいか！
管理人さんは書斎の中央にある大きな机の上に地図を広げる。
それを見ると、フランス全土が描かれたものだった。
管理人さんはその地図のある場所に指を置いた。
そこはちょうどオルレアンの位置だ。
管理人さんは、そこを指し示しながら説明を始めた。
「相手の本拠地であるオルレアンまでは、さして時間はかからない。そして、相手の戦力もだいぶ減っている」
「相手のサーヴァントだった私は、管理人が「魔女」との繋がりと付与されていた狂化を塗り替えてくれたからこっち側についている。それとランスロットとサンソンは消滅を確認してるわ」
管理人さんの言葉を継ぐようにして、マルタさんが話してくれた。
ってか、もう一人のサーヴァントも倒してたんだ。
すごいなぁ……。
そう思ってる間にも管理人さんは話を続ける。
「こちら側の戦力はこれで12人。相手の戦力は、魔女も含めて5人。数的有利はこちらにあるけど、一番の問題は……」
「ファヴニールだな」
「そう。ファヴニールが問題だ」
ジークフリートさんの呟きに、管理人さんはうなずいた。
ジャンヌさんが、少し不安そうに尋ねる。
「こちらにはファヴニールを殺した張本人であるジークフリートさんがいますが、ジークフリートさん一人でファヴニールを相手取らせるんですか？」
ジャンヌさんの問いに、管理人さんは首を横に振る。

どうやら違うらしい。
彼はジャンヌさんに向き直ると、こう答えた。
「いや？　流石にジークだけでは倒せないだろうからね。それに、ジークはファヴニールをどうやって倒したか覚えていないでしょ？」
「……ああ」
管理人さんの問いに、間をおいてジークフリートさんが答えた。
……あれ？
「倒したのに覚えてないの？」
「ああ。あの時の俺は必死だったからなのか、奴とどうやって渡り合っていたのか覚えていないんだ。すまない……」
「ううん。必死だったら仕方ないよね」
申し訳なさそうな顔をしながら謝ってくる彼に、私は慌てて首を振る。
だって、仕方がないと思うし。
むしろ、よく頑張ってくれたって思う。
だから私は、彼を責める気なんて全くなかった。
しかし、倒す手段が分からないとなると、どうすればいいんだろう？
「ねぇ管理人さん。ファヴニールをどうやって倒すの？」
私が聞くと、管理人さんはニヤリとした笑みを浮かべて言った。
まるで、その質問を待ってました！　と言うように。
そして、自信満々といった感じで彼は答える。
「そこは僕も戦うんだよ。現状、マルタも対ファヴニール戦には有効そうだけど、流石に戦力をファヴニールに集中するのはどうかと思ってね。相手は狂化が入ってるとはいえ、彼らはサーヴァント。僕らも何か対策を練るべきだと思うんだ」
なるほど……。
確かに管理人の言う通りかもしれない。
サーヴァントはサーヴァント同士の戦いにおいては、ほぼ純粋な強さで勝敗が決まる。
それは、私自身が身をもって体験したことだし、今更疑う余地はな

い。
でも、ファヴニールに関してはその限りじゃない。
竜種という圧倒的なアドバンテージがあるからこそ、サーヴァントの中でも竜を鎮めたという実力を持つマルタさんでも勝てるかは微妙なところだ。
だからこそ、管理人さんは自分たちでも対抗できる方法を考えてきたのだろう。
そして、その方法は私たちの想像を超えていた。
「そこで、今回の作戦は――」

# 第一特異点最後の夜

作戦会議の後、私たちは明日に備えてきっちり休むことになった。
私は、いつもの部屋で休んでいるのだが……
「安珍様、お疲れになったでしょう？　マッサージをして差し上げますわ」
「ありがとね～」
何故か、清姫が私の部屋にいて、ベッドの上でうつ伏せになっている私の背中を揉んでくれている。
最初は、彼女が部屋に来たときはびっくりしたけど、すぐに私のことを心配してくれてるんだって分かって嬉しかった。
清姫と一緒にいると安心するなぁ。
そんな風に思っていると、扉をノックする音が聞こえる。
「誰～？」
「先輩、私と……」
「私ですわ！」
私の声にかぶせるようにして聞こえたのはマシュとマリーさんだった。
二人は私に声をかけると、部屋の中に入って来た。
マシュは私の近くに来ると、心配そうに話しかけてくる。
どうやら、私のことが気がかりだったようだ。
「先輩。本当に大丈夫なんですか？」
「うん！　もう平気だよ！　ほらっ！」
元気いっぱいに答える。
すると、マシュは小さく息をついた。
それから、彼女は笑顔を見せる。
やっぱり、彼女の笑顔を見ると、心が温かくなってほっとする。
「それで、今日は何をしに来たの？」
「明日は「魔女」との決戦でしょう？　もしかしたらこの特異点最後の夜になるかもしれないから、みんなで集まって一緒に寝ようってなったの！」

私が尋ねると、今度はマリーさんが答えてくれた。
な、なにそれ!?
なんか、修学旅行みたいで楽しそう!!
私は、目を輝かせながら二人を見る。
そんな時だった。
扉からこの部屋を覗き込むようにしているジャンヌさんを見つけたのは。
「あの……私もいいですか？」
「あれ？　ジャンヌさん？　別にいいけど？」
「ほんとですか!?」
ジャンヌさんの申し出に、私は特に考えることもなく許可を出した。
彼女なら、断っても無理矢理入ってくるようなことはしないと思ったからだ。
それに、女子会は人数が多い方がいいもんね！
すると、ジャンヌさんの顔にパッと明るい表情が浮かぶ。
「安珍様……私もいることをお忘れなく」
「忘れてないよきよひー」
ジト目で言う清姫に、苦笑いしながら返す。
まあ、清姫はともかくとして、ジャンヌさんとは話したいことあったからちょうど良かったかも。
そう思いつつ、私は彼女たちに言った。
ちなみに、私が寝ていたベッドは、俗にキングサイズと呼ばれる大きさがある。
だから、私たち五人が乗っても広々としているのだ。
「それじゃあ、どんな話をしようかしら？」
私が提案をする前に、マリーさんが尋ねて来た。
それに対して、私は答える。
正直、あんまり考えていなかった。
でも、せっかくだし何か話題を提供しないと。
そう思っていると、きよひーが手を挙げてこう言った。

「ならば、各々の意中の相手を話すのがいいのではないでしょうか？」
えっと……。
きよひーが提案したのは、ガールズトークとしては定番と言える内容だ。
ただ、それを話すことによって、より盛り上がる可能性はあると思う。
なので、私は少し考えてみることにする。
私の好きな人……誰だろう？
「私はもちろん安珍様ですわ。愛しております」
最初に口を開いたのは清姫だった。
私に向かって微笑みかけながら言う。
うん……。それは知ってるんだけどさ。
きよひーって、女の子じゃん？
私は日本人として生まれたから、流石に同性愛者の気はないというか……。
そう思って、他の人に視線を向ける。
まずは、ジャンヌさんに聞いてみることにした。
……うん。
すごく恥ずかしそうな顔で俯いちゃった。
それに何となく感づいてると言いますか、今までの反応からして、ジャンヌさんが誰を好きなのか分かってるんだよね。
「ジャンヌさんは、管理人さんが好きなんだよね？」
「!?　……はい……」
私が尋ねると、彼女は顔を真っ赤にして小さく呟いた。
その反応を見て、やっぱりそうだと確信した。
だって、管理人さんは優しいし、頼りになるし、私のことも守ってくれる。
そして、私にとっては彼は目標だ。
誰かに託し、誰かを助ける。
そんな彼に憧れている。
でも、それは恋とかそういう感情じゃない。

もっと別の何かだ。
私は彼に救われた。
だからこそ、今度は私が助けてあげたいし、力になりたい。
そう思うのは自然なことだ。
それはさておき、ジャンヌさんの話だ。
「私は、聖女と呼ばれる前――まだ田舎娘だった時に、兄さんと出会いました。その時は、ただの優しい人だとしか思っていなかったんです。だけど、時間が経つにつれて、とても頼れる存在に見えて……」
そう言って、ジャンヌさんは頬を赤く染めてうつむく。
多分、照れているんだろうなぁ。
そんな彼女を見ていると、ちょっとだけ羨ましくなる。
そんなことを考えながらジャンヌさんを見つめていた時だった。
ふと、彼女がこんなことを言い出した。
「あの……マリー。私は兄さんにふさわしいのでしょうか？」
急にそんなことを言われても困ってしまうかもしれない。
だから、マリーさんに尋ねたんだと思う。
でも、マリーさんは笑顔を浮かべるとこう答えた。
まるで、聖母のような穏やかな笑みで。
「ええ！　貴女はあの人の側にいてもいいと思うわ！」
「そうですか……？」
「そもそも、その人にふさわしいかどうかを決めるのは周りではなく、本人たち自身だと思うの。……私は周りに決められてしまったけど、それでもあの人に出会えたのは幸せよ！　それはジャンヌ、貴女もではなくて？」
確かに、マリーさんの言う通りかもしれない。
周りの評価なんて関係ない。
自分がどうしたいか、どうなりたいかを自分で決めるべきだ。
「そう、ですね……。私は兄さんが好き……。好きになった理由は色々あるけど、私にとっての兄さんは、どんな時も優しくて、強い意志を持っていて、頼りになって、一緒にいると安心できる、そんな人なんです」

ジャンヌさんは、マリーさんの問いかけにそう答えた。
その顔には、今までのようなオドオドした影はなく、自信に満ちた表情になっている。
これなら大丈夫かな？　私は、彼女の言葉を聞いて、ほっとした。
すると、ジャンヌさんが私に話しかけてくる。
その表情は、さっきまでとは打って変わって真剣なものだった。
「立香さんは、明日の戦いに勝てると思いますか？」
「う～ん……勝てるかどうかより、「勝たなきゃいけない」かな？」
「勝たなきゃいけない……」
「うん。だって、カルデアが負けたら、私の思い出も何もかもなくなってしまうから。……きっと、この特異点が解決しても、他の特異点で死んじゃうかもしれない。だから、ここで躓いてる暇はない……っていうのがあるかな？」
正直、怖い。
レイシフトの適性率の高さと、マスターとしての素質しかない私は、魔術回路が一般人並みしかない。
それなのに、今まで何度も死にかけている。
……死ぬことが怖くないと言えば嘘になる。
でも、ここで負けたら、全部なくなってしまう。
それは嫌だ。
絶対に。
私は、自分の気持ちをジャンヌさんに伝える。
「だから、「魔女」にはぜ～ったい負けない！　明日は皆で勝とう！」
「……はい！」
私の言葉を聞いたジャンヌさんは、力強く返事をしてくれた。
それを見た私は、少し嬉しくなる。
良かった。ジャンヌさんは元気になったみたいだ。
ジャンヌさんと話していた私に対して、清姫は不満げな顔をしていた。
「じゃんぬさんとばかり話して……あなたの愛しい清姫がここにいるんですよ？」

「あはは……きよひーも一緒に、明日は勝とうね？」
「……それならいいんです」
清姫は、そう言うと私に抱きついてきた。
うん。きよひーは相変わらず可愛い。
こうして、私たちの女子会は過ぎていった。

～～～

俺なんかより、「守る」ことは得意だろ」
「もちろん、ゲオルギウスも立香君の護衛に向かわせるよ。でも、万が一を想定してね？」
まぁ、確かにな。
相手は宝具を連発してくる上に、聖杯のこともある。
サーヴァントをつぶしたとしても、また聖杯で召喚されちゃたまったもんじゃねぇからな。
「私を呼びましたか？」
「おっと、噂をすればなんとやらだ。君も参加してくれるかいゲオルギウス？」
「私にできることなら」
噂をしていたら件の人物――ゲオルギウスがやってきた。
ゲオルギウスは、穏やかな笑みを浮かべながらそう答える。
……こいつ、絶対戦うつもり満々だな。
だが、その目はいつも以上に真剣そのもので、決して冗談ではなさそうだった。
こういう目をしてる奴は、大体マジでやる。
「それで、私をマスターの護衛にあてた理由は？」
「僕がいなかったら、ゲオルギウスもファヴニール討伐に参加してもらいたかったんだけど、基本的に僕一人で事足りてしまうからね。ジークをファヴニールにぶつけるのは、「死因再現」で万が一を防ぐためかな？」
「なるほどねぇ……」
管理人の言葉に思わず納得する。
そういえば、こいつはとんでもない奴だったな。
そりゃ、ファブニール程度じゃ傷一つ付けられないだろう。
逆に、どんな存在だったらこいつを倒せるんだよ。
師匠でも無理なんじゃねぇか？
「そういうわけで、明日の戦いには全員参加で頼むよ。君たち三人なら安心だろうけど、念のためさ。あ、それと、エミヤ君はこっちについてきてくれたまえ」

「……何の用だね」
「君は一度解析したものを投影できるんだろう？　なら……」
管理人はアーチャーを連れ立ってどこかへと向かう。
残された俺は、ゲオルギウスの方を見て言った。
「アンタとは初めて会うが、背中を預けれそうだ」
「そう思っていただき光栄です。クー・フーリン殿」
「敬称はやめてくれや。背中がむずがゆくなる。クー・フーリンでいい」
「分かりました。クー・フーリン。明日は勝ちましょう」
俺とゲオルギウスは拳を突き合わせ、笑い合うのであった。

～～～

これは……。
「宝石剣?!」
「そう。キシュアからもらったやつの一本だよ。それを使えば、キシュアのように、並行世界を渡れるほどの穴は開けられないまでも、小さい穴をあけて並行世界から魔力を集めることはできるはずだ」
「いや、そういうことではなくてだね?!」
この人はなんてものを渡してくるのだ!?
こんなものが魔術協会に知られたら、どんな手を使ってでも奪いに来るだろう。
それほどの爆弾なのだ。
この剣――「宝石剣ゼルレッチ」は。
私の生前の友人――「遠坂凛」はこれを作り出すことができて、第二魔法の発動も弱いながらもできていたのだ。
しかし、この剣一本を作り出すために相当な時間をかけたのだ。
それを、十万ドルＰＯＮとくれるみたいに渡されたもんだから非常に心臓に悪い。
「それで、これを私に渡してどうしたいのだ?」
「うん。君は魔術師としての起源が「剣」だったよね? アルトリアの鞘が埋め込まれていた影響でそうなったと聞いてるよ。その影響からか、元から持っていた固有結界が「剣」を投影することに特化してしまった……」
確かに、私は生前において、養父である切嗣からセイバーの鞘――「全て遠き理想郷(アヴァロン)」を埋め込まれて、魔術起源が「剣」となり、その影響で、生まれ持っていた固有結界が「剣」に関するものとなったのだ。
固有結界の特性上、一度見た刀剣類は固有結界に内包され、そこから引き出すことで、様々な武器を使うことができる。
管理人に渡されたことで、この宝石剣ゼルレッチも(ガワだけとはいえ)固有結界に内包された。
しかし、それでは見た目だけのハリボテなのだ。
実際に、この剣を使ったところで、並行世界の魔力を集められるはずがない。

なぜなら、第二魔法とはそれだけ高度なものなのだ。
「そこで、君にはそれをほぼ完全に投影できるようになってほしい」
「……予想はしていたが、やはりそうか」
私はため息を吐いて、管理人の話を聞くのだった。

## 決戦の日

「この中で軍を率いた経験は……どうやら俺だけらしいな。もっとも俺とて、国という国を軍で攻め落とす、という絢爛（けんらん）な軍歴がある訳でもないが……」

翌日、いつもの朝食後の会議で、私たちは今日の決戦の方針を話し合っていた。

議題はもちろん、「ファヴニール討伐」について。

管理人さんに指名されたジークフリートさんは、腕を組んで考え込む。

そんな彼に管理人さんがフォローを入れた。

「まぁ、今回は軍ではないからそこまで気にしなくてもいいんだジーク」

「そうだな……すまない管理人」

「だが、軍とは違って個々が強すぎる。それに、僕たちはサーヴァントだ。マスターの安全さえ確保できれば、好き勝手暴れても構わないだろう？」

そう言うと、管理人は私を見てニヤリと笑みを浮かべた。

私はその顔に嫌な予感を感じつつ、一応尋ねることにした。

「えっと……なにするつもり？　作戦は昨日の夜に聞いたから、もう分かってるけどさ……」

私がそう聞くと、管理人は待ってました！　と言いたげに口を開いた。

そして、その口から出てきた言葉は……。

～～～

その中でも一際目立つのが、竜種であるファフニールを使役する少女……ジャンヌ・ダルクを名乗る「魔女」だ。
そんな彼女は自室にて、一人すすり泣いていた。
「うくっ……ひっぐ……」
「ジャンヌ……」
そんな彼女を心配そうに覗き込んだのは、彼女の騎士でもあったジル・ド・レェだ。
「どうされたのですかジャンヌ……あなたらしくもない」
「っ！　うるさい！　うるさいうるさいうるさい!!　あなたらしくないって何!?　本当の私は何なの!?　あのこぎれいな聖女様!?　なら私は偽物!?　じゃあ本物はどこにいるの!?　教えてよ!!」
「それは……」
「黙れ！　あなたは私の騎士なんでしょ!?　だったら、私を慰めるくらいの気概を見せなさいよ！」
「……」
子供の癇癪のように騒ぎ立てる「魔女」を、ジルは困ったような表情で見つめていた。
「私はこの国が憎い！　私のことを陥れたこの国が、何もかも壊してやりたいほどに憎いわ！　だから私は、私を否定したこの国の全てを滅ぼさなければならないの！」
「……」
「だけど！　あの男が来たことでおかしくなってしまった！　私の記憶にも残っているあの「お兄さま」の言葉のせいで！」
その怒りと共に、床の上を「魔女」が放った憎悪の炎が迸る。
しかし、それすらも一瞬で消え去り、そこには先ほどの光景などなかったかのように静寂が訪れた。
「……」
「ひっく……うっく……」
互いに無言のまま時間が流れる中、最初に口を開いたのはジルの方だった。
「私はあなたの味方です」

「嘘つき……」
「ええ、確かに私はあなたの言うとおりの裏切り者ですよ。あなたを助けにこれず、のうのうと生きてしまった。ただ、一つ言えることがあります。私は貴女の味方だということです」
「……！」
ジルが優しく語りかけるように言うと、「魔女」は驚いた様子で彼を見た。
そんな彼女に、ジルはゆっくりと近づき、手を差し伸べた。
「胸の内を告げるには、ゆっくりと語り合うための時間。その障害となりうる脅威は去っていません……。だから、今は置いておきましょう。我々は仲間なのですから」
「……そうね」
その言葉を聞いた「魔女」は、静かに涙を拭って立ち上がる。
「行きましょうジル。まずはあいつらを始末しないと」
「はい、ジャンヌ」
そんなジャンヌの後を、ジルは恭しく付き従うようにして付いていくのだった。

～～～

「いやいやいや！　それ剣じゃん！　執筆要素ゼロじゃん！　むしろ書かれる方に出てくるやつじゃん！」
私が指差す先にあったのは、管理人さんがいつの間にか取り出した大剣であった。
大剣といっても、某「一狩り行こうぜ！」なゲームに出てくる大剣のように、身の丈ほどの大きさではないけど、それでも私なんか両断してしまいそうなほどに大きいものだった。
管理人さんはそれを片手で軽々と持ちながら、平然と答える。
その顔には、「なに言ってるんだね？」と言わんばかりの表情が浮かんでいた。
私は、管理人の態度を見て、逆に自分の方がおかしいのかと不安になり始めた。
「まぁ、改めて考えてみれば立香君の疑問も納得できる。でも、これはこれで使えるんだよ？　そもそも、僕は『図書館』だから自衛の装備にするとしても「剣」をそのまま使うと味気ないだろう？　だから、戦うための武器「剣」でありながら、物語を綴る『ペン』としての役割を持たせたんだ」
「ちょっと何言ってるか分からない」
そんなことを言いながらも、私は管理人が言っていることは理解できた。
つまり、この大剣は戦闘用であると同時に、執筆活動のための道具でもあるということだ。
それならば、今までの戦闘で使っていたのはなんだったのだろうかと思ったが、それはそれで説明がつく気がした。
「秘密兵器なんだね？　その『ペン』は」
「いや、そうでもない」
「あれぇ？」
私の問いかけに、あっさり否定する管理人だった。
しかし、ここで私は一つの可能性に思い至った。
そして、それを確かめるために質問をする。
私は、『ペン』を指さしながら言った。

「秘密兵器ではないけど、それなりに強い武器……ってこと？」
「そういうことだね。今回の相手はファヴニール。正攻法じゃそう簡単には倒せないし、それに僕も負けたくないからね」
管理人は、そう言うと微笑みを浮かべて私の頭を撫でた。
……うん、やっぱりこの人も普通の人間……人間？じゃないよね。だって、普通なら絶対に勝てるはずがない相手に、勝つ気満々だもん。
そして、ドが付く素人の私でも分かるほどに、この人の戦い方は異質だった。
まるで、戦いが始まる前から結果が見えているような、そんな余裕を感じさせる。
だからこそ、私は思ったのだ。
この戦いが終わったら、管理人と話をしようと。
今のままでは、ただ他の皆より強いだけのサーヴァントにしか見えない管理人だけど、もしかしたら私たちと同じような考えを持っているかもしれないから。
もしかしたら、管理人さんが抱えていた悩みや苦しみを解決できるヒントがあるかもしれない。
そんなことを考えつつ、私は再び管理人に話しかけた。
今度は違う話題で。
「ねぇ管理人さん。好きな食べ物ってある？」
「食べ物？　うーん……基本的にどんなものでも好きだよ？　ああ、最近はチーズケーキかな。最近になって、ロマンと一緒に食べたのが非常においしかったんだ」
そんな話をしながら、私たちは目的地へと向かっていった。

# 進軍

「はぁっ！」
『『灼火』『螺炎』』
先行するクーニキと管理人さんによって薙ぎ払われていくワイバーンたち。
彼らは、クーニキの槍撃と管理人さんの放つ魔術で次々と穿たれ、燃やされていき、あっけなく骸をさらすこととなっていった。
それを眺めながら、私は呟いた。
「……もう、管理人さん一人でいいんじゃないかな？」
「先輩……いくらなんでもそれは……」
「いや、冗談だよ!?　本気にしないでマシュ！」
『ふぅ……今の光景を見ると洒落にならないからね……』
「ダ・ヴィンチちゃんまで……。あ、そういえば」
私はそこで思い出した。
先ほどの管理人さんの言葉。
「ロマンと一緒に食べたのが美味しい」と言っていたチーズケーキ。
私は、その言葉を少しだけ聞いていて気になっていたことがあった。
「ねぇ、ダ・ヴィンチちゃん。そっちにチーズケーキって残ってる？」
『ん？　いや、こっちにはないね。でも、それがどうかしたのかい？』
「いや、さっき管理人さんが言ってたんだけど、ロマンと一緒に食べたのが美味しかったって」
『ほう？　それってつまり、管理人君と話をする口実を作るためにチーズケーキを使いたいのかい？』
「ん～……そうだね。だって今の私って、管理人さんのこと、すっごい人としか分かっていないんだもん。もっと色々と知りたいんだよ」
『なるほどね。確かに、マスターとしてサーヴァントのことを知ろうとするのは当然の行為だ。特に君は、彼の正体を知ったところで何も変わらないだろうし』
「え？　どういうこと？」

『おっと、第二波に紛れてサーヴァント反応がある。気を付けてくれ』
私は、ダ・ヴィンチちゃんの言ったことがよく分からなかったけど、今は戦闘中だということを思い出し、意識を切り替える。
そして、目の前の敵に集中することにした。
「……殺してやる……殺してやるぞ！　誰も彼も、この矢の前で散るがいい！」
「気を付けてください！　彼女の真名はアタランテです！」
現れたのは、獣のような耳を持った金髪の女性だった。
彼女は弓を構え、こちらに向かってくる。
その速さは先行しているクーニキに匹敵していた。
しかし、それでも管理人さんの方が速いようだ。
『氷壁』
管理人さんがそう唱えると、突然地面に大きな魔法陣のようなものが出現し、そこから巨大な氷の壁が現れた。
それは、アタランテと呼ばれた女性の攻撃を防ぎ、そのまま押し返した。
「小癪なっ!!」
だが、それでも女性は諦めず、すぐに次の矢を取り出し、強烈な一矢を放つ。
その一撃が、管理人さんの顔の横を通り過ぎていった。
「おぉっと。相変わらず強烈だなぁ……」
「オォオオオオオオオ!!」
しかし、管理人さんはその攻撃を難なく回避すると、すぐさま反撃に移った。
管理人さんの手にはいつの間にか剣が握られており、それを振り下ろす。
だけど、相手もさるもの。
女性はすぐに後退することで、管理人さんの斬撃を回避した。
そして再び距離を詰めようとする管理人さんに対して、女性が弓矢を構える。
直後、まるで大砲のような轟音と共に矢が放たれた。

「おっとっと……」
しかし、管理人さんもただではやられない。
彼は持っていた剣で、その矢を斬り払うと、再び距離を取った。
そんな攻防を繰り返す二人を眺めながら、私は思った。
(やっぱり、管理人さんは強いな……)
正直に言えば、管理人さんの強さは異常だと思う。
管理人さんを除けば最速であるクーニキに匹敵する移動速度を持つ相手サーヴァントを相手にしてもなお、余裕を持って戦っている。
それどころか、私とマシュ、皆のサポートを必要としていない。
おそらく、管理人さんはあのサーヴァントよりも速く動けるのだろう。
だからこそ、管理人さんが負ける姿が全く想像できなかった。
「っと、戻ってきたぜ」
「あ、お帰りなさいです。クー・フーリンさん」
「こっちは不完全燃焼だがな。管理人の野郎、俺の出番を持っていきやがって」
ワイバーンを殲滅し終えたクーニキが戻ってくる。
どうやら、管理人さんの戦いを見て、自分も戦いたかったらしい。
「ま、俺達はこの後の大仕事がある。奴さんは管理人に任せとけ」
クーニキはそう言うと、管理人に視線を向けた。
管理人は、未だにアタランテと互角の戦いを繰り広げている。
どんなに矢を放とうとも、管理人さんが魔術で迎撃もしくは防御していた。
「いつもの技の冴えがないよアタランテ?」
「死ね!　死ね!　死ねぇぇぇ

させてもらうよ」
「ガッ――！」
管理人さんが、アタランテに接近する。
そして、彼女が反応できない速度で、鳩尾に拳をめり込ませた。
その瞬間、彼女の中で何かが爆発するような衝撃が迸る。
直後、彼女の身体から力が抜け落ち、その場に崩れ落ちた。
「ふぅ……」
それを見た管理人さんは、静かにため息をつく。
そして、倒れ伏したアタランテの額に手をかざすと、何かを唱え始めた。
その直後、彼女の体が光の粒子となって崩れていった。
「これでよし……っと。じゃ、進もうか？」
「了解しました！　先輩、行きましょう！」
「うん！　分かった！」
こうして、私達はアタランテとの戦いを終えたのだった。

# 邪竜失墜

「こんにちは。もう一人のジャンヌ[私]」
「……」
アタランテとの戦闘を終えてしばらく進むと、今度は『魔女』が待ち構えていた。
その顔には、管理人さんの質問によって動揺した時の表情はない。
すでに、戦う準備は整っているようだ。
「おや？　どうやらいろいろと吹っ切れたようだね？　それなら、遠慮なく行かせてもらおうかな」
管理人さんがそう言って前に出ると、『魔女』は両手を広げた。
「来なさい。貴方達は聖杯を求めている。ならば、この私を倒していくしかありません」
「もちろんそのつもりだよ。僕達の目的は、あくまでも聖杯によって維持されている特異点の修復だ。君を倒して、先に進む」
「フッ！　来なさいファヴニール！」
管理人さんの言葉を聞いた『魔女』は微笑むと、腕を掲げてファヴニールを呼び寄せた。
直後、凄まじい魔力が吹き荒れると共に巨大な竜が現れる。
それは以前見た時と同じ、圧倒的な威圧感を放っていた。
「うわぁ……。相変わらずデカイなぁ……」
「はい……！」
「さて、作戦通りに立香君達はサーヴァントと『魔女』を。ジークは僕と一緒にファヴニールを」
「了解した！」
私たちから離れて、管理人さんとジークフリートがファヴニールへと向かっていく。
それと同時に、他の皆も動き出した。
マシュが私の前に陣取り、大盾を構え守護する。
管理人さん曰く「守ることに関して言えば『無敵』」であるゲオルギウスさんはマシュの隣に立ち、剣を構えて守ってくれる。

他の皆は、事前に打ち合わせしていた通り、『魔女』とそのサーヴァントに向かっていった。
その後ろ姿を見て、私は思う。
（皆、頑張って……！）
私が戦えない以上、私が出来るのはこの身を守ることだけだ。
だから、私は必死に皆を応援する。
皆で無事に帰ってこれるように祈りながら。

～～～

ジークフリートが空中で一回転し、渾身の力を込めた一撃を叩き込む。
それを喰らったファヴニールは、悲鳴を上げて地面に落下した。
「まだだ！」
そのまま大上段に剣を構え、もう一度斬りつける。
その攻撃で、ようやくファヴニールにダメージを与えることが出来た。
だが、相手は『邪竜』と呼ばれる程の力を持つ怪物。
この程度で倒せるはずもない。
――グルゥオォオオ！
雄たけびを上げ、再度飛翔するファヴニール。
しかし、今度は先程よりも高い位置で滞空している。
「来るか……」
それを見た管理人は呟くと、ファヴニールに対して迎撃態勢を取った。
背負っていた豪華な大剣を引き抜き、目に見えるほど膨大な魔力を込めていく。
まるで乾いたスポンジのように魔力を吸収していく大剣は、やがて黒い光を放ち始めた。
「飛べ！」
気迫の声と共に大きく振り上げられた大剣から質量を伴った膨大な魔力が放たれる。
その様は、魔力の色も相まって『黒いインク』の濁流であった。
しかしその勢いは緩やかなもので、ファヴニールはやすやすと回避してしまう。
……が。
「『弾けろ』！」
――グォッ!?
管理人が短く告げた言葉に呼応するように、魔力が細かく弾け、ファヴニールを襲った。
全身をさらに黒く染めあげられ、しかし痛みなどないことに困惑す

るファヴニール。
いら立ちをあらわにして、大きく息を吸い込み、ブレスの構えをとった。
しかし、
「『墜ちろ』！」
管理人が言葉を発した直後に、異変は起こった。
――グォオオオオオオッ!?
ビキッという音と共に、ファヴニールの翼があらぬ方向へと捻じ曲がり、引きちぎられた。
空を飛ぶための翼を失ったファヴニールはそのまま大地へと落下していく。
そして、
「『砕け散れ』」
無慈悲な一言と共に、全身に付着した魔力がファヴニールを飲み込んだ。
――ギャアアアアアッ!?
激痛に苦しんでいる叫び声と共に、ファヴニールの全身は粉々に粉砕され、その姿はただの肉塊へとなりかける。
しかし、あくまで『なりかけた』だけであって、戦う力は残っていた。
だが、
「ジーク！」
「ああ！　はぁ！」
管理人の呼びかけに応え、ジークフリートは大剣を天高く掲げた。
すると、剣身に込められていた魔力が一気に解放される。
解放された魔力は渦を巻きながら剣身から伸び、光の柱を形作った。
「『縛れ』」
管理人が静かに告げると同時に、ファヴニールを蝕んでいたインクが一時的に離れ、今度は体を縛り付けた。
これで完全に動きを封じることに成功。

あとは、ジークフリートの大技によって止めを刺すのみだ。
――グ……ルゥウ……。
苦悶の表情を浮かべながら、それでもなお抵抗しようとするファヴニール。
だが、その体ではどうすることも出来ない。
ジークフリートも、そんなことは承知の上だった。
「――邪悪なる竜は失墜し」
だからこそ、絶対に逃がさないため、彼は己が持ちうる最強の宝具を放つ。
「世界は今、洛陽に至る――！」
かつてファヴニールを討ち倒し、後世に語り継がれた伝承により竜殺しの力を手に入れた魔剣。
その名は――
「撃ち落とす！　幻想大剣（バル・ムン）・天魔失墜（クス）!!!」
ジークフリートが剣を振り下ろすと同時に、光の奔流がファヴニールを襲う。
その一撃は、今まで彼が放ったどの攻撃よりも苛烈で、強力であった。
――グルゥオォオオアア!!
断末魔を上げながらも、ブレスを吐こうとするファヴニール。
しかし、
「悪役は悪役らしくヒーローに倒されてほしいんだけどなぁ……」
管理人が操作したインクによって拘束された。
これにより、ファヴニールはもう何も出来ず、ジークフリートの攻撃を受けるしかない。
「はあぁぁあ！」
雄たけびとともに放たれた一撃はファヴニールを跡形もなく消し去り、戦いは終わりを告げる。
こうして、2人の活躍により、この特異点最大の壁であったファヴニールは息絶えたのであった。

第一特異点、その終幕が近づいていく……。

## 『魔女』の正体

「……敗北だ。これで我が身の呪いも解ける。……貴方達に感謝を。そして、愛しの王妃に謝罪を。申し訳ありません、王妃よ。我が過ちを許したまえ――」

「……ええ。許すわデオン。貴女の罪を許しましょう」

「ふぅ……音楽家を戦わせないでほしいんだけどなぁ……」

バーサーク・セイバー――シュヴァリエ・デオンがマリーさんに謝罪の言葉を残しながら消えていく。

彼女は、私達が戦った敵の中でもかなり特殊な存在だろう。

彼女からは殺意を感じなかったし、何より、彼女がジャンヌさんやゲオルギウスさんといった英霊達に敬意を払っているのは明らかだった。

……とはいえ、『魔女』に操られている以上、倒さなければならなかった。

そして、クーニキが相手をしている方――ヴラド三世も倒されていた。

「――ここで、終わりか。余の夢も、野望も、またも潰えるか……」

「おうおう。随分と弱気じゃねぇか。あれだけの威勢はどこいった？」

「それはそれ、これはこれだ。今の余はただの亡霊にすぎない。聖杯の力によって望まぬ殺戮をさせられていた哀れな男に過ぎん。それに、どうせなら最後は正義である者の手で死にたいものであろう？さらばだ……」

そう言い残して、ヴラド三世は静かに消滅した。

……結局、彼の真意は分からずじまいになってしまったけど、今は考えても仕方がない。

それよりも、目の前の脅威に集中しなければ。

「マスター、大丈夫ですか!?」

「うん、なんとか……。皆は……？」

「あとはエリザベートさんと清姫さんが相手をしているカーミラだけ

ですが……」
「多分勝てそうだね……なら、私たちは……！」
「はい！　このまま先へ進みます！」
マシュの言う通り、私たちにはまだまだ余裕がある。
ならば、先に進もう。
そう思っていた時だった。
「え――」
私の横を、ものすごい勢いで通り過ぎる『誰か』の姿があった。
その際、紅い液体が飛び散り私の顔にもかかる。
その正体は、すぐに分かった。
――血だ。
つまり、その人物は負傷しているということ。
誰が……？
思わず振り返ると、そこには……。
「くっ……！　まさか、ここまでとは……！」
ジャンヌさんが苦悶の声を上げながら立っていた。
全身はボロボロになり、額から大量の血を流している。
その姿は、満身創痍という言葉がよく似合っていた。
「ジャ、ジャンヌさん!?」
「っ！　待ってください先輩！」
親しい人の姿を見て、私は慌てて駆け寄ろうとした。
それをマシュが制止するが、私は振り払ってジャンヌさんの下へと向かおうとする。
だが、
「きゃあっ!?」
ゴウッと、突然発生した炎の壁が行く手を阻む。
その発生源は当然、
「そう簡単に行かせるもんですか」
『魔女』だ。
彼女はジャンヌさんの傍に立ちながら、こちらを睨みつけてくる。
睨みつけられた瞬間、全身の鳥肌が立った。

恐怖心で体が震えそうになるが、それでも必死に抑え込む。
それでも、『格』の違いともいえる圧倒的なプレッシャーに押しつぶされそうになった。
（これが……『魔女』の本当の力……！）
以前、ダ・ヴィンチちゃんが言っていた。
『彼――管理人はね、神代の英雄以上の力を持っている。格的には『神』よりも上だね。普通なら勝てないよ。でも、今のサーヴァントとして召喚された彼なら、聖杯を持った状態で戦えば勝ち目はある』
それが、今の状況。
管理人さんと同程度の相手が、ジャンヌさんを殺そうとしている。
私ひとりじゃジャンヌさんを助けられない。
かと言って、皆を呼んでも勝てるかどうかわからない。
そんな絶望的な状況の中、ふと声が聞こえた。
「『突風』」
「なっ！」
「きゃあっ！」
聞き覚えのある声と共に、ジャンヌさんを襲おうとしていた『魔女』の周りに突風が吹き荒れ、私たちを隔てていた炎の壁も吹き散らされる。
そして、ジャンヌさんがこちらに吹き飛んでくる。
「え、えちょまっ!?　へぶっ!?」
「きゃっ！　だ、大丈夫ですか立香さん!?」
咄嗟に受け止めようとしたのだが、ジャンヌさんが私を巻き込んで倒れてしまう。
……ちょっと恥ずかしい。
そして、ジャンヌさんを抱き留めたまま顔を上げると、
――そこには、管理人さんが立っていた。
「あ……」
「無事か、ジャンヌ？」
「えぇ、なんとか。助かりました兄さん。それと、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。『魔女』に負けてしまい……」

「気にするな。あれは仕方のないことだ。それより……」
管理人さんが私達を見て、それから周りを見渡す。
そして、少しだけ顔をしかめた後、ゆっくりと口を開いた。
「ふぅ……思っていた以上に聖杯の力が強いみたいだな。僕がいない間にここまで被害が出ているとは思わなかった……」
「あの、『魔女』は……」
「ああ、任せてくれたまえ。気になっていたこともあるからね」
そう言って、管理人さんは前に出る。
すると、今まで無表情だったはずの彼が、笑みを浮かべながらこう言った。
「ようやく話せるね。聖杯によって生み出されたジャンヌの――『贋作』君？」
「……ッ！」
その言葉に動揺をあらわにする『魔女』。
それとは対照的に、管理者さんは穏やかな口調のまま続けた。
「さて、まずは状況を整理しようか。元々、この特異点は君という異物から始まった……のではない」
「え……？」
管理人さんの言っていることが理解できず、思わず声を漏らす。
だが、管理人さんは構わず語り続ける。
「ジャンヌを自称する君は、フランスへの復讐のために聖杯の力で蘇ったと言っていた……。しかし、当のジャンヌはそんなものなどこれっぽっちも持っていない。なら、億分の一の確率でジャンヌの意識が現世に現れ、聖杯に願うとしても、復讐のための復活はないだろう。むしろ、自主的に消滅することを選ぶだろうし、ジャンヌ一人の力では『抑止力』を振り切ることなどできない」
そこで言葉を切った管理人さんは、今度はジャンヌさんの方を向いて言う。
「ならば、なぜここにジャンヌ・ダルクを名乗る者がいるのか？　答えは簡単だ。『ジャンヌ・ダルク』は一人ではなく二人いるからだ」
「え……？」

「本来、サーヴァントを召喚するとしたら、原則として、同じサーヴァントは2体召喚されることはない。それは僕だって同じこと」
「……」
「だが、例外はある。それが今回だ。おそらく、『君』が召喚される前に別の誰かが召喚され、その誰かが願ったのだろう。……『フランスを憎むジャンヌ・ダルク』をね」
管理人さんの言っていることは以前にも聞いていたから分かる。
優しいジャンヌさんが国を滅ぼそうとするなんてありえないと。
だから、ジャンヌ・オルタさんが『偽物』である可能性は確かにある。
でも、それだけじゃない。
もう一つ、管理人さんには何か確信があるような気がした。
「『君』はね、僕の知っているジャンヌとは違うんだ。僕の知っているジャンヌは、食べるのが好きで、誰であっても無条件に愛してしまうほど底抜けのお人好しで、そして何より、自分のことを『ただの小娘』だと認めながらも、『聖女』であろうと努力し続けた人なんだ。少なくとも僕はそう信じている」
「……」
「だからこそ、君のしていることを看過するわけにはいかない。彼女は、フランスの勝利を願って戦った英雄であり、聖女だ。……人々を虐殺する『魔女』ではないんだよ。ジャンヌ・『オルタ』君……」
言葉の最後を、はっきりと強調しながら告げる。
すると、それまで黙っていた『魔女』が口を開いた。
「……あなたに、私の何がわかるっていうんですか？」
「わからないよ。正直なところ、僕は『君』のことをよく知らない」
「なら、どうしてそんなことが言えるのです!?」
「簡単なことだ。『君』は、僕が知るジャンヌよりも弱い」
「っ！」
「もちろん、単純な戦闘だけを見たらそうではないかもしれない。だけど、君がジャンヌより劣っていることはたくさんある。優しさ。愛嬌。勇気。そして……心の強さ」

「……っ！」
「君は強いと思っていたかい？　……いや違うな。思いたかっただけだ。君は『誰か』の願う感情のままこの国を滅ぼそうとする、まるで『操り人形』のようでありながら、それでいいと思っている節があった。自分はジャンヌであると思い、自分という我を出しながらも、悲惨な最期を遂げたジャンヌならこう思うだろうと想像して行動していた」
「……さい」
「はっきり言おう。君はジャンヌではない。そして、ジャンヌも君のようなことは望んでいないはずだ」
「……うる……さい……！」
「君は――」
「うるさいって言ってんでしょうがぁ!!」
叫びと共に放たれた炎を、管理人さんは軽々と避ける。
「ふぅ……」
「はあ、はあ……」
服の裾に燃え移った火を払いながら一息を吐く管理人さんとは対照的に、大きく肩で息をする『魔女』……いや、『ジャンヌ・オルタ』。
彼女の顔は怒りに染まっており、今にも爆発しそうだった。
そして、それを見た管理人さんは再び口を開く。
「さて、ここからが本題だ。君は軽く『解析』したところ、肉体情報に関して言えばジャンヌと瓜二つだ。ただ、その肉体に残る経験がまるで『生後十数日』程度しかない」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
管理人さんの言葉を聞きたくないとでもいうかのように、旗を振り回してあたり一帯を火の海にする『オルタ』。
そんな彼女を見ながらも、管理人さんの口調は一切変わらない。
淡々と事実を告げた。
「肉体だけは大人で、経験は赤ん坊。精神的にも僕の追及で取り乱す程度には脆い。ジャンヌはその精神力から英霊として呼ばれたといっても良い。だが、今の君はまるで癇癪を起こす子供のようだ」

「君は、僕がジャンヌと交わした約束を思い出せなかったね？　なにせ、ジャンヌが子供の頃――君の経験の中には含まれていない時期に交わしたものだからだ」
「うぐっ……！　あああああっ!!」
「これらから察するに、君は――」
再び暴れ出した彼女に、管理人さんは動じることなく話し続ける。
そして、最後に一言だけ言った。
「――君は、『ジャンヌ・ダルク』ではないからだ」
管理人さんの口から、その言葉が出た瞬間。
「……」
今まで、怒りの表情を浮かべていた『オルタ』の顔から、一切の感情が失われた。
いつの間にか私の周りにはみんなが集まっていて、『オルタ』を警戒している。
でも、『オルタ』を攻撃をするという訳ではなく、管理人さんに任せていた。
「……な、んで……」
「……」
「なんでなんでなんでな

「……『オルタ』」
「えっ……？」
泣き続けていた『オルタ』を、そっと抱きしめる管理人さん。
それは、本当に優しく包み込むような抱擁で、見ているだけで安心してしまうほど温かいものだった。
「君がしてきたことは許されることではないし、僕だって許す気もない」
「……っ！」
「でも、君は『そうあれ』と願われてしまった不幸な子だ。なら、それを叶えるために頑張ってきたんだろう？　だったら、もういいじゃないか。誰かの願いのために頑張るのは、これで終わりにしよう」
「……う、うぅ～!!」
『オルタ』は、管理人さんの言葉を聞いてまた大声で泣き始めた。
その涙には、憎しみや悲しみだけじゃなく――きっと、色んな感情が含まれていると思う。
そんな二人を見て、私達はただ見守ることしかできなかった。

第一特異点　終幕

「すぅ……すぅ……」
「眠っているね。まるで小さな子供のようだ……」
管理人さんの腕の中で眠る『オルタ』は、とても安らかな顔をしていた。
そして、そんな彼女の頭を撫でながら言う管理人さんも穏やかな笑みを浮かべている。
「……この子はどうなるんですか？」
「このまま眠らせてあげよう。この子は殺戮をしたいわけじゃない。ただ自分の存在意義を証明するために暴れていただけだったんだ。だったら、これからは自分の為に生きていけば良い」
「……わかりました」
私が質問すると、管理人さんはすぐに答えてくれた。
多分、彼の中ではある程度予測がついていたんじゃないかな？
「……」
「あぁ、大丈夫だよ。僕は彼女の存在を否定するつもりはない。そもそも、彼女は『ジャンヌ・ダルク』であって、ジャンヌ・ダルクではない。ただ、その記憶を持った別人なんだ。だから、彼女という人格はちゃんと尊重するつもりさ」
「はい。ありがとうございます」
私の視線に気づいたのか、管理人さんは少し慌てながら説明してくれた。
そして、彼は『オルタ』のことをジャンヌ・ダルクと呼んだ。
それって、どういう意味なのかな？
「さて、まずはこの子を起こさないとね」
「起こす？」
「うん。彼女が持っているであろう聖杯を渡してもらわないとね。でも、今のままだと彼女にとって不都合なことがたくさんあるから、ちょっと手を加えないといけないけど」
「……あの、一体何をするんですか？」

「あぁ。それは――」
「ううっ、んっ……」
管理人さんが言葉を続けようとして、そこで意識を失っていたはずのジャンヌ・オルタが起き上がった。
「あれ、ここは……」
「おはようオルタ。気分はどうかな？」
「ふぇっ!?　お、お兄さま!?　どうしてここに!?　それに、その、私は何故こんな格好を……」
ジャンヌ・オルタは管理人さんの顔を見ると驚いていたが、管理人さんに膝枕されていることに気が付いて慌てて起き上がろうとした。
でも、すぐに力が抜けてしまったのか、そのまま再び倒れ込んでしまう。
「無理しないでいいよ。今は、ゆっくりと休んでほしい」
「あっ……」
「君の体はそうでなくとも、精神の方はかなりボロボロだ。しばらくはまともに動けないだろうね」
管理人さんは、優しく微笑みながら言った。
その表情からは、心の底から彼女を心配している気持ちが伝わってくる。
「さて、その体勢のまま聞いてくれオルタ。君の状態を正直に言うと、英霊の座に登録されていないハリボテの状態だ。そんな君は霊基の消失と同時に存在も消滅してしまう。すでに記録されているジャンヌ達とは違って、君はこの異常事態に生まれてしまった『イレギュラー』な存在なんだよ」
「そ、そんな……」
「まぁ、今の状態なら特に問題はないんだけどね」
「えっ？」
管理人さんの言っていることの意味がわからず首を傾げる私。
だけど、管理人さんはそのまま話を続けた。
「簡単に言えば、今のオルタの体は一時的に存在しているだけの仮初めの存在だ。本来であれば、このまま消え去るはずだったところを特

異点という普通ではない状況で。そして、君が目覚めるまでの時間を使って、君の存在を補強するために処置を施したんだ」
「ファッ!?」
何それ!?
この短時間でそれだけのことを!?
「驚くのも仕方がない。普通ならこんなことできないさ。『魂の物質化(第三魔法)』を疑似的に再現しているからね。でも、これくらいなら僕にもできるんだ」
「えっと……」
「君の存在は固定された。ジャンヌ本人ではなく、ジャンヌの『贋作』でもなく、ジャンヌではない『別人』として『書き換えた』。だから、もう大丈夫だよ」
「……っ！」
管理人さんの言葉を聞いた瞬間、ジャンヌ・オルタの目が大きく見開かれた。
そして、そのまま彼女は管理人さんにしがみついて泣き始めた。
「ああっ～！　うわあぁ～んっ!!」
「よしよし。怖かったよね。辛かったよね。よく頑張ってきたね」
「うぅ～!!　ひぐっ……、ひっく……」
まるで子供のように泣くジャンヌ・オルタを、管理人さんは優しく抱きしめる。
その姿はまるで、お母さんみたいだった。
「これで、一件落着……なのかな？」
「おそらくは……」
「はぁ～……。なんか、一気に疲れちゃった……」
「同感です……」
私とマシュはその場に座り込みながら大きく息を吐いた。
「あははっ、おつかれ」
「笑い事じゃないですよぉ……」
「まさか、こんな結末になるとは思っていなかったからね。笑いたくもなるもんよ」

そんな私たちの様子をマルタさんが苦笑しながら声をかけてくれた。
「ありがとうございます」
「いえ、こちらこそ。あなたのお陰でこの特異点を解決することができました。感謝します」
「ううん。私は何もしてないよ。みんなのおかげで倒せたんだよ」
「それでも、アンタがいたから……アンタがあいつを連れてきてくれたから、皆無事だったのよ」
「そうだね。本当にありがとう」
「うん。どういたしまして」
改めて礼を言うマルタさんに、私は笑顔で応えた。
「さて、これからどうしようかなぁ……」
「そうね。とりあえず、カルデアに連絡を取って、それから……」
『こちらも聞いていたよ。第一特異点の攻略お疲れ様。大変だっただろう?』
「ダ・ヴィンチちゃん!」
私が悩んでいると、投影された映像からダヴィンチちゃんの声が聞こえてきた。
「はい。そちらの方は?」
『こちらは無事に終わったよ。帰還の準備も整っている』
「わかりました。管理人さんに伝えてきますね」
「お願いね」
「はい」
私はすぐに管理人さんたちのところへ向かった。
「管理人さん。カルデアから連絡が来ています」
「あぁ、わかった。……と、言いたいんだけど、まだあと一人残っているよ」
「一人……?」
「うん。ほら、そこにいるよ」
管理人さんはそう言って、誰もいないところを指差した。
周囲は、サーヴァントの皆の戦闘で地盤がめくれあがっており、酷

い有様だ。
　しかし、そんな状況とはいえ、敵対していたサーヴァントはオルタだけのはず。
　どうしたんだろう……？
「出てきなよ。ジル」
「……やはり、貴方にはこの程度の隠蔽は見破られてしまいますか……」
　管理人さんの言葉に応じるように、めくれ上がった地盤の陰から這い出してきた人物。
　それは、本を持った男性だった。
「なっ!?　どうしてここに!?」
「ジルッ！　あなたが、黒幕なのですか!?」
「はい……お許しくださいジャンヌ。この特異点は私の我がままによって引き起こされたのです」
「どういうことですか？」
　そう聞かれたジルと呼ばれた男性は、ゆっくりと語り始めた。
「私はとある者によって召喚されたサーヴァント。この特異点を形成及び維持することを命じられた『人類の敵』です。そして……聖杯を所持しているのは『ジャンヌ』ではなく、この私です」
「やはり……。オルタがマスターではなく、君がマスターなのか」
「そうです我が友人よ。私が召喚されたことでこの特異点は始まりました」
「……ちょっと待って。それじゃあ、オルタは何のために現れたんですか!?」
「簡単な話ですよ。ジャンヌ・ダルクという存在を否定したこの国への復讐という私のわがままが『ジャンヌ』を召喚した理由です。愚かですよね。ジャンヌはそんなことを望んでいないというのに……」
「……」
　自嘲するように笑うジルさんに対して、管理人さんは何も言わなかった。
「ですが気づいたのです。彼女は本物ではない。道しるべを持たない

迷い子のようだと……そんな『望まれざる子』を生み出してしまったことに、気づいてしまったのです」
「……そうか……」
「だからこそ、私はここで消え去りたかった。ジャンヌの願い、そして、貴方が受け入れた事実を踏みにじってしまった私など、存在する価値はないと思ったから……」
「それで、今この場に出てきたんですね。自分が消えるために……オルタを連れて行ってもらうために……」
「ええ。私が消えれば、この世界は消える。そうなった時に起きるであろう『ジャンヌ』の未来を予測した上での行動です」
「でも、それは……」
「わかっています。これは私の身勝手な行動です。ですが、このままでは『彼女』は救われない。ならば、せめて最後に救いを与えたかった……信頼のできる管理人……貴方の手によって……」
「……」
管理人さんは黙ったまま、ジルさんの話を聞いていた。
「ありがとうございます……。これでようやく私は楽になれます。私の過ちを……この世界を救ってくれて……本当に感謝しています」
「いいよ別に……これが今の僕の仕事だからさ……」
「……そうでしたね。それでは、私は消えます。貴方達のこれからに祝福を……」
「うん。ジルこそ、今度こそ間違えないように」
「ご忠告、痛み入ります……ジャンヌ……オルタ……私のわがままに付き合わせてしまい、申し訳ありません……」

管理人さんとジルさんは、短く言葉を交わすとジルさんは光の粒子となって消えていった。
その光景を見て、ジャンヌさんもオルタも涙を流していた。
こうして、第一特異点の戦いは終わりを迎えた。

# 第一特異点後の幕間
## 第一特異点からの帰還

第一特異点の終幕。
この人理焼却という異常事態の七分の一が解決されたことを意味する。
フランスを起点に発生した第一特異点は、ジャンヌさんの付き人であったジルさんの消滅によって幕を閉じた。
これにより、人理修復は一歩前進した。
しかし、まだ問題は残っている。
それはオルタの存在だ。
「影法師」と呼ばれるサーヴァント達とは違い、そもそも本来の歴史には存在しない文字通りの『偽物』。
普通のサーヴァントのように退去してしまうと、存在は残らずに消えてしまう。
そこで管理人さんはオルタの存在を『固定化』し、複製元であるジャンヌさんとは別の存在『ジャンヌ・オルタ』として存在を確立させたとのことだ。
正直、よくわからないけど、管理人さん曰く、ジャンヌさんと大本を同じにしているけれども、違う存在として同時に存在させているらしい。
まぁ、簡単に言えば「ジャンヌさんと同じ見た目をした別人にした」ということだろう。
つまり、オルタはもうこの世界から消えたりしない。
これからも、この世界で生き続けるのだ。
『変な出会い方になってしまったし、いろいろと困ることを持ってきてしまったけど、それでも僕は君を受け入れるよ。オルタ、改めてよろしくね』
『……う、うん……よろしく、お願いします……お兄さま……』
管理人さんがそう言うと、オルタは照れくさそうにしてそっぽを向

いていた。
オルタがしてきたことは許されることではないし、裁かれることだとは思う。
でも、彼女は見た目に似合わず子供のように儚くて幼い存在だ。
まだこれからがある。なら、せめてそれまでは一緒にいてあげたいと思う。
管理人さんも同じ気持ちなんだと思う。
管理人さんは優しいから、きっと、そういうところまで考えて、この結論に至ったんだろうな。
私には真似できないな……。
その後、現地で協力してくれたサーヴァントの皆が退去を始めた。
『じゃあね、子イヌ？　私の知っている中で一番の子ほどじゃないけれど、悪くない戦いぶりだったわよ』
『それでは安珍様、またお会いしましょう。私は些か嫉妬深い性質なので……』
エリちゃんときよひー。
『マスター。短い間であったが、俺を頼りにしてくれて感謝する。もし喚び出してくれるのなら力になろう』
『私も力になりましょう。管理人がいるのなら喚び出されるのは近いでしょうから』
ジークフリートさんにゲオルギウスさん。
『管理人のことだからどうせ私も喚ぶでしょ。その時は私も力になってあげるわ』
マルタさん。
『立香！　貴女と出会えて楽しくてうれしかったわ！　またいつでも喚び出してね？』
『ようやくお役目ゴメンか。……なにはともあれ、いい指揮だったよ立香。実に、実にやりがいのある仕事だった』
マリーさんにモーツァルトさん。
みんなそれぞれ一癖も二癖もある人達。
この特異点だけでもこれだけの人と出会えたのだ。

この先、もっといろんな人と出会うことになるのかな……。
そして、最後に残ったのはジャンヌさんだけだった。
他のサーヴァントは全員退去してしまった。
カルデアで召喚された皆もカルデアへと戻っている。
そんな中、ジャンヌさんは崩壊したオルレアンにて、管理人さんと二人だけで残っていた。
誰かを待つように……。
「先輩、特異点を維持していた聖杯を回収したことで特異点が崩壊していきます。私達は先に戻っていましょう」
「管理人さんは……大丈夫そうだね。うん、行こう」
マシュに促され、私達は管理人さん達を残してその場を後にした。

～～～

しかし、ジャンヌは優しく微笑みながら言葉を続けた。
「ですから、その前にひとつだけ伝えさせて下さい。私達がここに戻ってきたことを信じてくれて、嬉しかったです。だから、ありがとう」
「……はい。お二人の無事を知って、本当に良かった」
涙を必死にこらえながら、ジルは答える。
それを見ていた管理人は口を開いた。
「ねぇ、ジル。君はこれからどうするの？」
「え？　それは……わかりません。国は壊滅状態、どこへ行こうと自由だと思います」
「そうだね……」
悲し気に目を伏せる管理人。
すると、何かを決意したような目つきで顔を上げた。
「なら、この言葉だけ覚えていてくれないかい？」
「それは……？」
「……『僕達は恨んではいない。君のことも。残念だとは思っているけれども、誰かのためになれたなら本望だ』」
「！」
管理人がそう言うと、ジルは驚いた顔をして管理人を見た。
しかし、管理人も真剣な眼差しでジルを見つめている。
ジルはゆっくりとうなずき、答えた。
その目に迷いはなかった。
「分かりました……。貴方達は私にとって大切な友人であり恩人。この身に代えても忘れないと誓いましょう」
「うん。信じてるよ、ジル・ド・レェ。君ならきっと、僕のことも許してくれるってね。それと……ありがとう。こんな『愚か物』の……ジャンヌを助けられなかった物の言葉を聞いてくれて」
「フフッ……貴方が愚か者なら、私は何だというのですか……」
ジルはそう言って苦笑した。
そして、管理人に近づき、肩に手を置いて語り掛けた。
まるで、親友同士のように。

互いに信頼し合う友として。
ジルは涙を流しながら言葉を紡ぐ。
その姿は、懺悔して消えていったサーヴァントのジルと似ていた。
「さて、それでは僕達はいくよ。ジル、この世界……『悪夢』は覚める。だけど、本当の『夢の終わり』まではまだ先なんだ。そのためにも、僕達は頑張ってみるつもりなんだ」
「また、ですか……貴方達はいつも遠くへと行ってしまう。この世界で起きた出来事とは比較にならないほどの『未来』を生きていくのでしょうね……」
「うん……。だから、またいつか会おうね。その時は『あの時』のように楽しく話せるといいなぁ」
「貴方達の隣とは、恐れ多いですね……」
管理人の言葉にジルは微笑む。
そして、時間が来た。
「さて、それでは僕達は行くよ」
「ええ兄さん。ジル、貴方に主の加護があらんことを……」
別れの言葉を残し、管理人は霊体化してその場を後にし、ジャンヌは退去した。
聞こえるはずのない世界が崩壊する音の響くオルレアンの中心に一人残されたジルは呟いた。
「……ははっ……また、残されてしまいましたか……っ！」
崩壊した街に、一人の男の泣き声が響いていた。

～～～

あれから数日、初のレイシフトからの初の帰還を経た私達は、すぐさまバイタルデータをチェックされた。
結果は……両者とも異常なし。
もちろん、私が死ぬわけもなく、マシュも無事だった。
それでもロマンはひどく心配してくれたようで、しばらく安静にしていろと言われたほどだ。
まぁ、無理もない。初めてのレイシフトで何度も死にかければ誰だって心配するだろう。
ただ、私にはやるべきことがある。
人理修復は始まったばかり。
管理人さんという特級のサーヴァントがいるからこうも簡単に進んでいると思えているだけで、管理人さんがいなかったらどうなっていたかは想像に難くない。
だからこそ、早く強くなって少しでも早く終わらせないと。
……と、その前に……。
「管理人さんとお茶会だね！」
「そ、そうですね……。ですけど、まずはドクターとお話をしてからですからね？」
「うぅ……分かってるよぉ……」
「もう、しっかりして下さい先輩」
「はーい」
マシュに怒られてしまった。
でも仕方がないよね！
私にとっては大事なことだし。
それにしても……。
「……」
「どうかしましたか先輩？」
「ううん、何でもないよ。管理人さんとのお茶会は午後からだし、それまでに色々と片付けちゃおうか」
「はいっ、頑張りますね先輩！」
「あ、でもお腹空いちゃったから、先にご飯食べよっか」

「そうですね。先輩は先程起きたばかりですからね」
「それじゃ、食堂へレッツゴ――」

「ちょっと藤丸！　あなたどこほっつき歩いてるの！　皆探してたわよ！」

早速、食堂へ行こうとしていた私たちに声をかけてくる人がいる。
その声は高く、女性だと分かった。
振り返るとそこには銀髪の女性がいた。

「あ！　所長！」

## 運命を捻じ曲げられた者

「部屋を探してもいなかったから慌てて探したのに、マシュといたのね……。マシュ！　今度から報告するように！」
「す、すみません……」
「それで、何をしてたの？」
「はい。実は……」
私たちの目の前で叱ってくる銀髪の女性。
彼女の名前は「オルガマリー・アニムスフィア」。
このカルデアの所長……だった人だ。
彼女は一応、私達の上司でもあるのだけれど、そこに組織を束ねる威厳は微塵もない。
強いて言うなら、ドラマとかにいそうなちょっときつい口調の上司って感じかな？
そんな彼女なのだが……。
「ねぇ所長、ホントに大丈夫？　ついこの間まで幽霊状態だったんだよね？　そんなに大きな声出して大丈夫？」
「それに関してはあなたが持っていた特級の宝具が原因でしょう!?　あれのおかげで生きていられたから特に文句はないのだけれど……それでも怖かったのよ！」
「えぇ～……ごめんなさい」
「ふんっ、次からは気をつけなさい」
と、私が言ったように、所長はついこの間まで幽霊みたいな状態だったのだ。
それについては数週間ほどさかのぼる。

～～～

まカルデアが爆発し、それに巻き込まれたマシュを助けようとして一人燃え盛るカルデア内を爆走した後のこと。
何とかマシュと合流はできたものの、マシュの命は風前の灯火状態。
そんな時にレイシフトのアナウンスが鳴り響いて、私とマシュは特異点F『冬木』に飛ばされてしまったのであった。
周りを見れば、動く骸骨ばかりで殺されてしまうと思った時、今の様にサーヴァントの力を解放したマシュに助けられたのである(致命傷に関してはマシュに宿った英霊パゥワァのおかげで何とかなった)。
そんなマシュと行動を共にし、冬木の街を探索していたら、甲高い悲鳴が一つ。
それが所長だったってわけなのだ。
所長とはその時に初めて出会ったわけではなく、普通にカルデアの方でも出会っていた……のだが、その時の私はすさまじい睡魔に襲われていて、ブリーフィング中に居眠りをしてしまったのだ。
それを所長に見られてしまい(この時に限って最前列だった)、中央管制室を追い出されてしまったのだ。
これに関しては所長に非はない。
カルデアに入る時に、なんかすごい機械でギュオーンされた後遺症のせいで体調が悪くなったらしいからである。
それを知らない所長からしてみれば、大事な大事な会議で居眠りしている奴がいればそりゃ追い出したくもなるだろう。
特にあの時の所長って色々と追い詰められてたみたいだから、当たりがきつくなってしまったんだろう。
管制室を追い出された後は、体調が悪いことを気にかけてくれたマシュの案内で私用に割り当てられた個室に行ったのである。
そこでロマンに出会ったのだ。
ロマンのことは色々と割愛して……。
――その後だ、爆発が起きたのは。
話を戻すと、その爆発でレイシフトが誤作動を起こし、生き残って

いた私とマシュが特異点である冬木に転送された。
しばらく探索していたら、悲鳴が聞こえ、その先に何故か所長がいたのである。
その時は、英霊の力を覚醒させたマシュが骸骨の群れを蹴散らしてくれたので、大事にはならなかったんだけど、その時の私はまだ知らなかったんだ。
――所長にレイシフト適性はないということに。
そのことについては、大慌てで通信をつないでくれたロマンやマシュの指摘によって、所長のレイシフト適性が話題に上がったのだが、異常事態ということでいったん保留することにしたのである。
さらにその後は、英霊になりそこないである明らかに正気を失っているサーヴァント達と戦って負けそうだった時に、冬木で行われていた聖杯戦争の生き残りであるキャスターのサーヴァント「クー・フーリン（通称クーニキ）」の協力もあり、その場を切り抜け、特異点の大本であるだろう黒いセイバーさん「アルトリア・ペンドラゴン」との激戦を乗り越え、何とか特異点を修正したのであった。
あとはレイシフトで帰るだけ……そう思っていた時に、奴が来たのだ。
所長が敬愛する人物……「レフ」が、私たちをゴミでも見るかのような目つきで見下ろしていたのである。

〜〜〜

で別人のような存在に声をかけた。
そのレフらしき人物にマシュは警戒心をむき出しにする。
私も明らかにおかしい様子のレフを前にして警戒心を露わにした。
そんな私達のことなど露知れず、嬉しそうに話す所長。
「会いたかったわ！　あなたがいない間、どうやってカルデアを守っていけば分からなかったの！　予想外の事ばかりで頭がどうにかなりそうだった！　でもいいの、あなたがいればなんとかなるわよね？　だって今までそうだったもの。今回だって、私を助けてくれるんでしょう？」
縋りつくように、所長がレフの腕を掴む。
しかし、その手は振り払われる。
「ああ。もちろんだとも。本当に予想外の事ばかりで頭にくる」
「……え？」
レフの口から告げられた言葉はひどく冷たいものだった。
「その中でもっとも予想外なのは君だよ、オルガ。爆弾は君の足下に設置したのに、まさか生きているなんて」
「――――、え？　……レ、レフ？　あの、それ、どういう、意味？」
困惑する所長を置き去りに、レフは話を続ける。
私達をレイシフトさせた機械が所長の残留思念――『魂』を間違えてこの特異点に送り込んでしまい、かろうじて所長は存在しているということや、所長がカルデアへと戻れば死んでしまうこと……それらを残酷にも告げてきた。
そして、カルデアがどうなっているのかも……。
「今のカルデアがどうなっているのか見せてあげよう」
私達が回収するよりも前に、レフが手に入れていた聖杯を使ってカルデアへと空間をつなげた。
そこには真っ赤に染まった地球――『カルデアス』があった。
「人類の生存を示す青色は一片もない。あるのは燃え盛る赤色（せきしょく）だけ。あれが今回のミッションが引き起こした結果だよ」
「良かったねぇマリー？　今回もまた、君のいたらなさが悲劇を呼び起こしたワケだ！」

「ふざ――ふざけないで！」
所長が叫ぶ。
だが、それも虚しく、所長の体は宙に浮いてカルデアスへと引き寄せられていく。
レフが魔術を使っているのだろう。
その力はすさまじく、私よりもすごい魔術が使える所長が抵抗もできずに、どんどんと引き寄せられている。
このままでは――。
「――――」
「え――」
そう思っていた時には私の体は動いていた。
さっきまで殺されかけていた恐怖を押し殺して、脇目を振らずに所長の下へと走っていく。
「ははっ！　サーヴァントはおろか、魔術師ですらない小娘に何ができるというのだ！」
レフが何か言ってくるが、無視して突っ走る。
分かってるよ。
私程度じゃ何もできそうにないって。
でも――。
「所長！　手を伸ばして！」
「っ！」
無理だからって諦めてたら、何もかもできなくなる！
私は所長に向かって手を伸ばす。
その手を所長が掴み――。
――グイッと引っ張られる。
「うわぁ!?」
そのまま所長と一緒にカルデアスに引き寄せられてしまう。
なにこれ!?　トラックに引っ張られてるみたい!?
必死で踏ん張っても、まるで効果がない。
「ははははは!!　いいぞぉ！　最高だ！　虫けらが虫けららしく足掻いているぞ！　実に滑稽だ！　ははははははははは！」

レフの笑い声が聞こえてくるけど、それに構っている余裕はない。
「所長踏ん張って！　死んじゃうよ！」
「……なんで……なんで助けるの……」
「助けちゃダメなの!?　死にたくないって言ってたでしょ！　なら生きようよ！」
「……無理よ……強すぎるのよ彼の力は……あなた一人じゃどうしようもない……」
　さっきまで死にたくないと叫んでいた人の発言なのかと疑ってしまうほどの弱気な発言に思わず語彙を荒げてしまう。
「だから見殺しにしろって!?　そんなことできるわけないでしょ!!」
「……」
「私は生きるために戦う！　所長も生きて帰るために戦おう！　一緒に頑張ろうよ！　それともここで死んでもいいの!?」
「……いいわけ、ないわよ！　私はまだ生きていたい！　認めてもらいたいの！」
　所長が生気を取り戻した表情で必死に抗う。
　その時だった。
　すごい力がその場に巻き起こったのは。

～～～

『所長!?』
管理人さんの本は、私のバッグから飛び出したかと思うと、所長を吸収し――
『ぐあっ!?』
強力な魔力を放って、レフの右半身を不思議な力で捻り潰した。
そのことに私達が呆然としている間もなく、ロマンの通信が入ったので、私達はレイシフトを行い、何とか無事にカルデアへと戻ってこれたのであった。
「ほんと、とんでもない事件に巻き込まれましたよね……でもまあ、おかげでこうして帰ってこられたんですし、結果オーライですね」
「……そうよね」
なんだか釈然としない様子の所長だったが、とりあえずは無事だったので良しとする。
「それで、これからどうするの所長？　ダヴィンチちゃんと管理人さんが色々といじってくれたおかげで体の調子はいい感じなんでしょ？」
「ええそうね……人の体がなくなったからといって、天才達が好き勝手してくれたものだから、爆発する前以上に調子がいいわよ……」
所長の顔色は悪くない。
本当に健康そのものである。
腕を組んで考えているのだが、その腕に乗るいい感じのモノは非常にうらやましい。
私、これでも大きい方なんだけどなぁ……。
そんなことを考えていると、私のお腹が「ぐぅ～……」っと、盛大に鳴った。
「あなた……朝食は？」
「あはは～、まだです～」
「ハァ……私が皆に連絡しておくから、先に食堂で朝食をとってきなさい」
「ありがとね所長。それじゃね～」
「すみません所長……」

私達は所長に別れを告げると、軽い足取りで食堂へと向かうのであった。

～～～

## 人理修復Ａチーム

――『Ａチーム』。
決して特〇野郎Ａチームなどではなく、このカルデアが行っている「人理修復」、その主軸となるはずだったメンバーの総称だ。
本来なら私一人ではなく、彼らが最前線で特異点修復を行う予定だったのだが……レフのせいで全員が意識不明の重体となってしまった。
そんなことが起きていながらも、カルデアはマスター候補の中で唯一生き残っていた私を、急遽最前線に立たせたのである。
そんな彼らなのだが、数日前から管理人さんが所長の蘇生と並行して治療にあたっていたのだ。
「はい。ですが、いまだに目を覚ます気配がない方たちもいらっしゃって……」
「そっか……その起きてる人たちは？」
「はい。Ａチームのリーダーであるキリシュタリア先輩を筆頭に、カドック先輩、ヒナコ先輩が目を覚ましています。ただ……」
「ん？　ただ……？　どうしたのマシュ？」
マシュの歯切れの悪い言葉に私は首を傾げる。
すると彼女は困ったような顔で答えてくれた。
「はい。キリシュタリア先輩がなんですけど……」
「ですけど？　そのキリシュタリアさんがどうかしたの？」
「ええっと……なんと言えばいいのか……」
「？」
ますます訳が分からなくなる。
そのキリシュタリアさんがどうしたというのか。
「ハッ！　もしかして爆発の衝撃で頭が……！」
「そうではないです……私が説明するより実際に見てもらったほうが……」
テンプレよろしく記憶を失うか、性格が変わるほど頭がおかしくなってしまったのか……そんな推察は、苦笑したマシュによって否定

される。
私はマシュに案内されるがまま、食堂へと連れられた。
「ここにキリシュタリア先輩達がいます……」
「うん……」
そこは食堂。
すでに大勢の職員たちが集まっている中、一際目立つ３人の人物がいた。
「ほら！　いい加減離れなさいキリシュタリア！」
眼鏡をかけていて、知的なお姉さんという雰囲気を漂わせているけど、腰の入った引っ張り方からして絶対に違うだろう女性。
「うぅむ、熱心なのはいいけど、コートが破れそうだから手を放してくれるかな？」
困り顔で誰かに引っ付かれている管理人さん。
そして――
「ハァハァ……もっと聞かせてくれ！　アルゴー船での冒険はどうなったんだ!?　インド神話は!?　最古の王との物語はどうやって始まったんだ!?」
「……ナニアレ？」
まるで子供のようにキラキラとした目をしながら、管理人さんへ質問攻めをしている男性。
これがマシュの言う「起きていて、かつ元気そうな人たち」なのだろうか？　私は困惑しながら、マシュに尋ねた。
「あの人が……？」
「はい……管理人さんにくっついてる人が、カルデアが誇るＡチームのリーダーであるキリシュタリア先輩――『キリシュタリア・ヴォーダイム』さんです……」
「……はい？」
……え？　はい？
……ファッ!?
チョ、チョチョチョチョットマッテクダサイヨオヤッサン！
え!?　あれＡチームのリーダー!?　仮面〇イダーにあこがれる少

年じゃなくて!?
私がさっきまで思っていたキリシュタリアさんの印象は、Aチームのリーダーらしく、エリートで、非常に落ち着いていて、冷静沈着な人だったはず……。
それが目の前で興奮気味に管理人さんに話しかけている青年と同一人物だなんて……!
しかもキリシュタリアさんってば、よく見るとイケメンだし、なんかこう……すごいオーラがあるし、それがあんな少年みたいに目を輝かせてたらギャップがすごすぎるんだけど!?
それにしても、なんでこんなことに……。
「マシュ、キリシュタリアさんはどうしてああなってるの?」
「はい、実はですね……」
マシュによると、キリシュタリアさんは元々リーダーらしいクールな性格……だったのだが、目が覚めて早々、治療の終わった管理人さんに、それはもう熱烈なアプローチを仕掛けたのだという。
「キリシュタリア先輩ったら、『君が書いてきた物語の話をしてくれ!』って、さっきからずっとあんな感じなんですよ……」
「なるほど……確かにそれじゃあ、起きてるっていうか、別人だよね……」
しかしなぜ急にあんな風になってしまったのだろう。
マシュの話だと、目覚めてからキリシュタリアさんがおかしくなったのは今が初めてだという。
ならば何か原因があるはずだが……原因はおそらく管理人さんで間違いないだろう。というか絡まれてるし……。
だけど一体何が原因なのかまでは分からない。
だから私は、とりあえずキリシュタリアさんに聞いてみることにした。
「あの〜……」
「ん? おぉ! 君が立香君か! 初めましてだね。私はキリシュタリア・ヴォーダイム。同じカルデアの一員として頑張っていこう!」
キリシュタリアさんはこちらを振り向くと、爽やかな笑顔を浮かべ

ながら挨拶をしてくれた。
ｏｈ……イケメエン……。
「は、初めまして。私は藤丸立香と言います。よ、よろしくお願いします……」
あまりの眩しさにちょっと引いてしまう私だったが、なんとか返事をすることが出来た。
するとキリシュタリアさんはニッコリと笑いかけてくれた。
「うん。よろしく頼むよ」
……イケメンだ。
イケメンで好青年とか、この人ほんとに魔術師？
ドクターとか魔術を知ってるスタッフのみんなからは、「魔術師は基本クソだから気を付けて」って言われたんだけど……なんていうか、どこかの農園で汗水流してリンゴ作ってそうなんだけど……。
しかしそんな私の思いとは裏腹に、キリシュタリアさんは管理人さんへと向き直った。
「それで、君はいつになったら私に物語を話してくれるんだい!?　いや……管理人さん！　あなたの書いた話がとても気になってるんです！　是非！　他の話も聞いてみたいんだ！」
「えっと……その……」
いつも保護者として余裕を崩さなかった管理人さんが押されてる……!?
「ねぇいいだろう！　聞かせてくれないか!?　あなたが書いたという『ソロモンの指環』の物語を!!」
「う、うん……分かったから……話すから少し離れてくれないかな……？」
「ん？　あぁ、すまなかった。つい興奮してしまって……。ほら、ヒナコも離れてくれ。これから管理人さんが面白い話をしてくれるぞ！」
「人の苦労を知らないで……！　……まぁ、落ち着いたんならいいわよ」
キリシュタリアさんの言葉に、眼鏡をかけた女性が渋々といった様子で離れていく。

どうやら彼女こそがＡチームのメンバーである「芥ヒナコ」さんらしい。
うん、苦労人だね（確信）。
「じゃあさっそく聞かせてもらおうじゃないか！　なにせここには娯楽が少ないんだ。ぜひ聞かせて欲しい！」
「……分かった。と、言いたいところなんだが、そろそろミーティングの時間だ。話すのは今度にしよう」
「そ、そんな……！」
管理人さんの言葉にｏｒｚの体勢で落ち込むキリシュタリアさん。
その姿はまるで捨てられた子犬のようだった。
キリシュタリアさんのイメージが崩壊していく……イケメンなのか少年なのか子犬なのか……これもうわっかんないね……。
（ねぇマシュ。ほんとに……ほんとぉおおおおおに、あの人がエリート集団Ａチームのリーダーなんだよね……？）
（残念ながらそうです……特撮少年のように目を輝かせていても、あれはＡチームのリーダーであるキリシュタリア先輩です……）
マシュは遠い目をしながら言った。……なんか、ごめんなさい……。
「おい」
「え、どこから声が……？」
「ハァ……こっちだ。お前の後ろ」
「後ろ……」
振り返るとそこには、先程まで無言で立っていただけの男がいた。
白い髪に鋭い瞳をした男性……おそらくこの人もＡチームの人なのだろう。
こう言っては何だが、なんとも根暗な雰囲気をまとっている。
「えっと……あなたは……？」
「……カドック・ゼムルプス。Ａチームのメンバーだ。一応な……」
「あ、はい。よろしくお願いします……」
「……フンッ。せいぜい足を引っ張らないようにしろよ。……それと、僕は僕で勝手にやるから、口出しはしないでくれ」

それだけ言うと彼は、私たちに背を向けて管制室へと向かっていった。
「……」
「えぇっと……悪い奴ではないんだ。ただちょっと人付き合いが苦手というか、不器用というか……」
「いえ、大丈夫ですよキリシュタリア先輩。私、ああいう人には慣れてるんで」
カドックさん、どうしたんだろう……？
さっきまでは全然喋らなかったのに、急に話し掛けてきたり……何かあったのかな？
そんなことを思っている間にも、キリシュタリアさんから解放された管理人さんが口を開く。
「ふむ……彼についてはまた今度だ。今はミーティングに行こうか。……っと、そうだ。忘れるところだった。君たちに渡すものがあったんだ」
そう言って管理人さんは、虚空に腕を突っ込み、本を数冊取り出した。
その現象にキリシュタリアさんが目を輝かせていたりするが、管理人さんは無視してキリシュタリアさんとヒナコさんに本を手渡した。
よく見れば、私が初めて管理人さんと出会ったときに手渡された本と装飾が似ていた。
「これは……？」
「ちょっと特殊な本でね。今は真っ白だが、いずれ物語ができる。それまで大切に持っていてほしいんだ」
「……はい、分かりました……。でも、どうしてですか？　私は貴方に認められるほどの何かをしたわけではないのですが……」
「これからを期待して、だ。それに、その本の物語はきっと君たちの役に立つはずだ」
「……はぁ」
いまいち納得していないような表情のキリシュタリアさんだったが、管理人さんはそれを気にせず、今度は私たちに向かって微笑みか

けた。
「じゃあ、管制室で会議を始めようか。今日の議題は『第二特異点に向けて。複数のマスター体制での攻略』だ」
私たちは管理人さんについていき、管制室へと向かった。
あ、ごはんどうしよ……。

# 番外編
## Ｚｅｒｏ編：イレギュラーの介入

（あぁ……。なんでこんな目に……）
重力にひかれて落下していくのを感じながら、少女――遠坂……いや、「間桐桜」は、自分の不幸を呪った。
その顔には、深い絶望が張り付いていた。
背後には気味の悪い蟲の大群があり、落ちてくる桜[餌]を今か今かと待ち構えている。
その様は、さながら蜘蛛の巣に落ちてきた蝶だった。
（……姉さん。お母さん。お父さん……）
最後に思い浮かぶのは、家族の顔。
それはもう二度と戻らない日々。
今目を閉じれば、すべてが元に戻るかもしれないという淡い期待。
（……）
だが、そんな都合の良いことはありえない。
聖杯戦争。七人の魔術師による殺し合い。
落下していく自分を見下ろす老人――「間桐臓硯」の愉悦にゆがんだ表情を見て、それが現実だと悟る。
この老人にとって、自分はただの道具なのだ。
あの夜……この家に養子に出された時から、ずっと自分を縛ってきた呪いそのものなのだ。
（姉さん、お母さん、お父さん……誰か――）
だが、それでも……少しでもすがりたいと願ってしまうのは罪なのだろうか？
今まで信じていたモノが崩れ去り、拠り所を失い、どうしようもなく弱くなった自分がいた。
だから、助けを求めてしまうのも仕方がないのだ。
誰でもいいから助けて欲しい。
誰でもいいから優しくして欲しい。

何でもするから、お願い――。
――『分かったよ』
「え――」
「何――」
――それに応えた者がいた。
誰かの言葉がその場に響き渡り、それに驚いた全員が何かの気配を感じ取った。
その声色は優しく、遍くすべての人々が救いを求めるように耳を傾けるだろう。
それはある意味で、絶対者の宣告だった。
――『君の願いを聞き届けよう』
その言葉とともに、世界が変わる。
視界を覆う闇は消え失せ、見上げる空は白一色に染まっていく。
そこは果てのない空間。
どこまでも続く無限の回廊。
そして、そこには無数の本棚があった。
大小様々な大きさを持つ本棚たちは、それぞれが不可思議な力で浮遊している。
だがそれらは互いに干渉することなく、まるで星空のようにまばらに存在していた。
「こ、こは……！」
「きゃあっ！」
臓硯は知識があるがゆえにその本棚が浮遊する世界を構築する魔力の密度を感じ取ったことで驚愕に顔を染め、桜は浮遊感から解放され落下し始めた感覚に悲鳴を上げる。
――そんな桜を抱き止めた誰かがいた。
一瞬前まで何もなかったはずの場所に、いつの間にか一人の青年が現れていたのだ。
その姿を見た瞬間、臓硯の顔色が激変した。
なぜならそこにいる男は、彼が最も恐れていた存在だったからだ。
宝石のような赤みがかった黒い髪に優しげな容貌。

黒を基調とした魔法使いのフード付きローブと貴族服の融合したような衣装に身を包み、右手には煌びやかな本を携えている。
創作上での魔法使いそのままのような姿だったが、しかしそれは現実に存在するはずがなかった。
なぜなら彼は人間ではなく、この世界に在ってはならない異物なのだから。
「管理、人……!?」
「……久しぶりだねゾォルケン。少し、変わってしまったね……」
臓硯の呟きに応えることもなく、男――管理人は腕の中の少女を見下ろした後、彼の姿を見てそう言った。
その瞳は慈愛に満ちたもので、見る者すべてを安心させる力を持っている。
だが臓硯だけは違った。
彼は目の前に現れた存在が何なのか理解していた。
だからこそ恐怖に震える。
この男が現れた意味を理解してしまったがために。
「彼女のあり得たかもしれない未来は見させてもらった。まさか君ほどの魔術師でも、あんなことをすることになるなんて少しは予測していたけど……こう、実際に目にすると心に来るものがあるね……」
管理人が一歩近づくごとに、臓硯は後ずさった。
彼に睨まれただけで心臓を鷲掴みにされた気分になる。
それは、生物として当然の反応だった。
――『世界の外側からの来訪者』。
それが管理人だと、はるか数百年前に本人から教えられていたのだから。
故に、彼に対して臓硯ができる唯一の抵抗は、ただ怯えることだけだった。
だが、管理人はそんな彼を哀れむように微笑んだ。
まるで子供を見る親のように。
それがますます臓硯を混乱させた。
――一体何を考えているのか？　なぜ自分にそのような表情を向

ける？
そんな彼に、管理人はそっと手を差し伸べた。
まるで救いの手を伸ばすかのように。
そして――
「ごめんね」
臓硯の意識はその言葉を最期に、完全に消滅した。
それは、あまりに呆気ない幕切れだった。

～～～

ある日、また新たな土地に出向こうとしていた時だった。
親しい人であり、初恋の人でもある女性「遠坂葵」さんの娘である桜ちゃんが、間桐の養子に出されたということだった。
そしてそれを決めたのは、彼女の父親である「遠坂時臣」であり、桜ちゃんの了承を得ず、半ば強制的に送り出したという。
正直言って、許せなかった。
桜ちゃんはまだ十歳にも満たないというのに、勝手に養子に出してしまうとはどういうことだ？
しかも養子先の家があの『間桐』だというではないか。
あの蟲使いの一族が養子先では、どんな扱いを受けるかは火を見るより明らかだった。
すぐにでも彼女を助け出すべきだと思った。
――しかし、俺にはそれをするだけの力がなかった。
俺の持つ魔術のほとんどは平凡の枠すら出ておらず、それ以外の分野に関して言えば、まったくといっていいほど役に立たない。
いや、はっきり言おう。
――俺は、無力だった。
だが、彼女の代わりに苦痛を味わってもいいと思った。
彼女が受けるであろう仕打ちのすべてを受け入れようと誓った。
そして、間桐の家に着いた俺は――
「こうやって猫のような手で野菜を切るんだ。あまり包丁を上げずに、少しずつ切るように」
「こう、ですか？」
「そうそう。いい感じ。その調子だよ桜ちゃん」
――なぜか間桐の屋敷にいた正体不明の男と桜ちゃんが料理をしている光景を見て固まった。
いったいこれはどういうことなのか？
屋敷の中に入ったら桜ちゃんがいて、その隣にいる男は誰なんだ？
そして肝心の臓硯はどこへ行ったんだ!?
「お、おま、お前!?」
「ん？　君は……あぁ、君が間桐雁夜か。台所で大きな声を出すのは

やめたまえ。桜ちゃんがびっくりするだろう？」
「あ、そ、それはすまん……じゃなくて！」
あまりにも平然とした様子に思わず謝ってしまったが、そんな場合じゃない。
この男は何者だ!?　こんな男がこの屋敷に出入りしていたなんて聞いていないぞ！
そんな俺の疑問を感じ取ったのか、男は軽く肩をすくめてから答えた。
「君が探しているであろうゾォルケン……今は臓硯だったね、はもういないよ。僕が殺した」
「……は？」
「さすがに旧友とはいえ、あそこまで堕ちてしまえば、もう真っ当にはなれない。そう判断して滅ぼさせてもらったよ」
たんたんと野菜を刻みながら臓硯を殺したと語る男。
その言葉に嘘はないと直感的に理解できた。
同時に、この男にだけは絶対に勝てないと悟る。
目の前に立つこの男の底知れなさに恐怖を覚える。
だが、それ以上に――
――こいつなら、桜ちゃんを救ってくれるかもしれない。
そう思ったんだ。
「あ、あんたの名前は……」
「僕の名前かい？　そうだね……」
「『管理人』とでも呼んでくれ」
これが、救世主――『図書館の管理人』との出会いだった。